八千代町埋蔵文化財調査報告書10

八千代町松本地区所在

兎久保・古薬師・土宮後遺跡
発掘調査報告書

2002

八千代町教育委員会

八千代町埋蔵文化財調査報告書10

八千代町松本地区所在

兎久保・古薬師・土宮後遺跡
発掘調査報告書

２００２

八千代町教育委員会

あ い さ つ

かなりの曲折がありましたが、松本西部の畑地帯総合整備事業の同意のとりまとめが出来て、実施されることになったのはまことに喜びに耐えません。さて事業開始に当たっては、遺跡の存在が期待されると言うことで発掘調査をすることになりました。調査は畑総事業が大きく地形を変えるものではないと言うことで、平成13年9月6日から10月5日までの期間で、ごく一部分の調査に止まったのですが、それでも沢山の遺跡が発見され素晴らしい成果が上がって、ここに報告書を作成する段階に至ったことは、まことに喜びに耐えません。調査を担当された「日考研茨城」さんには深く感謝申し上げます。予算要求の折りに、「どうせ何もでやしないよ」とは長部局のお話でしたが、調査はしてみるものだと思います。この地帯は縄文時代から、古墳時代、奈良、平安時代と非常に長い期間にわたって集落が存在したのではないでしょうか。もっと大規模に発掘すれば、おそらく大きな集落の様子まで、明らかになったのではないでしょうか。

もともと松本地内には、昔から呼ばれていた古い地名の場所が沢山ありました。今度調査をした遺跡も「兎久保」――うさぎぼっこ、「古薬師」、「土宮後」――どっこさま、等と遺跡を感じさせる地名があったところであります。このほかにも松本には、沢山の古い地名が残っております。これらに調査のメスが入ればと思えば、夢の膨らむ思いであります。松本や水口については、幸いというか土取り業者などの乱掘からも被害が少なかったのは、遺跡保存の上からはひとつの救いであります。

この報告書によって、町民の皆様の御関心が少しでも高まることを期待してやみません。

平成14年3月

八千代町教育委員会教育長　　宮本　邦朋

例　　言

1．本書は、県営畑地帯総合整備事業下結城地区に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本書には、下記の遺跡を収録した。

・兎久保遺跡（町遺跡番号：155）　茨城県結城郡八千代町大字松本字西ノ谷台354外

・古薬師遺跡（町遺跡番号：156）　茨城県結城郡八千代町大字松本字古薬師65外

・土宮後遺跡（町遺跡番号：157）　茨城県結城郡八千代町大字松本字土宮後327外

3．発掘調査から報告書作成に至る業務は、八千代町教育委員会が有限会社日考研茨城に委託して実施した。なお発掘調査に先立ち、八千代町教育委員会が山武考古学研究所に委託して、試掘調査を実施している。

4．調査期間は下記のとおりである。

・試掘調査：平成13年1月15日から1月31日

・発掘調査：平成13年9月6日から10月5日

5．調査組織等は下記のとおりである。

八千代町教育委員会教育長　宮本邦朋

事務局　草間和男（生涯学習課長）　山野井哲夫（主査）　塚原勝美（主査兼文化係長）
佐野史子（文化係主任）　新関博子（臨時職員）

(1)試掘調査

調査担当者　有山径世（山武考古学研究所）

調査作業員　青谷　好　山中勝男　水垣光江

(2)発掘調査

調査担当者　大渕淳志（有限会社日考研茨城）

調　査　員　遠藤啓子　大渕由紀子

調査作業員　青谷　好　山中勝男　小竹常吉　柳幸四郎　水垣光江　青木晴巳　生井光子
青木京子　上野シゲ　中山正一　大久保信夫　名古屋拓磨　高野とみ江
槇島よね　青木　清　永嶌政光　大森哲也　春山　章

6．本書の編集・執筆等については下記のとおりである。

・編　　集：小川和博、大渕淳志（有限会社日考研茨城）

・執　　筆：小川、大渕、山野井

・整理作業：遠藤啓子、酒井悦子、大渕由紀子（有限会社日考研茨城）

7．本遺跡出土の遺物については、千代川村教育委員会の赤井博之氏のご教示をいただいた。

8．本調査にかかる記録類及び出土遺物は、すべて八千代町教育委員会が保管している。

9．試掘調査及び発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の関係機関、関係者のご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略、順不同）

青木甚市　水垣靖市　青木良夫　野口賢二　野口芳松　青木昭五郎　高橋勝一　青木　眞

生井喜太郎　水垣英夫　柴久喜友衛　大里定義　青木正三　小竹　豊　飯山藤枝
青木寿夫　青木　昇　倉持誠一　青木森男　青木哲夫　青木　博　石塚賢治
増山信一　羽鳥弥七　桝井明雄　松田一弘　飯山重正　青木良助　前野平治　遠藤　茂
小竹正男　水垣喜久夫　野口竹三郎　前野　節　水垣正弘
茨城県教育庁文化課　茨城県下館土地改良事務所　八千代町耕地課

＊凡　例

1．本書に使用した地形図は、下記のとおりである。
・Fig.1・2　八千代町都市計画図　1／2,500
・Fig.3　　茨城県遺跡地図　　1／25,000

2．本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

3．本書の遺構土層図(セクション)、横断面図(エレベーション)の左上に記載した数値は、標高を表示してある。

4．本文中の遺構である竪穴住居跡には一連番号を付し、その前に「SI」をまた溝状遺構には「SD」を、井戸跡には「SE」を、土坑には「SK」を、竪穴状遺構その他には「SX」、柱穴状遺構には「P」の分類記号を表記した。
参考：奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告書Ⅱ」

5．本書で使用した色調については、「新版　標準土色帖　2000年版」(農林水産省　農林水産技術会議事務局監修1999)を使用した。

目　　次

あいさつ　　八千代町教育委員会教育長　宮本邦朋
例言・凡例
目次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　試掘調査の概要 …… 1
　第３節　発掘調査の概要 …… 4
　　１　調査の方法 …… 4
　　２　調査の経過 …… 5
　　３　日誌抄 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 6
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 6
　第２節　周辺の遺跡 …… 6

第Ⅲ章　兎久保遺跡 …… 8
　第１節　概要 …… 8
　第２節　検出された遺構と遺物 …… 8
　　１　竪穴住居跡 …… 8
　　２　溝状遺構 …… 8
　　３　井戸跡 …… 9
　　４　土坑 …… 10

第Ⅳ章　古薬師遺跡 …… 11
　第１節　概要 …… 11
　第２節　検出された遺構と遺物 …… 11
　　Ａ　調査区２ …… 11
　　１　竪穴住居跡 …… 11
　　２　土坑 …… 19
　　３　柱穴状遺構 …… 23
　　Ｂ　調査区３ …… 23
　　１　土坑 …… 23
　　２　溝状遺構 …… 39
　　３　竪穴状遺構 …… 40
　　４　柱穴状遺構 …… 42

第Ⅴ章　土宮後遺跡 …… 45
　第１節　概要 …… 45
　第２節　検出された遺構と遺物 …… 45
　　１　竪穴住居跡 …… 45
　　２　土坑 …… 49
　　３　溝状遺構 …… 50
　　４　竪穴状遺構 …… 52
　　５　柱穴状遺構 …… 53

第Ⅵ章　まとめ …… 54

挿図目次

Fig.1　試掘調査トレンチ設定図 …… 2
Fig.2　試掘調査トレンチ実測図（1/300）…… 3
Fig.3　発掘調査区設定図 …… 4
Fig.4　遺跡分布図（「茨城県道路地図・地名表」より）（1/25,000）…… 7
Fig.5　兎久保遺跡遺構全体図 …… 8
Fig.6　住居跡SI-01 …… 9
Fig.7　溝SD-01・02 …… 9
Fig.8　井戸跡SE-01・02 …… 10
Fig.9　土坑SK-01・02 …… 10
Fig.10　古薬師遺跡遺構全体図 …… 11
Fig.11　住居跡SI-01（1）…… 12
Fig.12　住居跡SI-01（2）…… 13
Fig.13　住居跡SI-01（3）…… 14
Fig.14　住居跡SI-01（4）…… 15
Fig.15　住居跡SI-01（5）…… 16
Fig.16　住居跡SI-02、土坑SK-07 …… 17
Fig.17　土坑SK-01・02・03・04・05 …… 18
Fig.18　土坑SK-08・09・10・11・12 …… 20
Fig.19　土坑SK-39・40・41 …… 22
Fig.20　柱穴状遺構P1・2・3・113・114・115・116・117・118 …… 22
Fig.21　古薬師遺跡図割図 …… 23
Fig.22　土坑SK-13・14・15・16・36
柱穴状遺構P4・5・14・15・16・17・82・83・87・88・92 …… 24
Fig.23　土坑SK-14・15・16・36
柱穴状遺構P4・5・14・15・16・17・82・83・87・88・92 …… 25
Fig.24　土坑SK-17
柱穴状遺構P6・7・8・9・10・11・12・13・19・20・22・28・
41・84・86・89・90・91・94 …… 26
Fig.25　土坑SK-18・19・20・21・22・23・24・27
柱穴状遺構P18・21・23・24・25・26・27・29・30・31・32・
33・34・35・36・37・38・39・40・42・43・44・45・46・
47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・
60・62・79・80・85・112 …… 27
Fig.26　土坑SK-18・19・20・21・22・23・24・27 …… 28
Fig.27　柱穴状遺構P18・21・23・24・25・26・27・29・30・
31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・42・43・
44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・
56・57・58・59・60・62・79・80・85・112 …… 30
Fig.28　土坑SK-25・26・27・32・33・34・35
柱穴状遺構P61・74・75・81 …… 31
Fig.29　土坑SK-30
柱穴状遺構P71・72・73・76・78 …… 32
Fig.30　土坑SK-28・29・31
柱穴状遺構P67 …… 33
Fig.31　土坑SK-37
柱穴状遺構P63・64・65・66・68・69・70・77・95 …… 34
Fig.32　土坑SK-38
柱穴状遺構P93・97・98・99・101・105

竪穴状遺構SX-01 …… 36
Fig.33 竪穴状遺構SX-01 …… 37
Fig.34 柱穴状遺構P96・100・102・103・104・109・110・111 …… 38
Fig.35 柱穴状遺構P106・107・108 …… 39
Fig.36 溝状遺構SD-01 …… 40
Fig.37 柱穴状遺構P10出土遺物 …… 40
Fig.38 土坑SK-06・10・29・31（墓坑） …… 41
Fig.39 土宮後遺跡遺構全体図 …… 47
Fig.40 住居跡SI-01 …… 48
Fig.41 住居跡SI-02 …… 48
Fig.42 住居跡SI-03 …… 50
Fig.43 住居跡SI-04 …… 50
Fig.44 土坑SK-01・02・03 …… 52
Fig.45 溝SD-01 …… 52
Fig.46 柱穴状遺構P-1・2・4・5・6 …… 53
Fig.47 柱穴状遺構P-3 …… 53
Fig.48 竪穴状遺構SX-01 …… 54

表目次

Tab.1 柱穴状遺構一覧表 …… 43
Tab.2 出土遺物観察表 …… 45
Tab.3 柱穴状遺構一覧表 …… 55

図版目次

PL.1 遺跡群遠景、兎久保遺跡（調査区1）全景、古薬師遺跡（調査区2）全景、
古薬師遺跡（調査区3）全景
PL.2 土宮後遺跡（調査区4）全景、土宮後遺跡（調査区5・6）全景、
兎久保遺跡竪穴住居跡SI01
PL.3 兎久保遺跡井戸跡SE01、古薬師遺跡竪穴住居跡SI01、古薬師遺跡竪穴住居跡SI01
PL.4 古薬師遺跡竪穴住居跡SI01、古薬師遺跡竪穴住居跡SI01カマド、
古薬師遺跡竪穴住居跡SI01
PL.5 古薬師遺跡竪穴状遺構SX01、古薬師遺跡竪穴状遺構SX01、
古薬師遺跡柱穴状遺構群（調査区3）
PL.6 古薬師遺跡土壙墓SK29、土宮後遺跡竪穴住居跡SI01・02、
土宮後遺跡柱穴状遺構P3
PL.7 古薬師遺跡 1～13 SI01
PL.8 古薬師遺跡 1～7 SI01、8 SK11、9 SK07、10・11 SK14、12 SK41、
13～15 P10、16 P63
PL.9 古薬師遺跡 1～13 SX01
PL.10 土宮後遺跡 1～3 SI01、4～7 SI02、8～10 SI03、11～13 SI04、
14 P3、15～17 SX01

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成12年11月17日、茨城県下館土地改良事務所から県営畑地帯総合整備事業下結城地区内における埋蔵文化財の照会があった。この地区内には、兎久保遺跡、古薬師遺跡、土宮後遺跡の3か所の周知の遺跡が所在しているため、埋蔵文化財の取扱いについて協議を開始した。

まず、遺構の存在とその広がりを確認するため、試掘調査を実施することになった。試掘調査は、八千代町教育委員会が山武考古学研究所に委託して、平成13年1月15日から1月31日にかけて実施した。その結果、竪穴住居跡や土坑などの遺構が確認され、台地の中央部ではなく縁辺部に広がりを見せていることが分かった。

当初、総事業面積約10万㎡のうち調査の対象とした面積は、工事によって遺構に影響が及ぶと考えられる道路・水路になる部分約4,000㎡であったが、試掘調査の結果と工事の方法について協議した結果、1,855㎡を対象として遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。発掘調査は、八千代町教育委員会が有限会社日考研茨城に委託して、平成13年9月6日から10月5日にかけて実施した。

第２節　試掘調査の概要

試掘調査は、幅2m・長さ25～80mのトレンチを、兎久保遺跡に2本(160㎡)、古薬師遺跡に7本(626㎡)、土宮後遺跡に6本(524㎡)、合計15本(1,310㎡)設定した。

試掘調査の結果、兎久保遺跡からは、隅丸長方形の土坑9基の他円形の土坑及びピット５基の遺構が検出された。遺物は、土師器片、中・近世の内耳鍋片、釘が出土した。時期は奈良・平安時代から中・近世にかけての遺跡である。

古薬師遺跡からは、柱列2列、焼土跡2か所、溝状遺構1条、土坑及びピット126基、竪穴状の遺構2か所が検出された。遺物は、土師器片、須恵器片、鉄滓、釘、陶器片が出土した。奈良・平安時代を中心とした遺跡と考えられる。

土宮後遺跡からは、竪穴住居跡5軒、溝状遺構1条、焼土跡1か所、竪穴状の遺構1か所、土坑及びピット32基が検出された。遺物は、土師器片、中世内耳鍋片、近世陶磁片、椀形鉄滓が出土した。竪穴住居跡は出土遺物から古墳時代前期のものと考えられ、その分布は南側の傾斜地に広がっていると考えられる。また椀形鉄滓が出土したことから、製鉄関連の遺構の存在も考えられる。当遺跡は古墳時代前期、奈良・平安時代から中・近世にかけての遺跡である。

＊参考文献

「茨城県八千代町兎久保遺跡、古薬師遺跡、土宮後遺跡　－試掘調査報告書－」

山武考古学研究所　平成13年2月

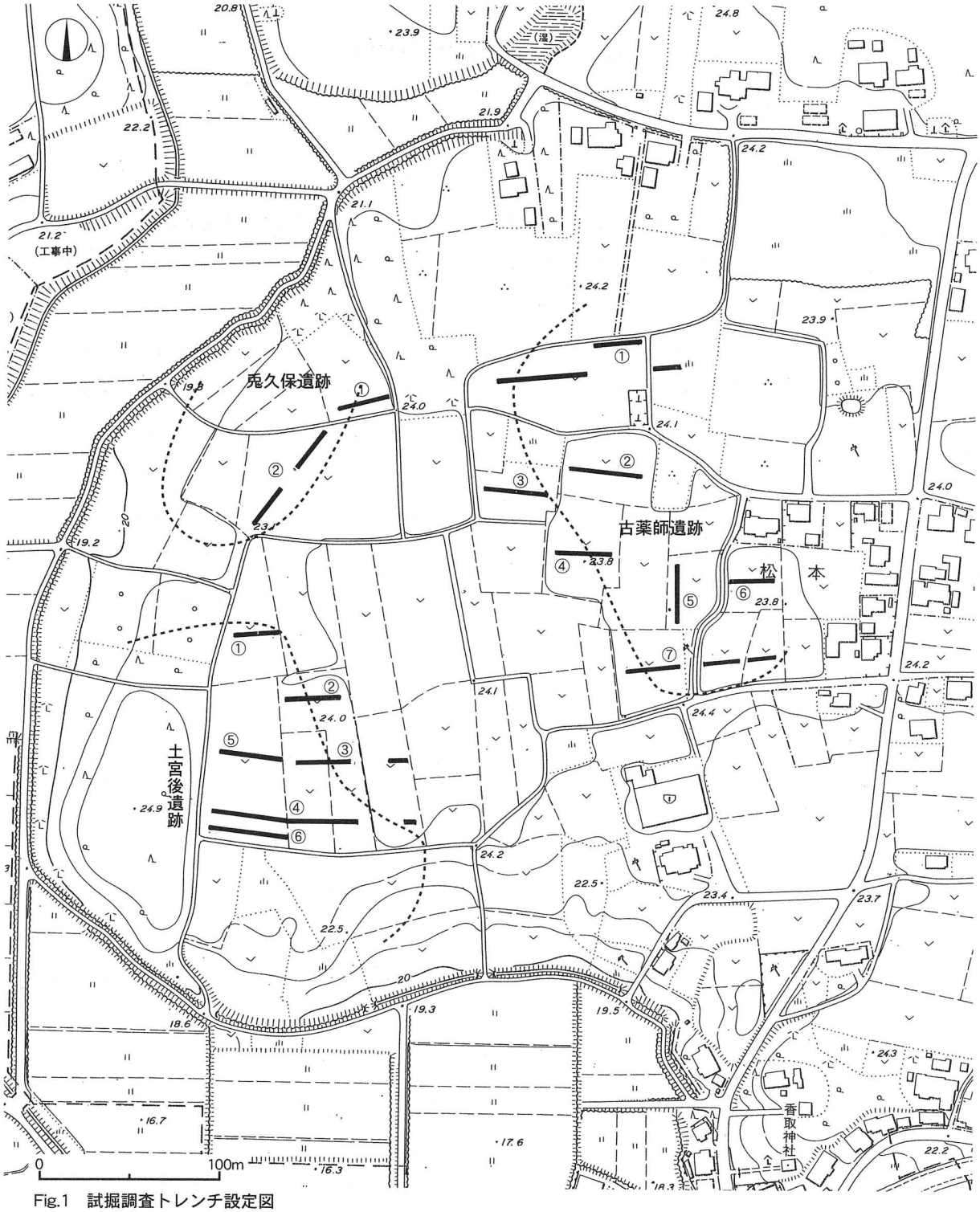


Fig.1　試掘調査トレンチ設定図

兎久保遺跡：①トレンチ(30m)、②トレンチ(25m＋25m)
古薬師遺跡：①トレンチ(50m＋25mm＋13m)、②トレンチ(40m)、③トレンチ(35m)、
④トレンチ(30m)、⑤トレンチ(30m)、⑥トレンチ(25m)、
⑦トレンチ(30m＋20m＋15m)
土宮後遺跡：①トレンチ(26m)、②トレンチ(30m)、③トレンチ(30m＋10m)
④トレンチ(80m＋5m)、⑤トレンチ(35m)、⑥トレンチ(45m)

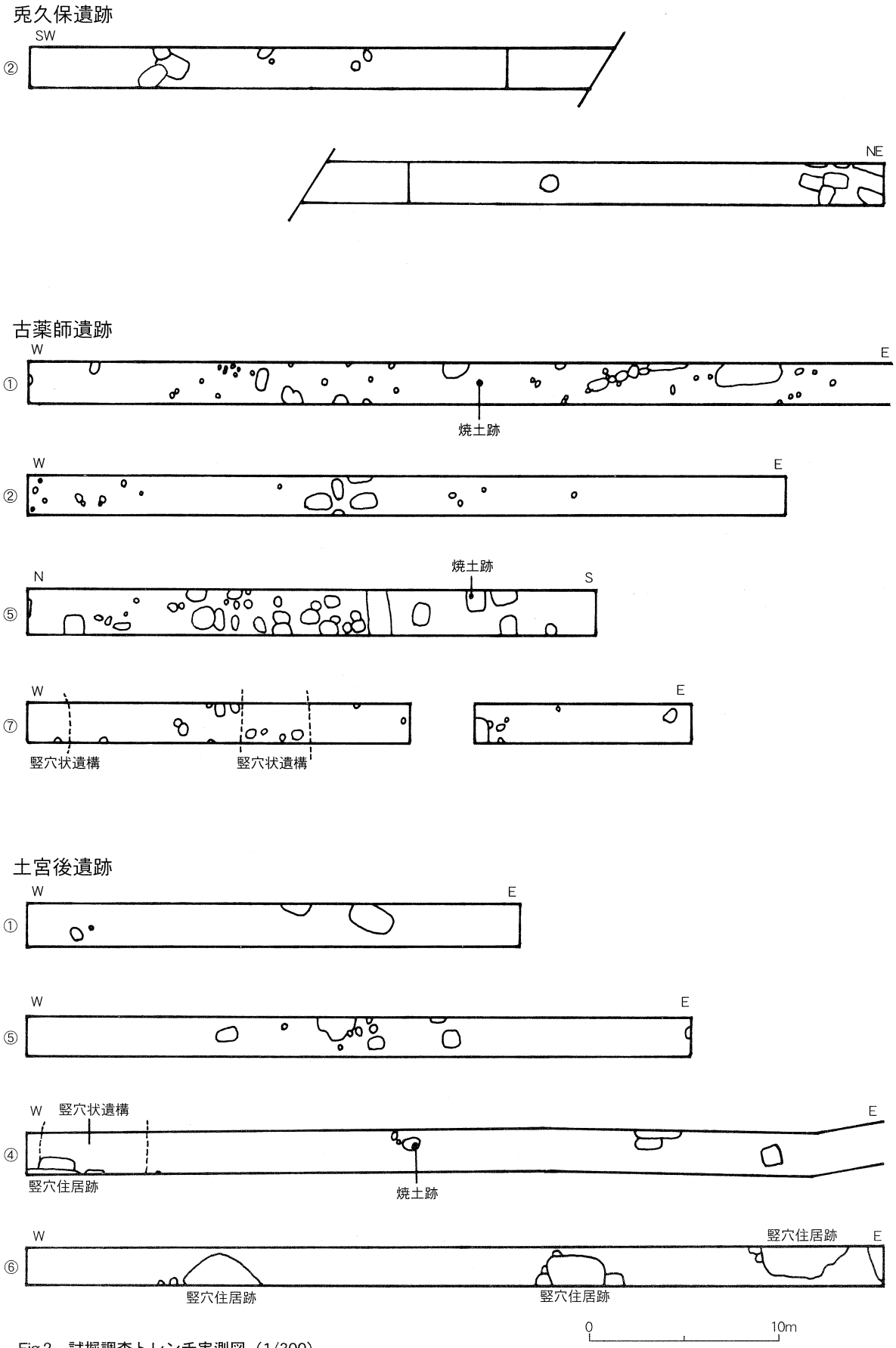


Fig.2　試掘調査トレンチ実測図（1/300）

第３節　発掘調査の概要

１．調査の方法

発掘調査は、試掘調査での遺構の状況（遺構確認面までの深さ、遺構の分布範囲）及び工事の方法（掘削する幅、掘削する深さ）から、茨城県発掘調査取扱い基準に基づき、遺跡の範囲内で工事により遺構に影響が及ぶ恐れがあると判断された道路及び水路敷となる部分を対象に調査区を6か所設定して実施した。

Fig.3　発掘調査区設定図

2．調査の経過

現地調査は平成13年9月6日から重機による表土除去作業を開始した。調査対象面積は、兎久保遺跡が約400㎡(調査区1)、古薬師遺跡が約848㎡(調査区2・3)、土宮後遺跡が約607㎡(調査区4・5・6)、合計約1,855㎡である。平成13年9月12日から、現地作業員による遺構精査・検出作業を開始した。並行して土層堆積図実測・土層堆積状況写真撮影、遺物出土状況写真撮影・遺物出土平面図実測、遺構平面図・エレヴェーション図実測、遺構完掘写真撮影、各調査区の完掘全景写真撮影、各調査区の全測図及び等高線測量図実測作業を行っていった。その結果、兎久保遺跡で時期不明の竪穴住居跡1軒、中近世以降の、井戸跡2基・溝状遺構2条・土坑2基が検出され、古薬師遺跡で奈良・平安時代以降の竪穴住居跡2軒・土壙墓4基・竪穴状遺構1基・土坑41基・ピット状遺構118基・溝状遺構1条が、土宮後遺跡で古墳時代前期の竪穴住居跡4軒、奈良・平安時代以降の竪穴状遺構1基・ピット状遺構5基・土坑3基・溝状遺構1条が検出され、現地作業は平成13年10月5日に重機による埋め戻し作業を行い、終了している。

(大渕　淳志)

3．日誌抄

平成13年9月6日　現地作業を開始する。調査区2の重機による表土除去作業開始。

9.7　調査区2の重機による表土除去を終了。調査区3の重機による表土除去開始。

9.12　発掘機材搬入。現地作業員による作業開始。調査区2の遺構精査・検出作業開始。竪穴住居跡SI01・02検出作業開始。調査区3の重機による表土除去終了。調査区4の表土除去開始。八千代町教育委員会(町教)来跡(A.M)

9.13　調査区2のSI01・02、土坑等検出作業。調査区1・4・6の重機による表土除去作業。町教来跡(P.M)。

9.14　調査区2の土坑群、調査区5のSI01～03の検出作業。調査区5の重機による表土除去作業。県下館土地改良事務所・八千代町耕地課来跡(P.M)。

9.17　調査区2のSI01セクション写真、遺物出土状況写真撮影。調査区5・6のSI・SK等検出作業。調査区5・6の重機による表土除去作業終了し、重機による表土除去完了。町教来跡(A.M)。

9.18　調査区2のSI01実測作業。調査区1・4・5・6の遺構検出作業。町教来跡(A.M、P.M)。町耕地課来跡(A.M)。

9.19　調査区1・2の実測作業。調査区3・4の遺構検出作業。町教・教育長来跡(A.M)。

9.20　調査区3の遺構検出作業。調査区1・4・5の実測作業。

9.22　調査区3ピット状遺構群検出作業。調査区5・6の実測作業。

9.25　調査区1・3の重機による拡張作業。調査区1・3の拡張区検出作業。調査区3の実測作業。町教来跡(P.M)。

9.26　調査区1～6のSIの貼床除去作業。調査区3・5・6の実測作業。調査区3の重機による一部埋め戻し(農道復旧)作業。町教・町文化財審議委員来跡(A.M)。

9.27　調査区1～6の遺構写真撮影。調査区1・4・5・6の実測作業。

9.29　調査区2の遺構検出作業。調査区2・3の実測作業。調査区1～6の重機を使用した全景写真撮影。

9.30　調査区2の遺構検出作業(A.M)。調査区3の実測作業(A.M)。P.M1：30～現地説明会。町教、日考研小川来跡。

10.2　調査区2・3の平面図・全測図セクション図実測作業。県下館土地改良事務所、町耕地課来跡(A.M)。

10.3　調査区2のSI01検出作業。調査区2・3の実測作業。

10.4　調査区2のSI貼床除去作業。調査区2・3・6の実測作業。調査区1～6の重機による埋め戻し作業開始。発掘機材搬出。作業員による作業終了。

10.5　調査区6実測作業。調査区2・3・6の重機による埋め戻し作業。町教来跡(P.M)。この日で現地作業終了。

(大渕　淳志)

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と環境

兎久保遺跡、古薬師遺跡、土宮後遺跡は、八千代町大字松本西部の同じ台地上に立地する。台地は西側に突き出たようなかっこうをしており、西側から南側にかけて、飯沼低地につながる谷津田に面している。標高は約24m、水田面との比高差は5～6mを計る。

兎久保遺跡は、台地北西部の縁辺部に沿って立地する。現状は畑、山林、一部宅地である。遺跡の北半部(字兎久保)には縄文時代中期の土器が多く、南半部(字西ノ谷台)では奈良・平安時代から中・近世の土器が多く見られる。地元では兎久保を通称ウサギボックなどと言われている。

古薬師遺跡は、台地中央東部に立地する。現状は畑、墓地、一部宅地にかかる。遺跡の北部は字兎久保、南部は字古薬師に分かれるが、元この地には薬師堂があったと伝えられている。土師器、須恵器が見られ、奈良・平安時代から中・近世にかけての遺跡である。

土宮後遺跡は、台地南西部に立地する。現状は畑、山林、一部雑種地となっている。地元では土宮後を通称ドッコサマなどと言われている。この遺跡の南側の傾斜地にかけては、以前に良く形を残した土器が多く出土したことが知られている。縄文時代(早期)、古墳時代(前期)、奈良・平安時代から中・近世にかけての遺跡である。

第２節　周辺の遺跡

兎久保遺跡、古薬師遺跡、土宮後遺跡が立地する台地の西側には、飯沼低地につながる谷津田が南北に長く延びている。谷津田に面した台地沿いには、多くの集落遺跡が立地している。

遺跡は、谷津田の東側台地上で多く確認されている。松本地区には3遺跡の他、縄文時代を中心とした於天奈付遺跡(152)、大砂西遺跡(153)、大砂東遺跡(154)、古墳時代から中世にかけての香取腰遺跡(158)が立地する。谷津を南に下った村貫地区には、東西に広く分布する奈良・平安時代の神明遺跡(098)をはじめ、東・西・南の三方を谷津田に囲まれ南北に長く延びた舌状の台地上に、奈良・平安時代を中心とした遺跡が集中している。芦ケ谷地区には町内では数少ない土偶が出土した縄文時代後・晩期の神山遺跡(082)をはじめ、縄文時代や古墳時代、奈良・平安時代にかけての白木遺跡(079)、仲坪遺跡(081)、舟戸遺跡(084)などが立地している。谷津田の西側台地上の平塚地区には、奈良・平安時代の大荒句遺跡（143)、古墳時代、奈良・平安時代の内野E遺跡(146)、縄文時代、奈良・平安時代の内野A遺跡(150)、内野B遺跡(149)、内野C遺跡(148)などが立地している。

この谷津を中心に立地する遺跡は、比較的古い時代の遺跡は少ないが、谷津の開発に伴って古墳時代から奈良・平安時代にかけて遺跡数が増え、人々が集落を営んでいったことがうかがわれる。

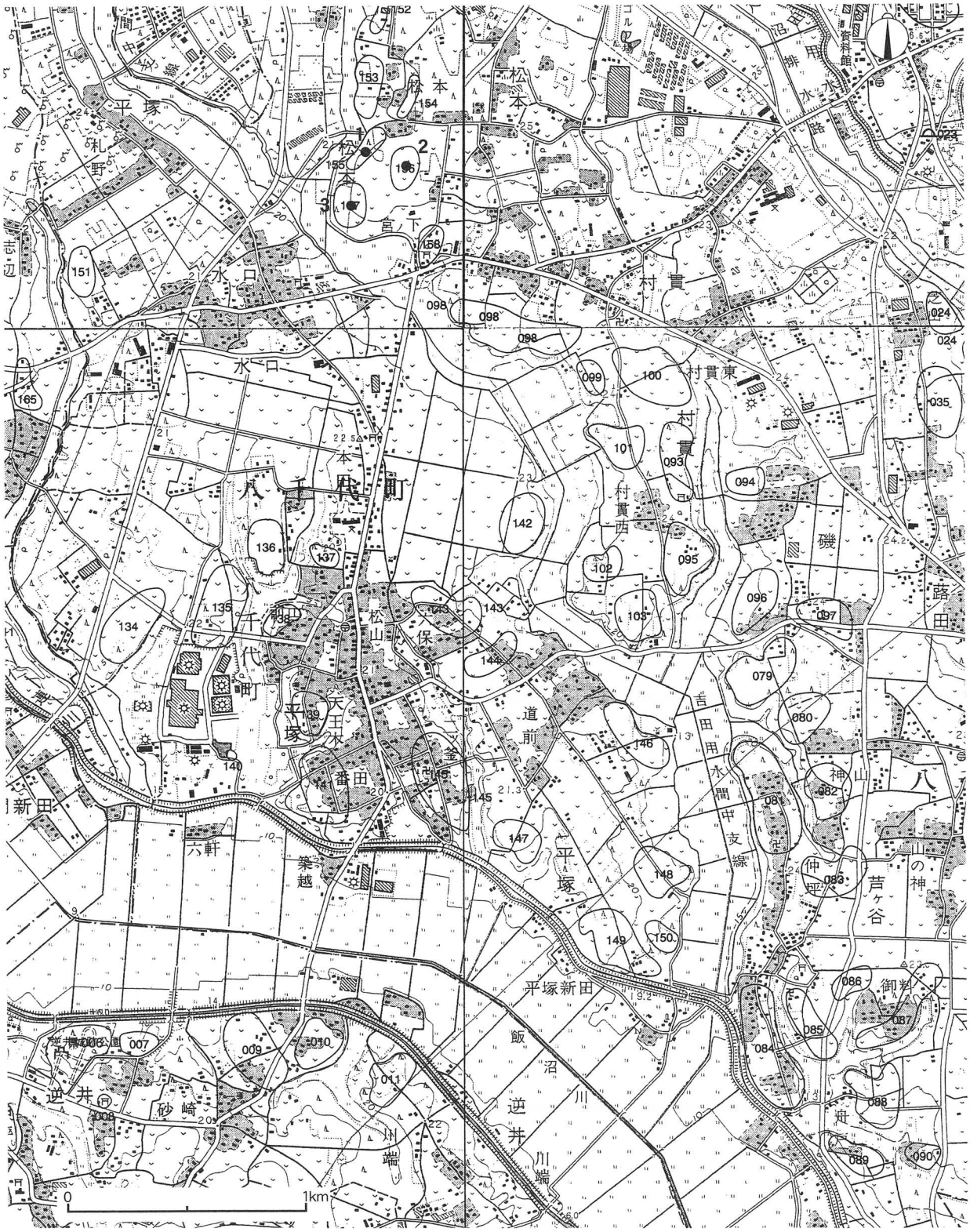


Fig.4　遺跡分布図（「茨城県遺跡地図」より）（1/25,000）1兎久保遺跡　2古薬師遺跡　3土宮後遺跡

＊参考文献　「八千代町史　通史編」八千代町史編さん委員会　昭和62年
「八千代町史　資料編Ⅰ」八千代町史編さん委員会　昭和63年
「茨城県遺跡地図・地名表」茨城県教育委員会　平成12年

第Ⅲ章　兎久保遺跡

第１節　概要

調査対象地は本遺跡の北端に位置する地点で、「調査区1」と呼称した。「調査区1」は、北西側が緩傾斜面で、東側高位面と北西側低位面との比高差は約3.5mを測る。ここに幅2～3m、長さ67.5mの東西に長い調査区を設定した。調査対象地内で検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、溝状遺構2条、井戸址2基、土坑2基である。検出された竪穴住居跡は西側に緩傾斜する低位面近くの北側から、井戸址は中央付近から、溝状遺構は高位面で確認されている。なお、検出された各遺構からはいずれも出土遺物が少なく、明確に時期を決定できるものがなかった。したがって、今回の調査では遺跡の明確な性格を十分に把握することはできなかった。

第２節　検出された遺構と遺物

１．竪穴住居跡

SI－01（Fig.6）

調査区北側の低位面で北東側約1／3程を検出した。主軸はカマドあるいは炉址の位置が不明であるが北壁辺を主軸線としてN－51°－Wを指す。形状は方形で、確認された規模は、全掘された確認面からの北壁辺が2.5m、東壁辺は一部分で0.8m、西壁辺も一部分で0.4m、深さ25cmである。カマドや炉址あるいは柱穴等の諸施設は検出されていない。床面は部分的に硬化面が確認できるものの、全体的に軟弱で、壁周縁はとくに顕著であった。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、周溝は設けていない。住居全体の覆土は、上面がローム粒子を多く含むにぶい黄褐色土、覆土の大半がローム粒子をわずかに含む黒褐色もしくは暗褐色である。

遺物の出土はなかった。

２．溝状遺構

SD－01（Fig.7）

調査区高位面の東端で検出された南北方向の溝である。主軸はN－18°－Eを指す。検出された確認面からの長さ2.16m、幅0.86～1.26m、深さ42cmを測る。横断面形はU字状を呈し、壁面は東側が急傾して立ち上がる。覆土は全体的に締まりの欠けるにぶい黄褐色土と暗褐色で覆わ

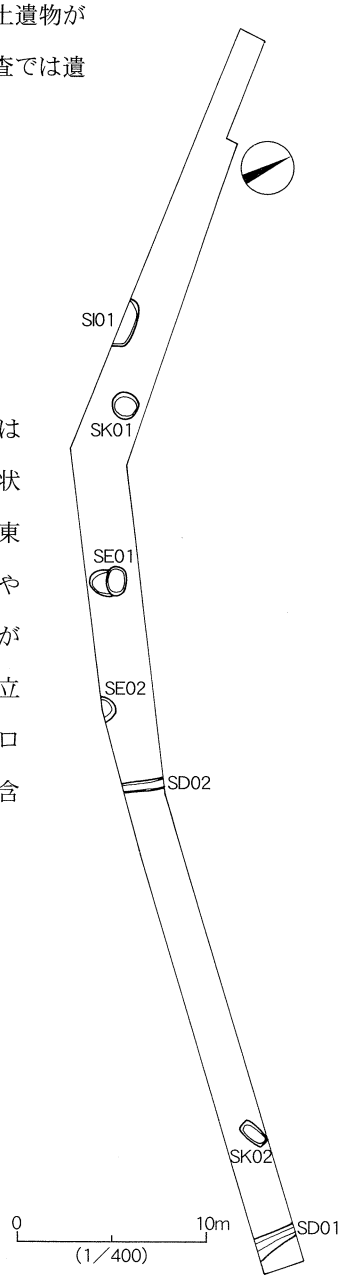
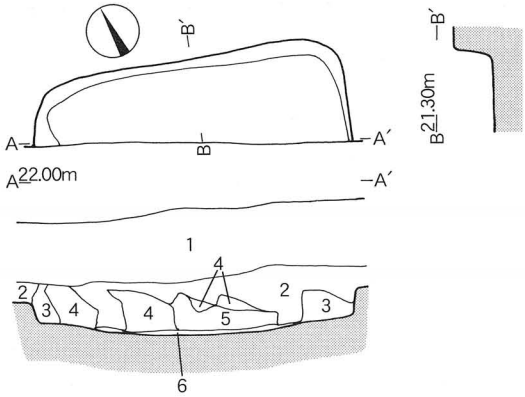


Fig.5　兎久保遺跡遺構全体図

れている。出土遺物はなく、覆土の状態から判断して畑耕作に関わる比較的新しい溝である。

SD－02（Fig.7）

調査区中央付近のの高位面で検出された南北方向の溝である。主軸はN－１５°－Eを指す。検出された確認面の長さ2.27m、幅0.53～0.64m、深さ30cmを測る。横断面形はU字状を呈し、壁面は東西側とも急傾して立ち上がる。覆土は全体的に締まりの欠ける暗褐色と、ローム粒子を多量に含む褐色土で覆われている。出土遺物はないが、やはり覆土の状態から判断して畑耕作に関わる比較的新しい溝である。



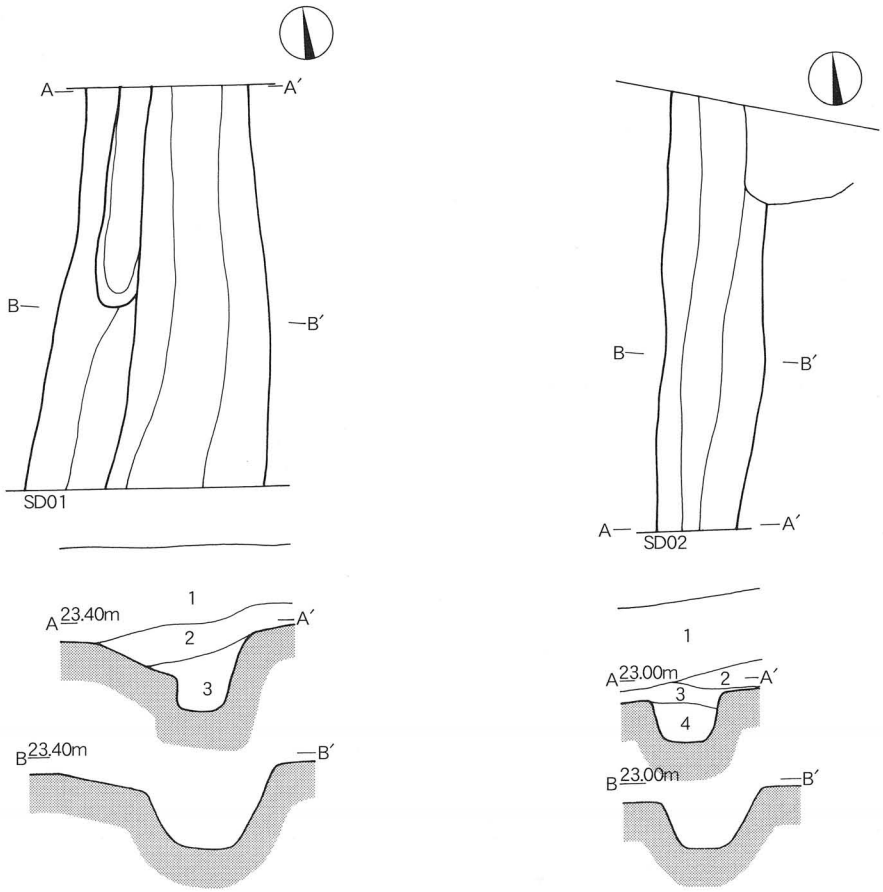
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 耕作土　しまりがなくパサパサしている
2. 褐色土(10YR4/4) ロームブロック・ローム粒子を多量に含む しまりに欠ける
3. 明黄褐色土(10YR7/6) ロームブロックを多量に含む　堅緻でしまりがある
4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒子をわずかに含む　しまりにやや欠ける
5. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子・ロームブロックをわずかに含む しまりにやや欠ける
6. にぶい黄橙色土(10YR6/4) 暗褐色土粒子をわずかに含む

Fig.6　住居跡SI－01　0 1m (1／60)

３．井戸跡

SE－01（Fig.8）

調査区の高位面のほぼ中央付近で検出された。南側に比較的新しい土坑が切り合っているが、ほぼ原状を



1. 黒褐色土(10YR3/1) 耕作土　しまりがない
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒子・ロームブロックを多量に含む しまりに欠ける
3. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子をわずかに含む　しまりにやや欠ける

1. 褐色土(10YR4/4) 耕作土　しまりがなくパサパサしている
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロック・ローム粒子をわずかに含む
3. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロック粒子をわずかに含む
4. 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子を多量に含む　しまりがある

Fig.7　溝SD－01・02　0 1m (1／20)

保っている。形状は東西にやや長い楕円形を呈し、確認された規模は南北1.45m、東西2.05mを測る。なお、深さは不明。覆土中より小片のため図示できなかったが、遺物が3点出土している。縄文時代中期後半加曾利E式土器の深鉢1点。土師器の小破片1点。中・近世の焙烙の小破片1点である。焙烙はいわゆる内耳土鍋であり、当址の時期に比定される。

SE－02（Fig.8）

調査区の高位面のほぼ中央付近で、SE－01の東側10mに位置する。確認された遺構面は北側半分であるが、形状はほぼ円形を呈し、規模は南北1.10m、東西0.6mを測る。深さは不明。出土遺物はないが、形態から判断して隣接するSE01と同時期と思われる。

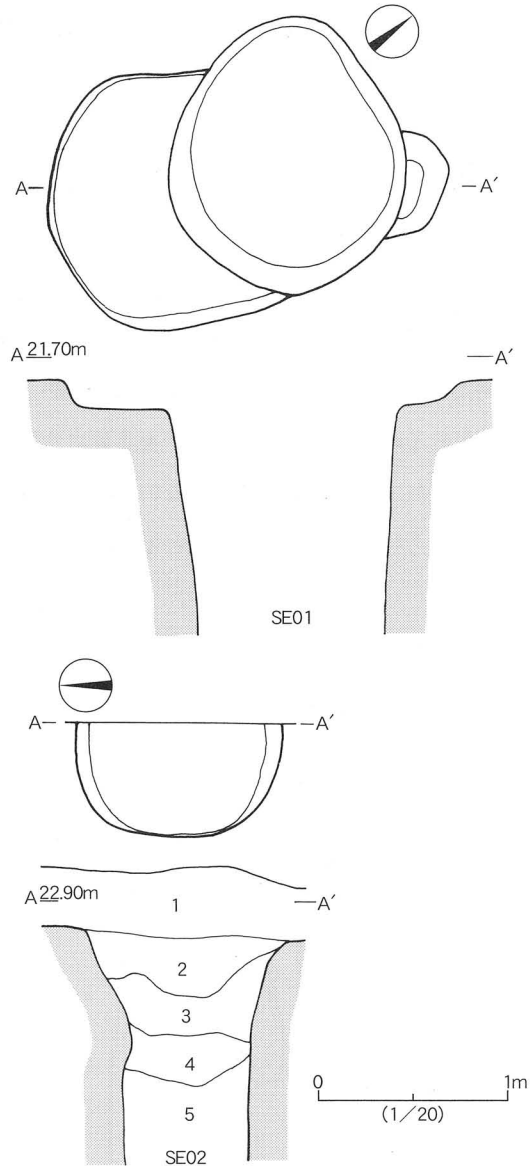
4．土坑

SK－01（Fig.9）

調査区中央西側で、緩傾斜面で検出された。形状は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.30m、短軸1.02m、深さ40cmを測る。覆土は埋め戻しで、遺物の出土は確認できなかった。

SK－02（Fig.9）

調査区東端の高位面で確認された。形状は南北に細長い長方形を呈し、規模は長軸1.62m、短軸0.63m、深さ16cmを測る。覆土は埋め戻しで、遺物の出土は確認できなかった。　（小川　和博）



1. 褐色土（10YR4/4）　耕作土　しまりがなくパサパサしている
2. にぶい黄褐色土（10YR5/3）ロームブロックを多く、ローム粒子をわずかに含む　しまりに欠ける
3. にぶい黄褐色土（10YR4/3）ロームブロック・ローム粒子をわずかに含む　しまりに欠ける
4. 黒褐色土（7.5YR3/2）　ローム粒子をわずかに含む　しまりに欠ける
5. 暗褐色土（7.5YR3/3）　ローム粒子をわずかに含む　しまりに欠ける

Fig.8　井戸跡SE－01・02

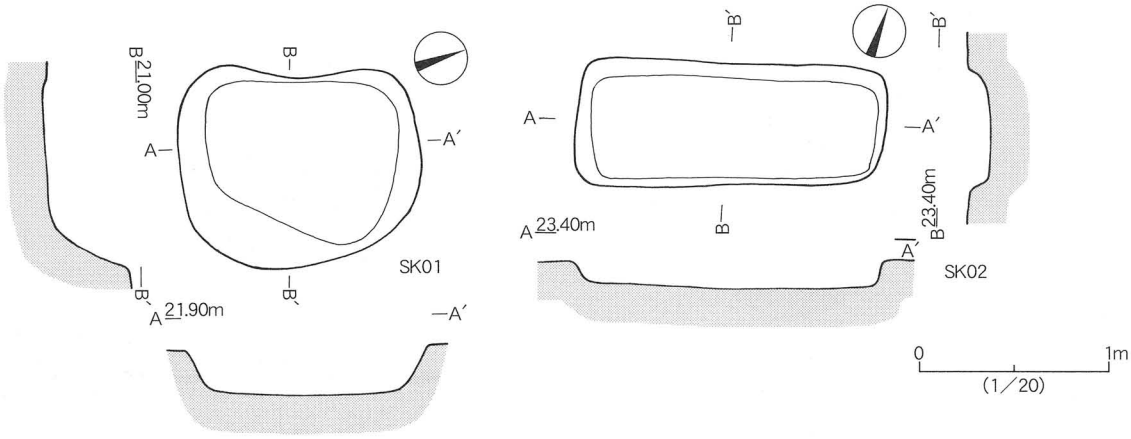


Fig.9　土坑SK－01・02

第Ⅳ章　古薬師遺跡

第１節　概要

調査対象地は2地点に分かれて実施した。本遺跡の西端に位置する地点を「調査区2」とし、同じく南西端にあたる地点を「調査区3」と呼称した。「調査区2」の地点は、比高差の少ない平坦面が広がる場所で、幅6m、長さ67mの東西に長い調査区である。ここから検出された遺構は、竪穴住居跡2棟、墓坑2基を含む土坑14基、柱穴状遺構9本である。検出された竪穴住居跡は調査区の西側と中央から、墓坑は中央および東側から確認されている。竪穴住居跡の構築時期は8世紀代に比定され、墓坑は中・近世に、その他の土坑は近世以降である。また柱穴状遺構も近世以降であろう。

次に「調査区3」は幅1.5～5m、長さ78mの南北に細長い調査区である。ここから検出された遺構は墓坑2基を含む土坑41基、溝状遺構1条、竪穴状遺構1基、柱穴状遺構118基である。なお、検出のされた遺構のうち、竪穴状遺構以外の各遺構からはいずれも出土遺物が少なく、明確に時期を決定できるもが乏しかった。墓坑も中・近世遺構として判断した。なお、大形の竪穴状遺構は9世紀代の比較的良好な遺物を出土している。

第２節　検出された遺構と遺物

A）調査区２

１．竪穴住居跡

SI－01（Fig.11～15）

調査区西側で確認された。北西隅の一部が調査区外にかかるものの、ほぼ完掘に近い状態で調査

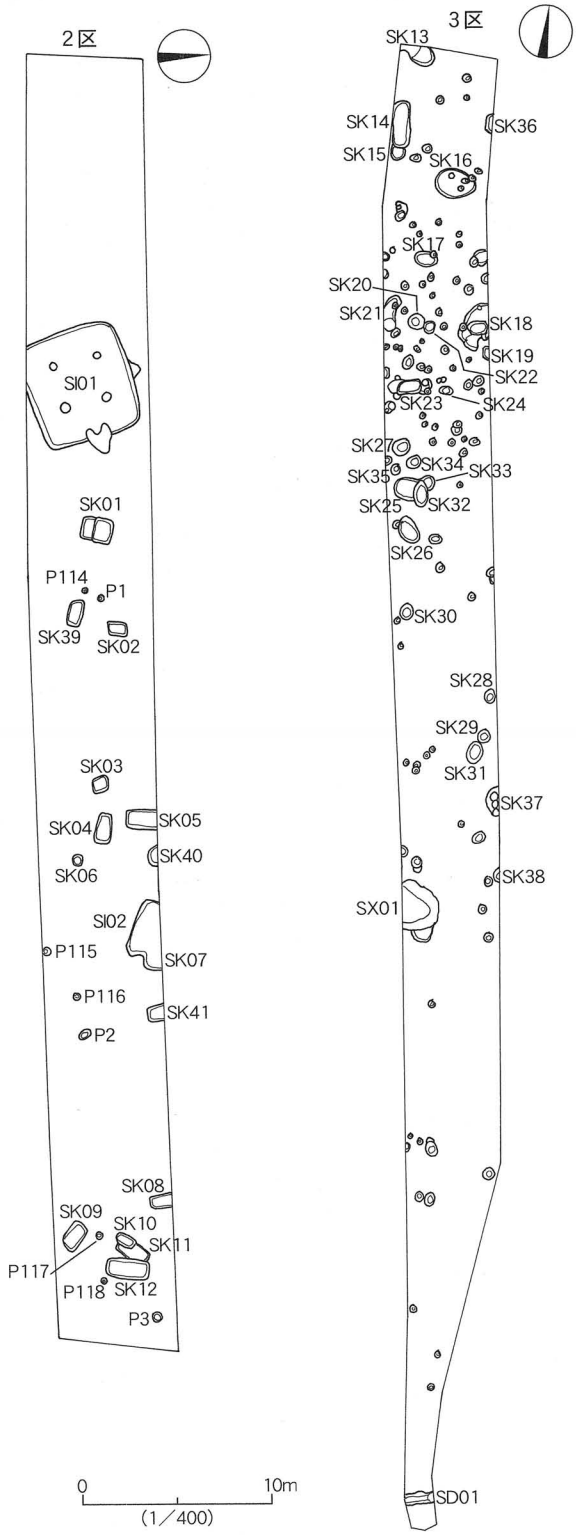


Fig.10　古薬師遺跡遺構全体図

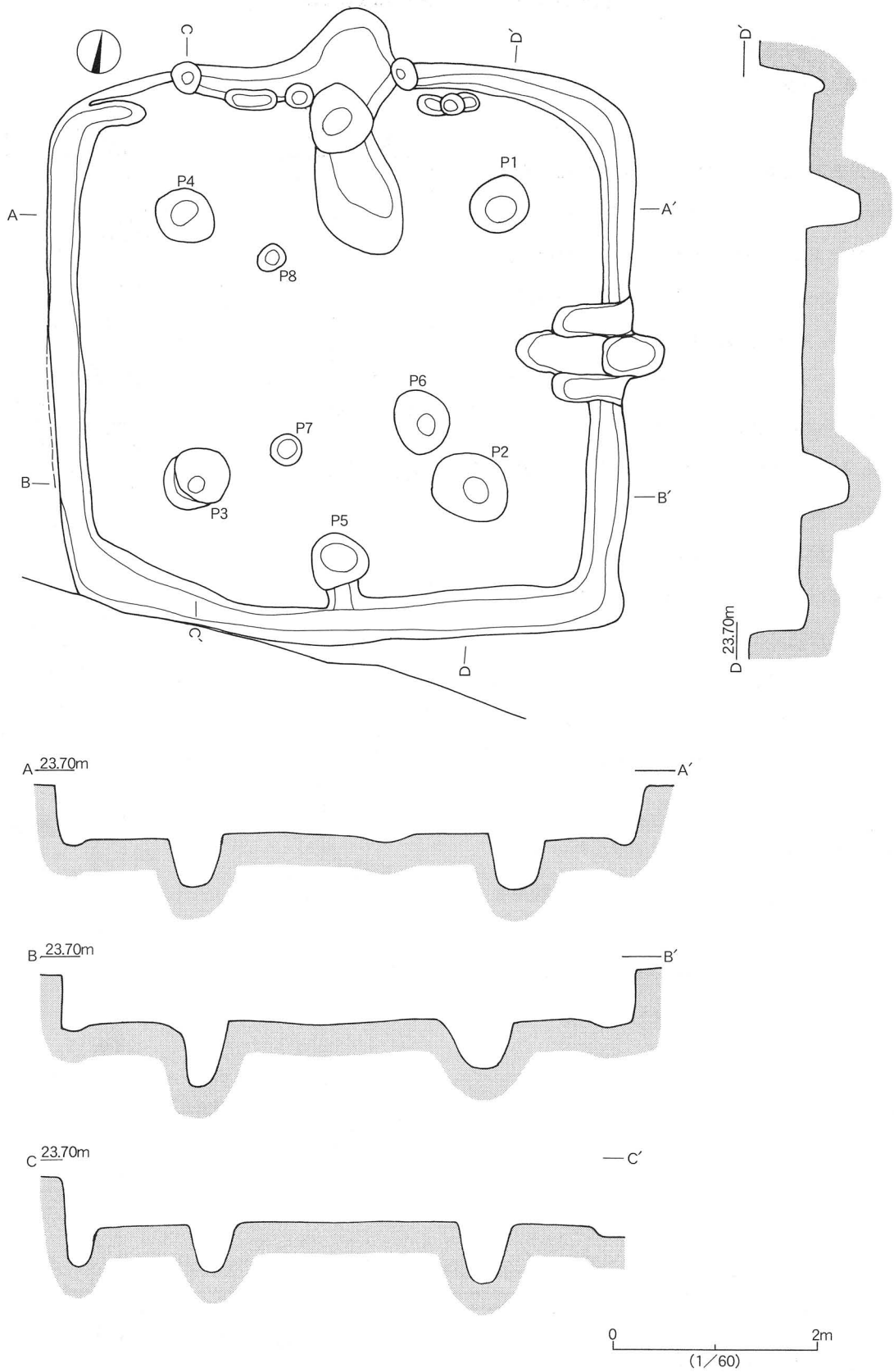
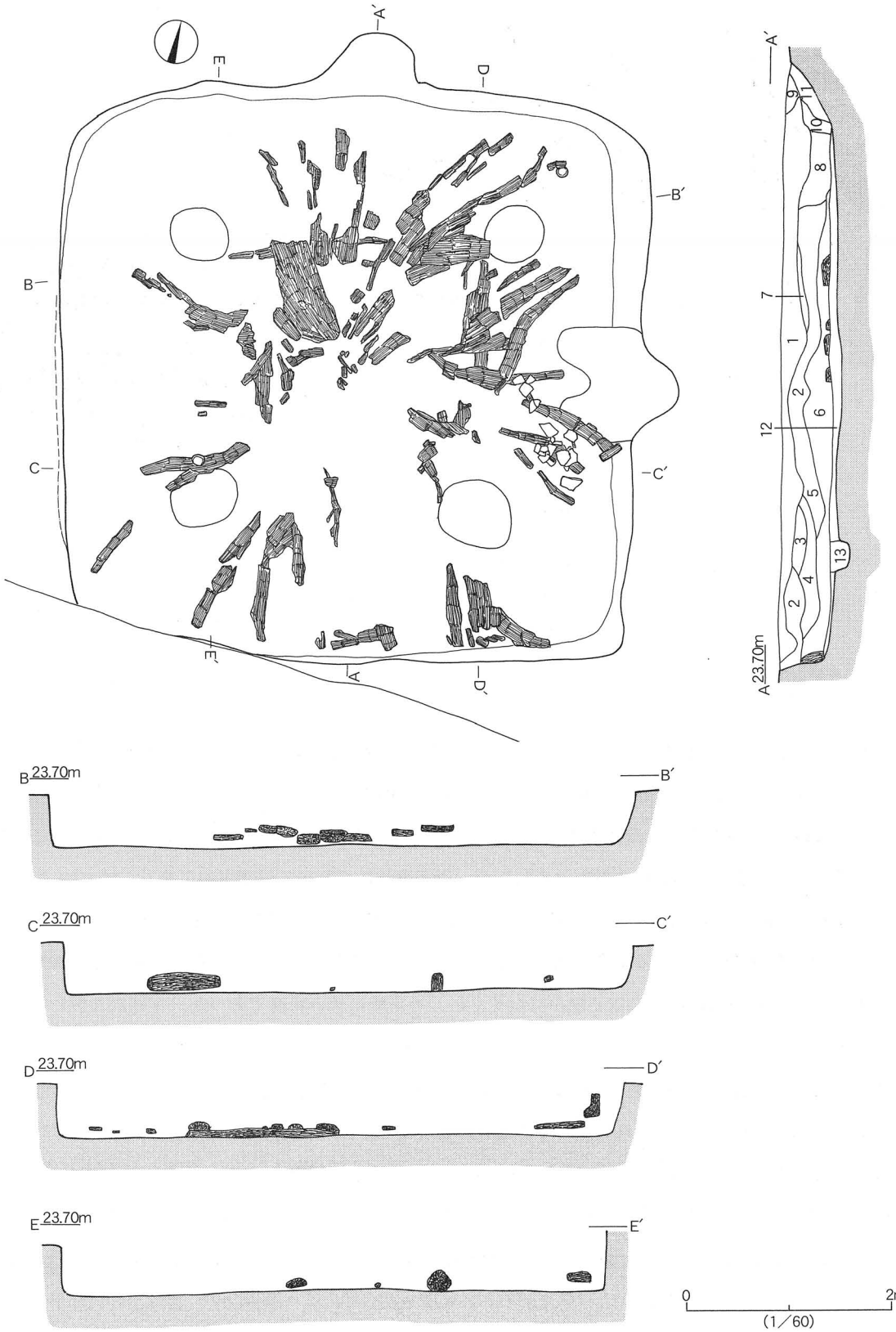


Fig.11　住居跡SI－01（1）



1. 黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロック・焼土粒子を少量含みしまりにやや欠ける
2. にぶい黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子・炭化粒子を少量含みしまりがある
3. 暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒子・焼土粒子をわずかに含みしまりがある
4. 暗褐色土(10YD3/3)　ローム粒子・ロームブロックをわずかに含む　しまりがある
5. 黒褐色土(10YR2/3)　ローム粒子をわずかに含む　しまりがある
6. 黒褐色土(7.5YR3/2)　ローム粒子を少量含む　しまりにやや欠ける
7. 暗褐色土(7.5YR3/3)　多量のロームブロックと炭化粒子をわずかに含む　しまりがある
8. 褐色土(10YR4/4)　ロームブロックをわずかに含む　しまりがある
9. 橙色土(7.5YR7/6)　焼土粒子をわずかに含む　しまりに欠ける
10. にぶい褐色土(7.5YR5/4)　焼土粒子をわずかに含みしまりがある
11. 橙色土(7.5YR6/6)　多量の焼土粒子を含みしまりがある
12. 黒褐色土(10YR3/2)　多量のローム粒子を含む　しまりがあり堅緻である
13. 黒褐色土　(10YR3/1)　ローム粒子を含む　しまりに欠ける

Fig.12　住居跡SI－01（2）

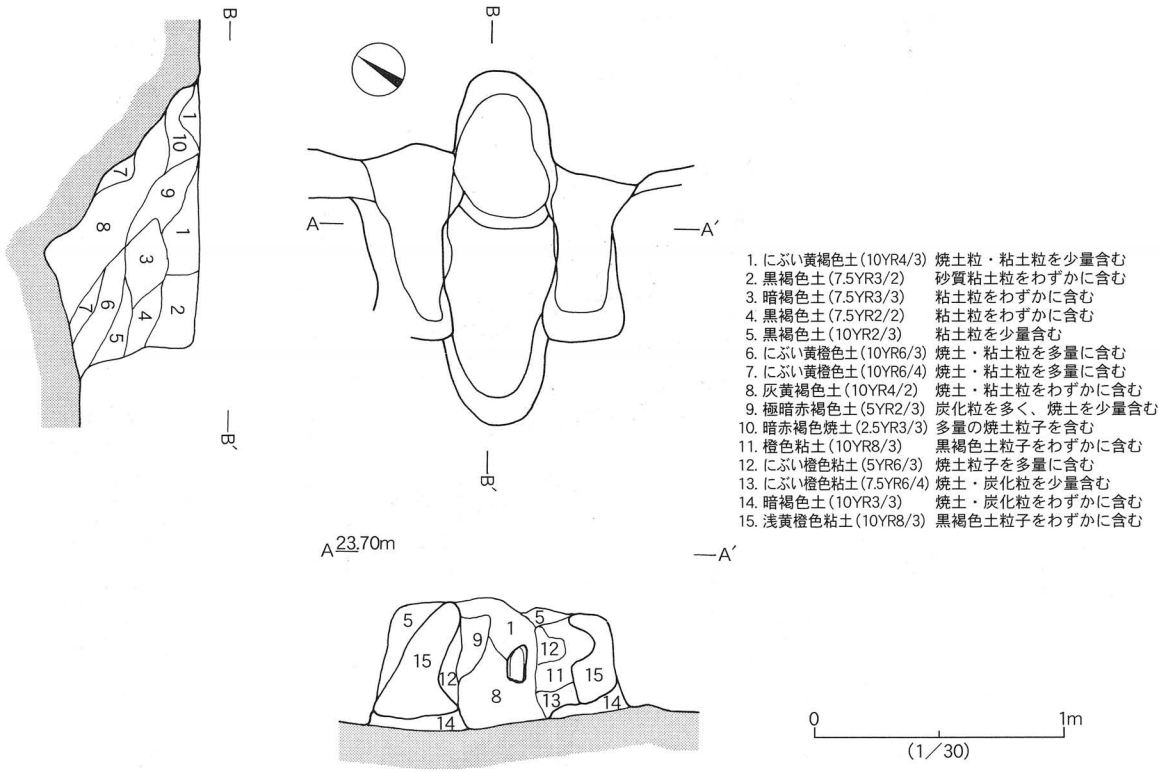


Fig.13　住居跡SI－01（3）

を実施した。平面形は方形を呈するが、カマドの構築から少なくとも新旧2期にわたる改築が行われている。したがって主軸方位は新期でみるとN－78°－Eを示す。規模は東西5.70m、南北5.50mである。また壁は48～54cmほどの深さをもつ。壁面は西側がわずかにオーバーハングするものの、総じて垂直気味に立ち上がる。壁溝は北西隅に途切れる箇所もみられるが、ほぼ全体にわたって検出されており、幅18～45cm、深さ10～16cmを測り、四隅にかけて広がる傾向にあるものの底面は平坦である。床面はほぼ平坦で、概して堅く踏み固められているが、中心部、カマド前面、南壁付近はよく硬化している。貼床の厚さは数cmから20cm程であり、掘形面にはそれほど凹凸はなく、むしろ平坦に近い状態であった。主柱穴と思われるものは4本(P1～P4)で、対角線上に配置されている。いずれも平面形は円形に近く、掘形の直径は56～70cmと比較的大きく、深さはP1から順に、48cm、43.5cm、59cm、46cmとそれほど深くはない。なお、P3は外側に改築痕と思われる広がりがみられる。その他柱穴としては、入口部施設の梯子穴と思われるP5は径50cm前後で、深さ32cm測る。またP2に接するP5は径の規模に比較して深さ20cmと浅く、試し穴と思われる。P6・P7はそれぞれP3・P4の内側に接して穿ってある。径30cm前後、深さも浅く用途は不明である。

カマドは新旧ある。北壁中央に設置されていた古期カマドについては既に構築材などは除去され、浅い皿状の掘形をもつ焚口部・燃焼部および煙道部のみの痕跡を止めているに過ぎない。煙道部の住居外掘削は幅1m、長さ50cmを測る。新期カマドは東壁中央に構築されており、砂質粘土を袖部の構築材として使用している。比較的良く原状を保っており、焚口部の幅40cm前後、焚口から煙道部までの長さ140cmを測る。焚口から燃焼部の掘形は浅い皿状を呈し、燃焼部から煙道部は緩傾斜しながら立ち上がる。煙道部は壁の地山

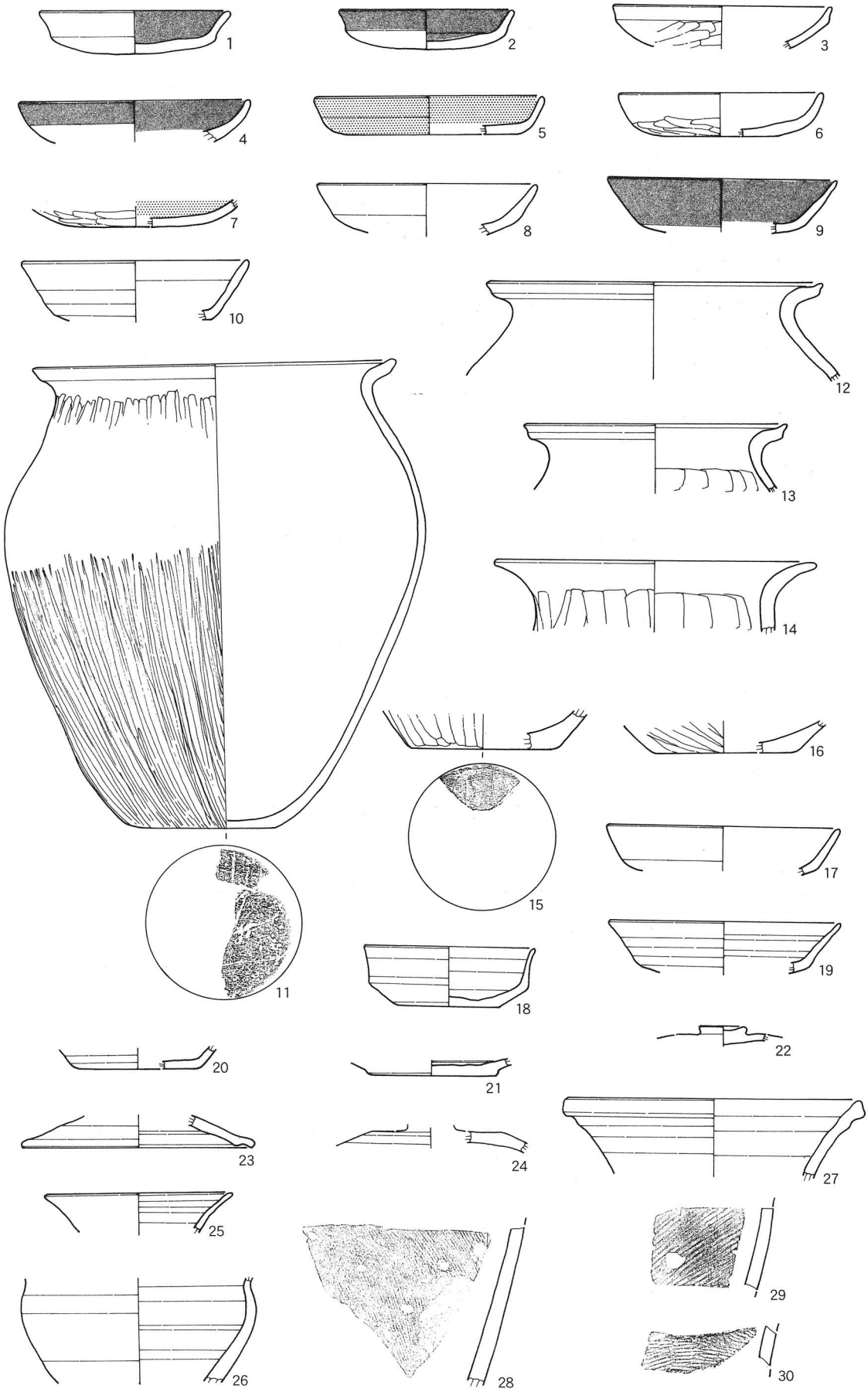


Fig.14　住居跡SI－01（4）

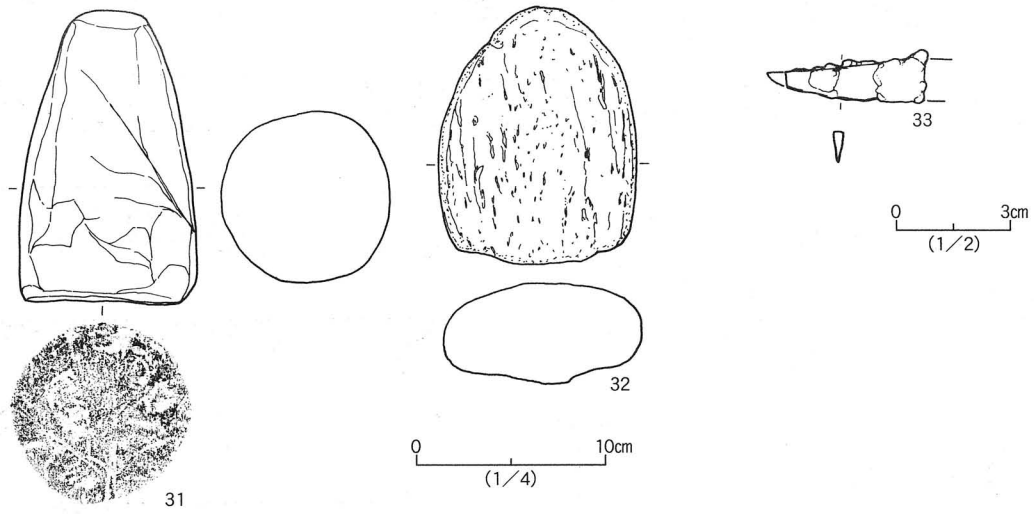


Fig.15　住居跡SI－01（5）

を約35cm掘削して住居外へ延びていく。カマド覆土は自然堆積で、煙道部に沿った6～9層に焼土粒子・炭化粒子が含まれていた。

なお、本跡は焼失家屋である。床面全体に炭化材と焼土が堆積していた。焼失したのち、屋内の片付けは全くせずそのまま放置されていたものと思われる。したがって覆土は、炭化材や焼土がほぼ床面に位置し、その上層に自然堆積層により覆われていた。焼失した建築部材は失火当時のままであった可能性がたかい。上層でみる限り屋根材がほぼ垂直に落下している。住居の中心部から放射状に炭化材が流れるが、新期カマドを軸とする中央線に対しては「ハ」の字状に開き、切妻形の棟覆と思われる。また放射状に広がるタルキを支える桁材が北壁と東壁に平行しており、とくに東壁に平行する桁材は2本組になっていたようである。なお、柱穴内覆土には柱痕は確認できなかった。

出土遺物には土師器、須恵器、土製支脚、軽石製品、刀子がある。大半は炭化材や焼土内覆土から検出されたもので、カマド右袖部周辺から集中して出土している。1～9は土師器坏である。Fig.14－1・2はやや丸底気味の底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部が大きく開き、口縁部と体部に明瞭な稜をもつ。体部内面にヘラ磨きされ、黒色処理が施されている。外面口縁部は横ナデ体部はヘラ削りを行っている。3は丸味のある体部から口縁部は短く外上方へ開く。体部内面はヘラナデ。外面は口縁部が横ナデ、体部はヘラ削り。4は丸味のある体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。体部が肥厚する。外面口縁部横ナデ、体部ヘラ削り。6～7は平底の底部から口縁部が外上方へ大きく開く。体部と口縁部の境にわずかな稜がある。外面口縁部横ナデ、体部ヘラ削り。7は内面ヘラ磨きが施されている。8～10は丸味をもつ底部から口縁部が大きく外上方へ開く。体部と口縁部の境にわずかな稜をもつ。9は内外面に黒色処理が施されている。11～13・15・16は土師器甕である。11～13口唇部が短く立ち上がり、口縁部が強く外反するもので、11は完形に近い大形の甕で、口縁部は「く」の状に強く外反する。肩部がわずかに張り、体部は丸味をもちながら平底の底部へ移行する。口縁部は横ナデ、体部は縦位の細かなヘラナデが施されている。なお底部は木葉痕を残す。14は甑であろう。肩部の張りなく、口縁部が大きく外反する。15・16は底部である。15は木葉痕を

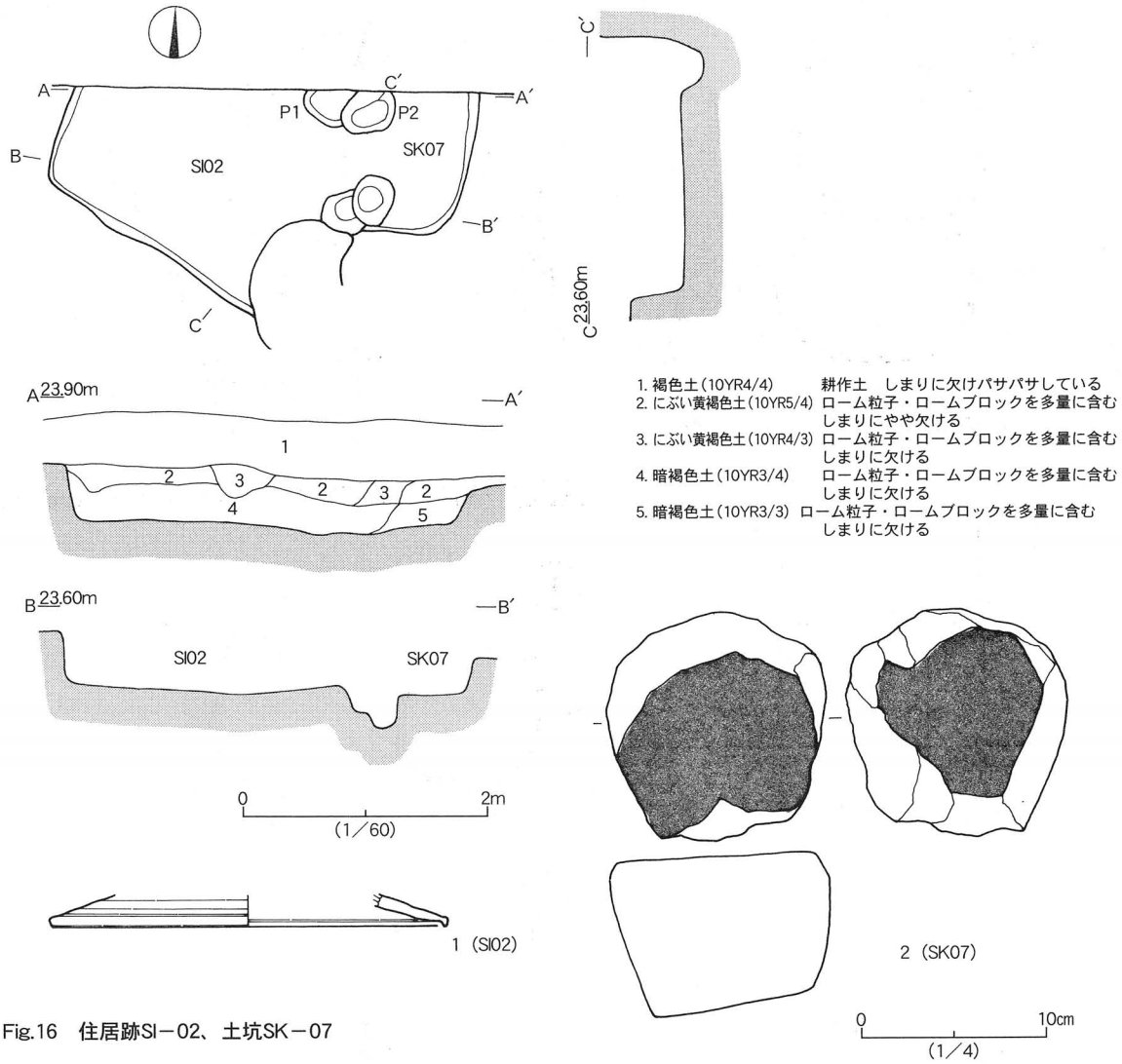


Fig.16 住居跡SI－02、土坑SK－07

残す。18～21は須恵器坏である。18はロクロ成形で、底部は平底で、体部が外方へ開き、口唇部付近が外反し、口縁部は外反気味に立ち上がる。19は体部が丸味をもち、口縁部は大きく外方へ開く。20・21坏底部破片である。21の底部は肥厚する。22～24は須恵器蓋である。22はツマミ部のみ完存する。天井部に平坦面を有する擬宝珠状を呈する。25は灰釉陶器の坏である。口縁部が大きく開く。26は胴部破片であるが、須恵器壷であろう。肩部はあま張りはなく、体部は内彎気味に移行する。27は甕の口縁部破片。口唇部が肥厚し、大きく外反する。28～30は甕胴部破片である。いずれも外面に平行タタキで成形し、内面はナデ整形が施されている。31は完形の土製支脚である。截頭円錐形を呈し、底面には木葉痕が残る。32は軽石製品である。楕円形状に丁寧に成形している。33は刃部先端部のみの折損品である。

SI－02（Fig.16）

調査区中央東寄りの北側で確認された。東側で土坑SK－07と重複するほか、南東隅で撹乱を受けている。しかし、覆土の状態から判断して土坑のほうが旧く、撹乱は比較的新いものと思われる。また、本跡の北側大半が調査区外にあり、全体の様相は不明であるが、南壁辺がほぼ完掘されており、これらから平面形は方

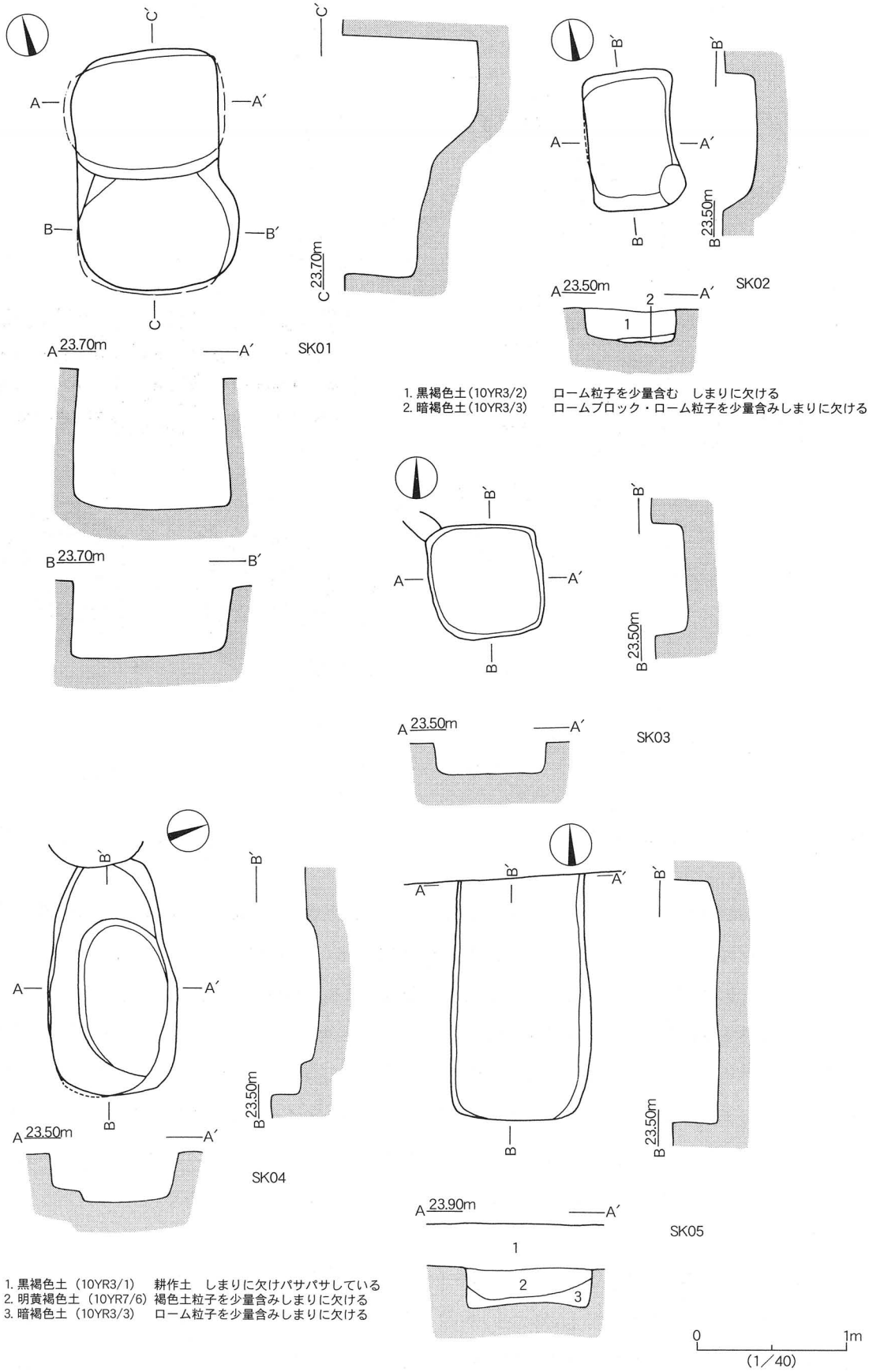


Fig.17　土坑SK－01・02・03・04・05

形を呈するものと思われる。またカマドや炉址の検出がないため主軸方位は不明であるものの、北方向を主軸とするとN－31°－Wを示す。確認された規模は南壁辺1.95m、西壁辺が0.75cmを測る。壁の遺存は良好で、高さ32～44cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で、概して軟弱である。貼床は確認できず、したがって掘形は明確ではない。当跡にともなうと思われる柱穴は東側で検出された２本(P1、2)と推定される。楕円形を呈し、径は40cmであるものの、深さは10cm前後と浅い。入口部施設の柱穴と思われる。壁溝は構築されていない。覆土は自然堆積で、大きく上層のにぶい黄褐色土と下層の暗褐色土に分かれる。

出土遺物は土師器と須恵器があるが、図示できたのは須恵器・蓋1点のみである。ロクロ成形で、天井部は低く、口唇部は短く垂直気味に垂下する。

２．土坑

SK－01（Fig.17）

調査区中央付近で検出された。2基重複しており、北側が深く、南側がわずかに浅い。

北側土坑は長方形を呈し、規模は長軸190cm、短軸166cm、深さ88cmを測る。南側土坑も長方形を呈し、規模は長軸210cm、短軸146cm、深さ44cmを測る。いずれも壁面はオーバーハングし、覆土は締まりに欠ける人為的な埋め戻し土層である。遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用の土坑である。

SK－02（Fig.17）

調査区中央付近に位置する。南北に長い長方形を呈し、規模は長軸96cm、短軸56cm、深さ23cmを測る。覆土は2層に分かれるものの、締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－03（Fig.17）

調査区中央付近に位置する。形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸77cm、短軸76cm、深さ22cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。近世以降の農耕作用土坑である。

SK－04（Fig.17）

調査区中央付近に位置する。東西に長い楕円形を呈し、規模は長軸165cm、短軸87cm、深さ34cmを測る。さらに中央下位で同じ形態の楕円形土坑が重複している。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－05（Fig.17）

調査区中央付近に位置するが、北側が調査区外に延びている。形状は南北に長い長方形を呈し、確認された規模は長軸164cm、短軸95cm、深さ30cmを測る。覆土は2層に分かれるが、いずれも締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、出土遺物はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－06（Fig.38）

調査区中央付近に位置する。形状は略円形を呈し、規模は長軸50cm、短軸48cm、深さ5cmを測る。覆土中より焼骨の小片が出土した。掘削が浅いため、ほぼ底面は2層に分かれるものの、締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。人骨以外遺物の出土はなく、近世の土坑墓である。

Fig.18　土坑SK－08・09・10・11・12

SK－07（Fig.16）

調査区中央東寄りに位置し、竪穴住居跡SI－02と重複している。形状は隅丸長方形を呈し、確認された規模は長軸115cm、推定短軸100cm、深さ27cmを測る。覆土は2層に分かれ、上層はにぶい黄褐色土、下層は暗褐色土で覆われているものの、締まりにやや欠ける自然堆積層である。8世紀代のSI－02に切られていることから8世紀より旧い土坑である。遺物として安山岩製の砥石が出土している。表裏面と側面の1面に研磨が入念であるが、他面はやや雑である。

SK－08（Fig.18）

調査区東側に位置する。北側が調査区外に延びている。南北に細長い楕円形を呈し、確認された規模は長軸140cm、短軸56cm、深さ35cmを測る。覆土は2層に分かれ、上層がにぶい黄褐色土、下層が褐色土でいずれも締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－09（Fig.18）

調査区東側に位置する。形状は南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸146cm、短軸108cm、深さ15cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、出土遺物はないが、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－10（Fig.18・38）

調査区中央付近に位置する。南北に長い長方形を呈し、規模は長軸96cm、短軸56cm、深さ23cmを測る。覆土は2層に分かれ、上層の黒褐色土は焼土粒子・炭化粒子を少量含む。下層も焼土粒子、炭化粒子を含む灰黄褐色土であるものの、締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。遺物として覆土中から人骨の出土があり、近世の土坑墓である。

SK－11（Fig.18）

調査区東側に位置し、SK－10及びSK－12と切り合っている。形状は南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸180cm、短軸85cm、深さ24cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。近世以降の農耕作用土坑である。出土遺物として銭貨がある。錆化が著しく文字の判読は不可能であった。

SK－12（Fig.18）

調査区東側に位置する。南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸238cm、短軸115cm、深さ30cmを測る。西側にSK－11が重複している。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－39（Fig.19）

調査区中央付近に位置する。形状は東西に長い長方形を呈し、規模は長軸128cm、短軸60cm、深さ25cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、出土遺物はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－40（Fig.19）

調査区中央付近に位置する。形状は楕円形を呈し、北側半分が調査区外にある。規模は確認面の長軸104cm、短軸74cm、深さ74cmを測る。覆土は3層に分かれ、上層が暗褐色土、中層が褐色土、下層が黒褐色土で覆われているが、いずれも締まりがなく人為的な埋め戻し土層である。遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

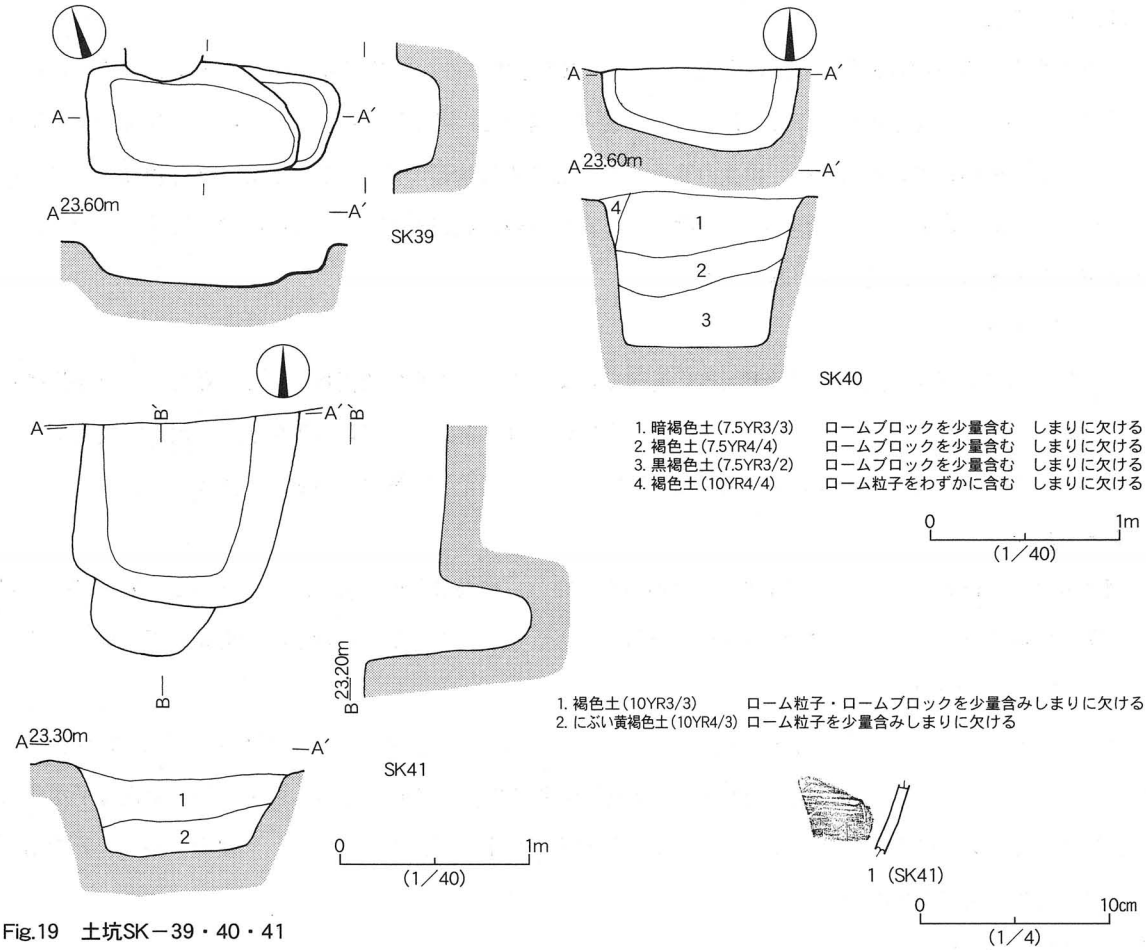


Fig.19　土坑SK－39・40・41

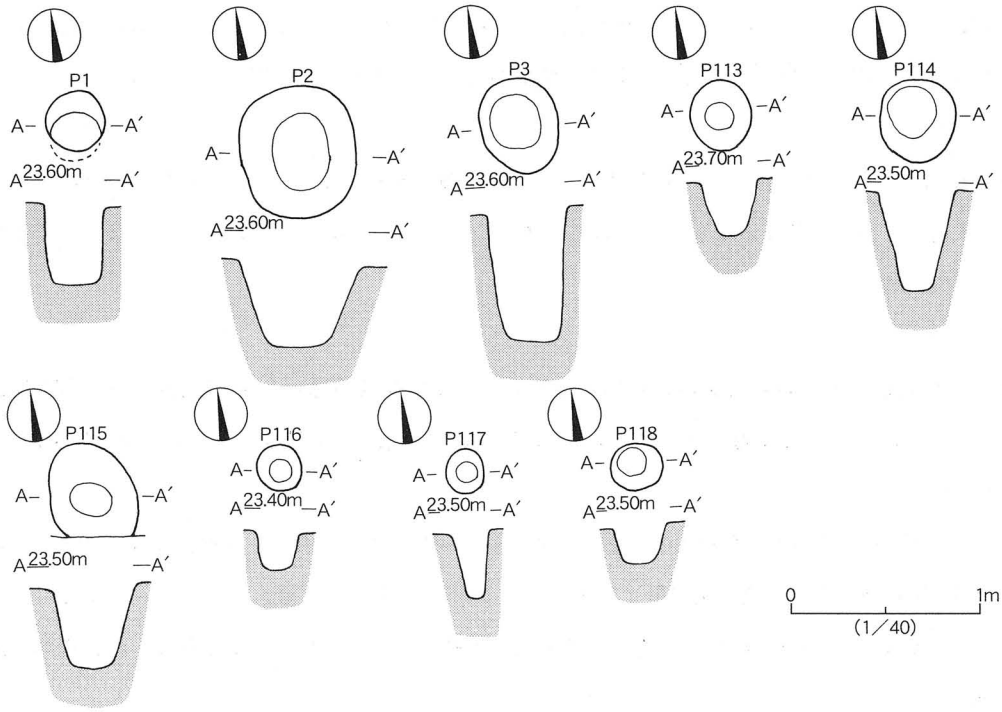


Fig.20　柱穴状遺構P1・2・3、113・114・115・116・117・118

SK－41（Fig.19）

調査区中央東寄りに位置する。北側が調査区外にある。形状は南北に長い長方形を呈し、確認された規模は長軸100cm、推定短軸100cm、深さ41cmを測る。覆土は2層に分かれ、上層は褐色土、下層がにぶい黄褐色土で覆われているものの、締まりに欠ける自然堆積層である。出土遺物として覆土中より須恵器甕の胴部小破片がある。平行タタキによって成形されている。

3．柱穴状遺構（ピット）（Fig.20、Tab.1）

本調査区で検出された柱穴状遺構は9基である。まとまりに欠け、性格は不明である。調査区3の柱穴状遺構とあわせて一覧表で表した。

B）調査区３の調査

1．土坑

SK－13（Fig.22）

調査区北端に位置する。北側が調査区外に延びている。形状は略円形を呈し、確認された規模は長軸120cm、短軸70cm、深さ25cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－14（Fig.22）

調査区北側に位置する。形状は南北に長い長方形を呈し、規模は長軸240cm、短軸93cm、深さ110cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、覆土中から須恵器・甕の小片が2点出土しているが、近世以降の農耕作用土坑である。出土した須恵器甕胴部破片はいずれも平行タタキによる成形が施されている。

SK－15（Fig.22）

調査区東側に位置し、SK－14に切られている。形状は南北に長い楕円形を呈し、確認される規模は長軸75cm、短軸75cm、深さ25cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。近世以降の農耕作用土坑である。

SK－16（Fig.22）

調査区北側に位置する。形状は東西に主軸をもつ楕円形を呈し、規模は長軸215cm、短軸144cm、深さ10cmを測る。本跡には4基の柱穴状遺構が切り合っている。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、

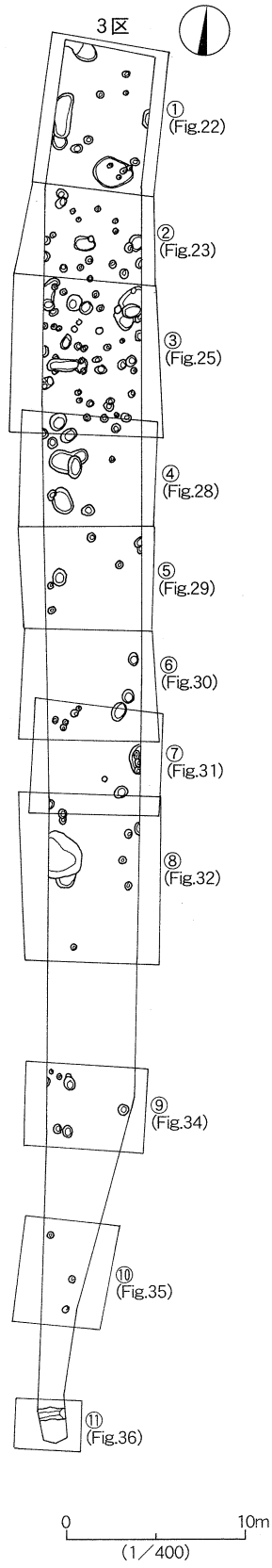


Fig.21　古薬師遺跡図割図

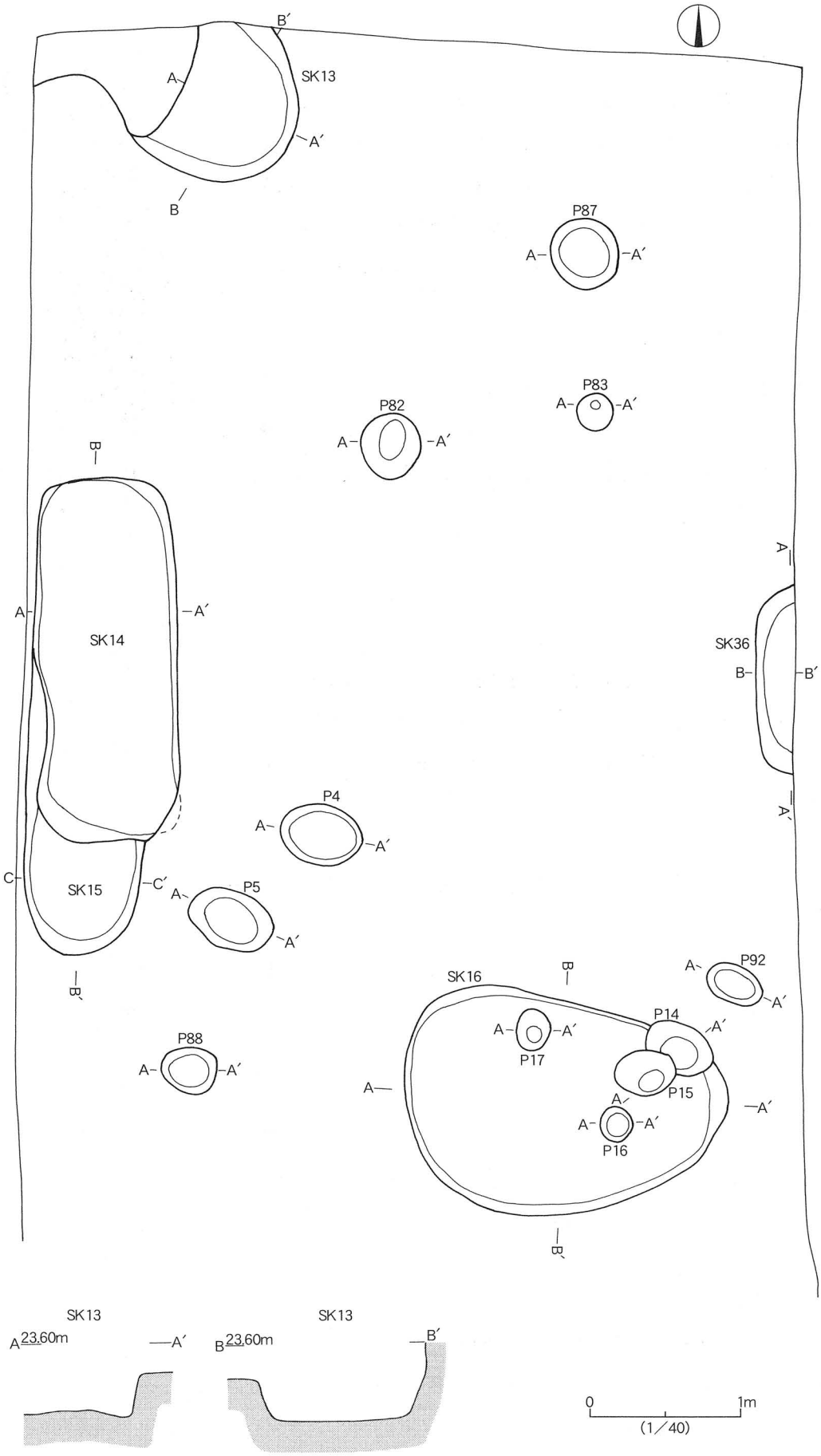


Fig.22　土坑SK－13・14・15・16・36　柱穴状遺構P4・5・14・15・16・17・82・83・87・88・92

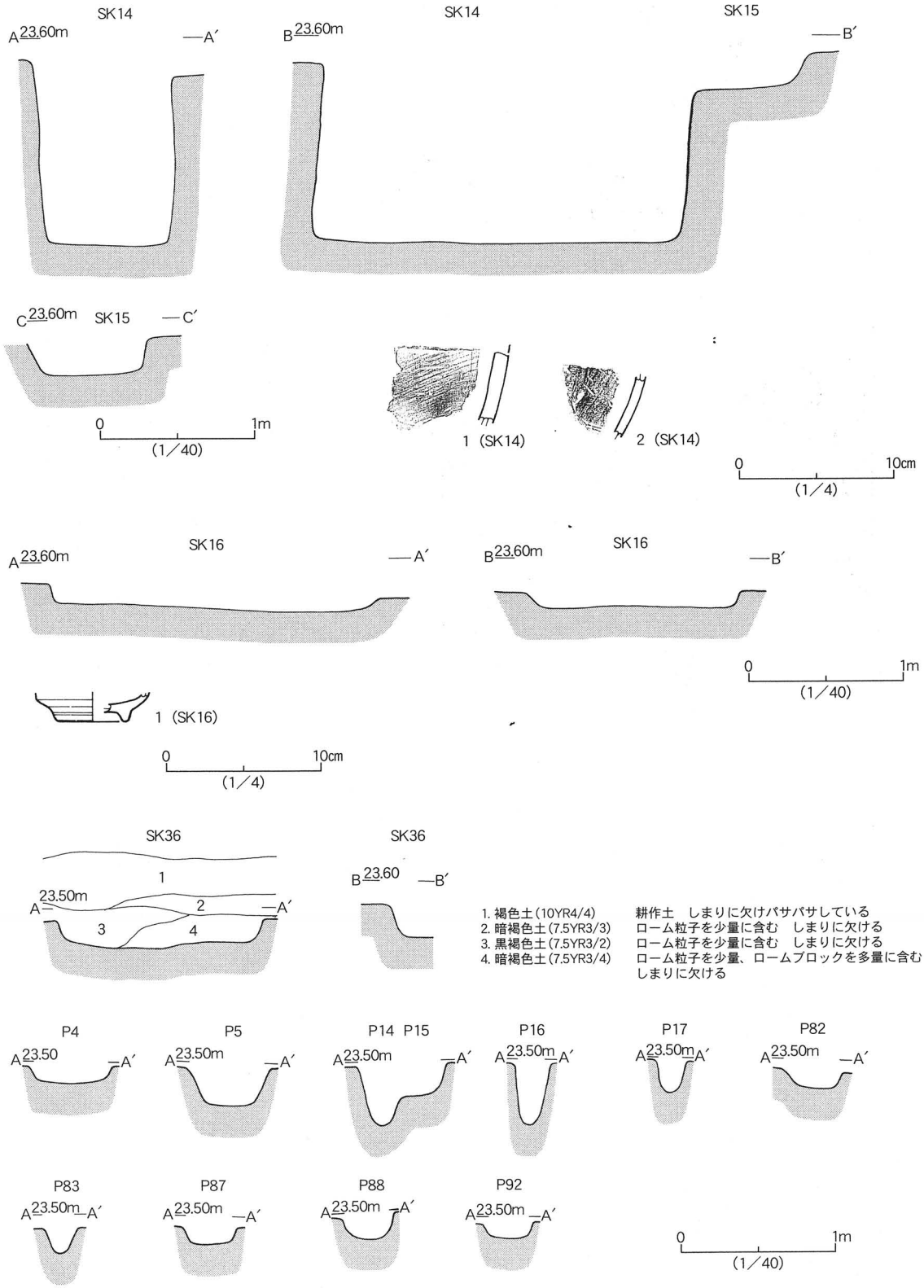


Fig.23 土坑SK－14・15・16・36 柱穴状遺構P4・5・14・15・16・17・82・83・87・88・92

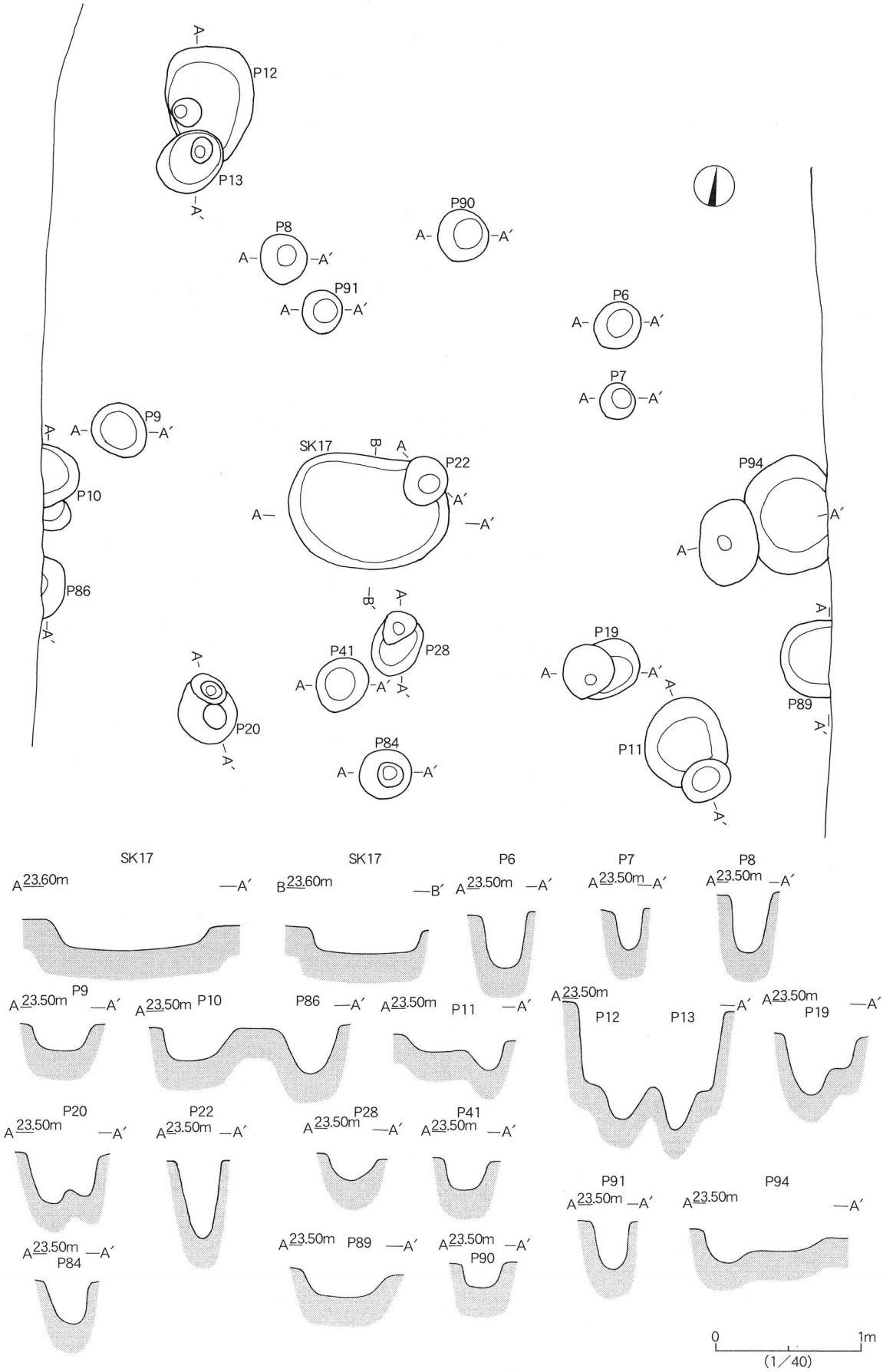


Fig.24　土坑SK－17　柱穴状遺構P6・7・8・9・10・11・12・13・19・20・22・28・41・84・86・89・90・91・94

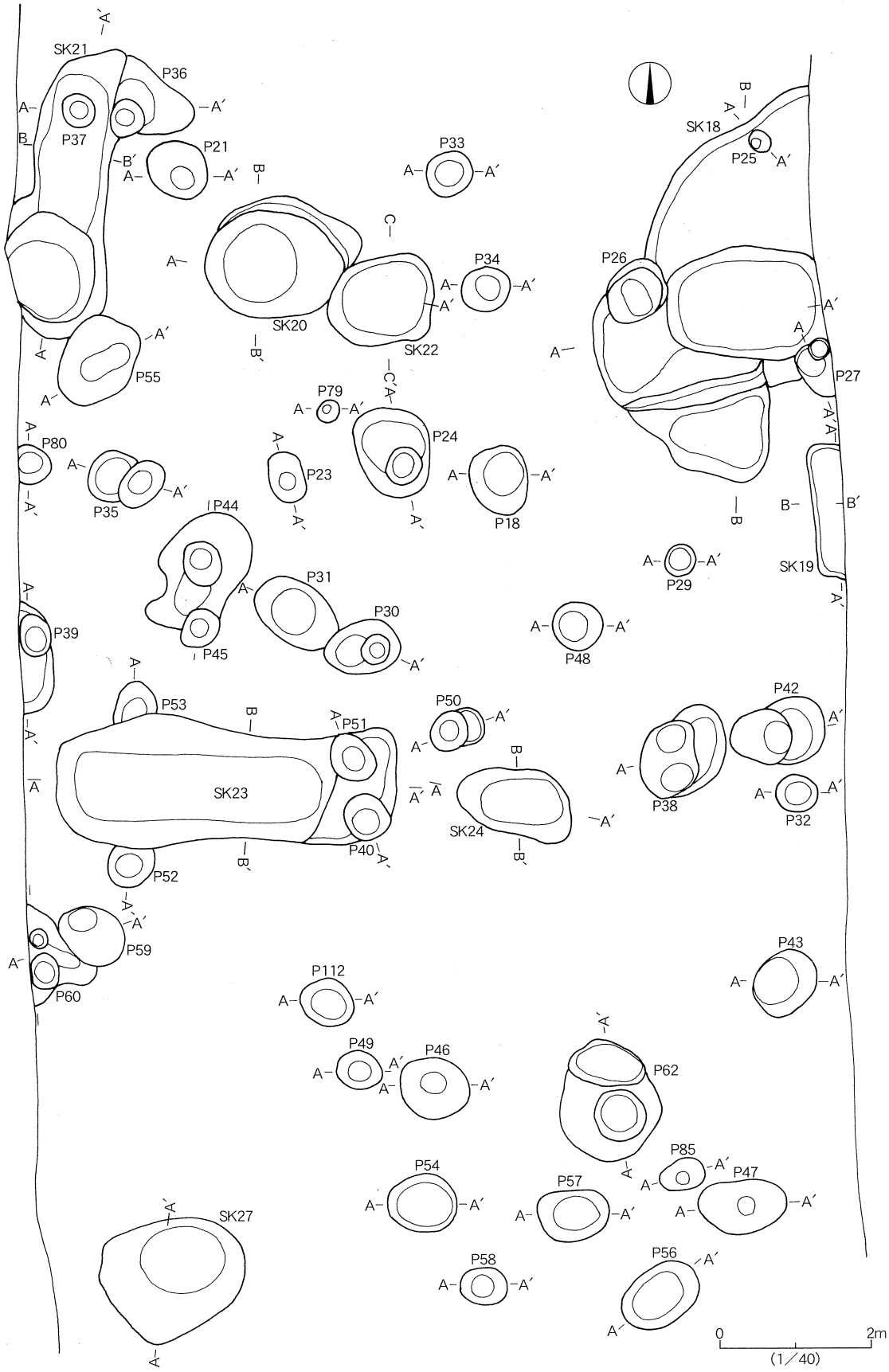


Fig.25　土坑SK－18・19・20・21・22・23・24・27　柱穴状遺構P18・21・23・24・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・60・62・79・80・85・112

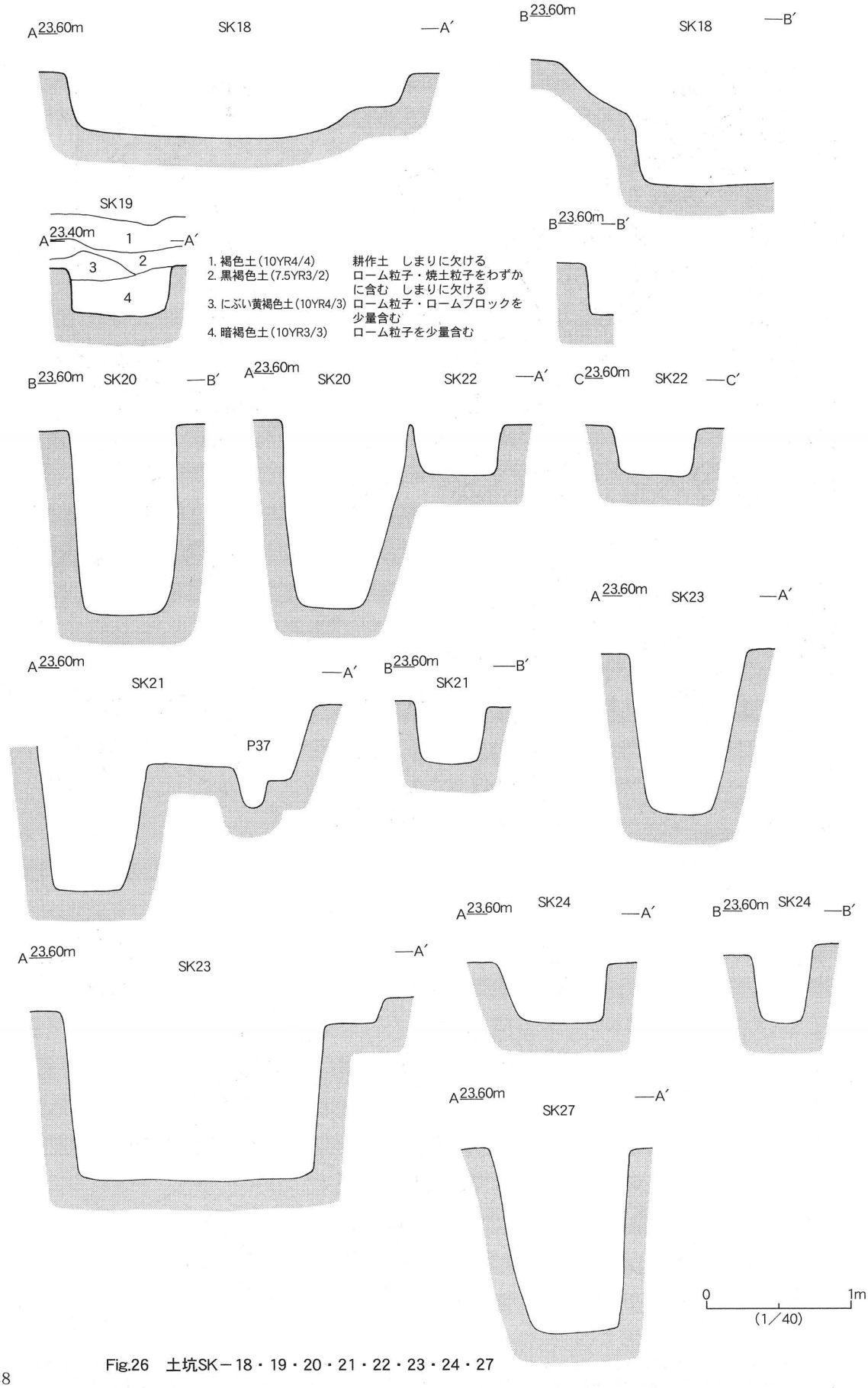


Fig.26　土坑SK－18・19・20・21・22・23・24・27

出土遺物は近世の陶器・小椀がある。しかし、周辺の状況から判断して近世以降の農耕作用土坑である。

SK－17（Fig.24）

調査区北側に位置する。形状は東西に長い楕円形を呈し、規模は長軸110cm、短軸77cm、深さ20cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、出土遺物はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－18（Fig.25・26）

調査区北側付近に位置する。東側半分近くが調査区外に延びている。形状は楕円形であるが、掘形が複雑である。規模は確認面の長軸238cm、短軸155cm、深さ85cmを測る。覆土は大きく3層に分かれ、上層が暗褐色土、中層が褐色土、下層が明黄褐色土で覆われているが、いずれも締まりがなく人為的な埋め戻し土層である。遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－19（Fig.25）

調査区北側で、SK－18と接している。東側が調査区外にある。形状は南北に長い長方形を呈し、確認された規模は長軸95cm、短軸20cm、深さ35cmを測る。覆土は3層に分かれ、上層は黒褐色土、中層がにぶい黄褐色土、下層は暗褐色土で覆われているものの、締まりに欠ける人為的な埋め戻し土層である。

SK－20（Fig.25・26）

調査区北端に位置する。形状は楕円形を呈し、規模は長軸100cm、短軸65cm、深さ140cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－21（Fig.25・26）

調査区北側に位置する。形状は南北に長い長方形を呈し、南側に円形土坑が伴う。本来は別個の土坑であろう。規模は長軸190cm、短軸50cm、深さ42cmを測る。また南側付設土坑は長軸70cm、短軸58cm、深さ90cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－22（Fig.25）

調査区北側に位置し、SK－20に接している。形状は円形を呈し、規模は長軸60cm、短軸57cm、深さ36cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。近世以降の農耕作用土坑である。

SK－23（Fig.25・26）

調査区北側に位置する。形状は東西に長い長方形を呈し、規模は長軸225cm、短軸90cm、深さ114cmを測る。本跡には2基の柱穴状遺構が切り合っている。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－24（Fig.25・26）

調査区北側に位置する。形状は東西に長い楕円形を呈し、規模は長軸80cm、短軸45cm、深さ45cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、出土遺物はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－25（Fig.28）

調査区中央北側付近に位置する。土坑SK－32や33と切り合っている。形状は東西に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸100cm以上、短軸126cm、深さ20cmを測る。覆土は締まりがなく人為的な埋め戻し土層である。遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

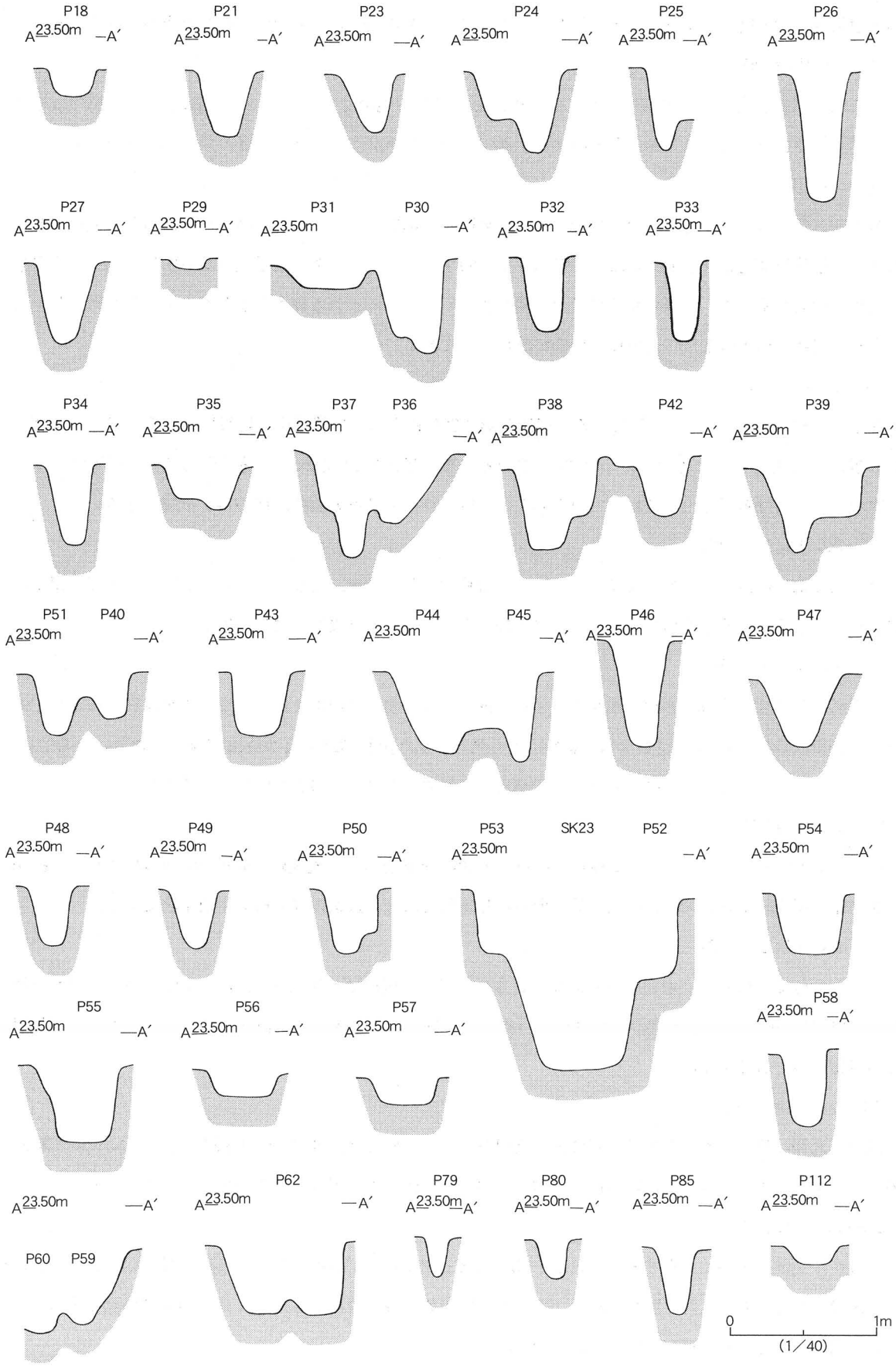


Fig.27　柱穴状遺構P18・21・23・24・25・26・27・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・60・62・79・80・85・112

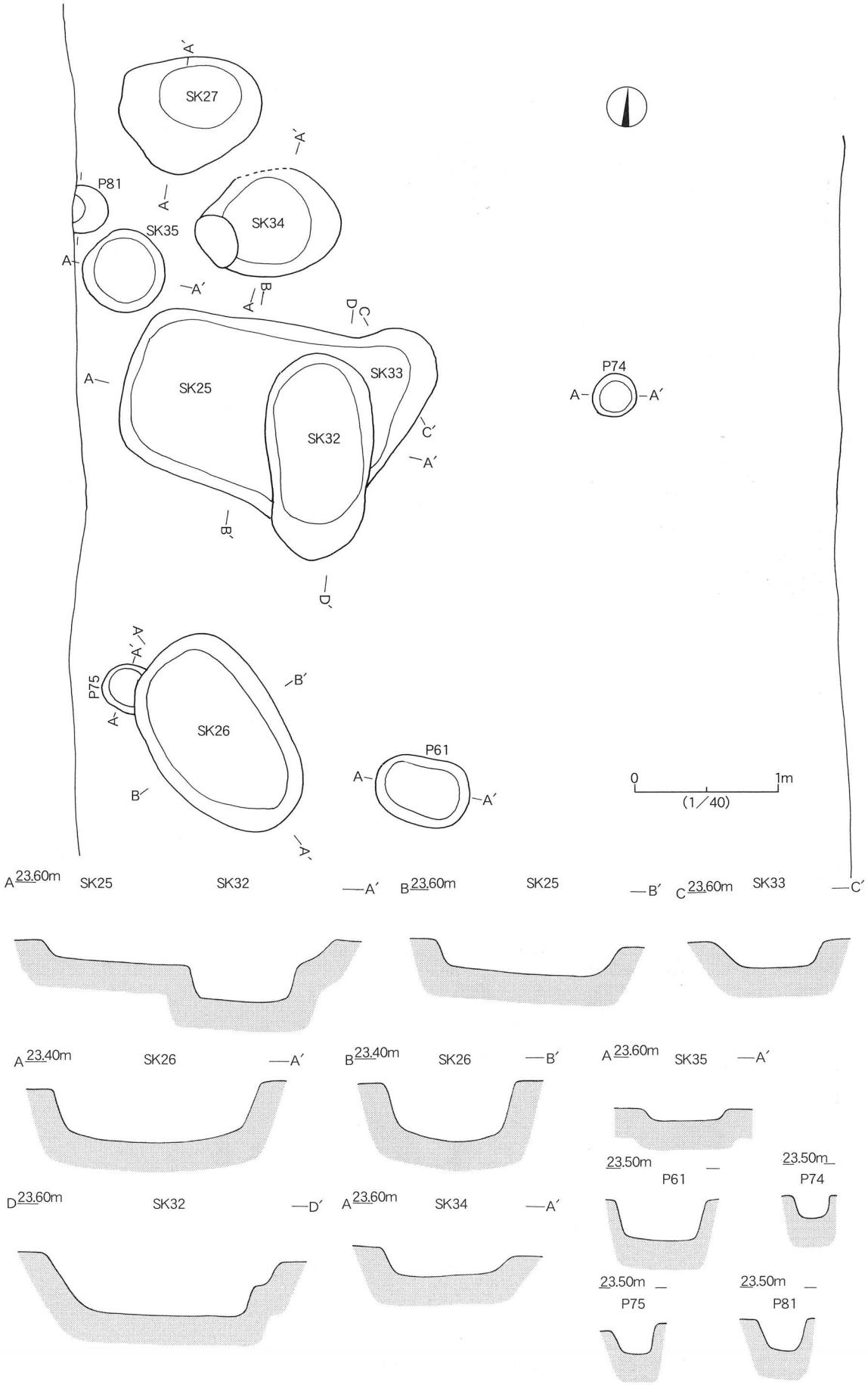


Fig.28　土坑SK－25・26・27・32・33・34・35　柱穴状遺構P61・74・75・81

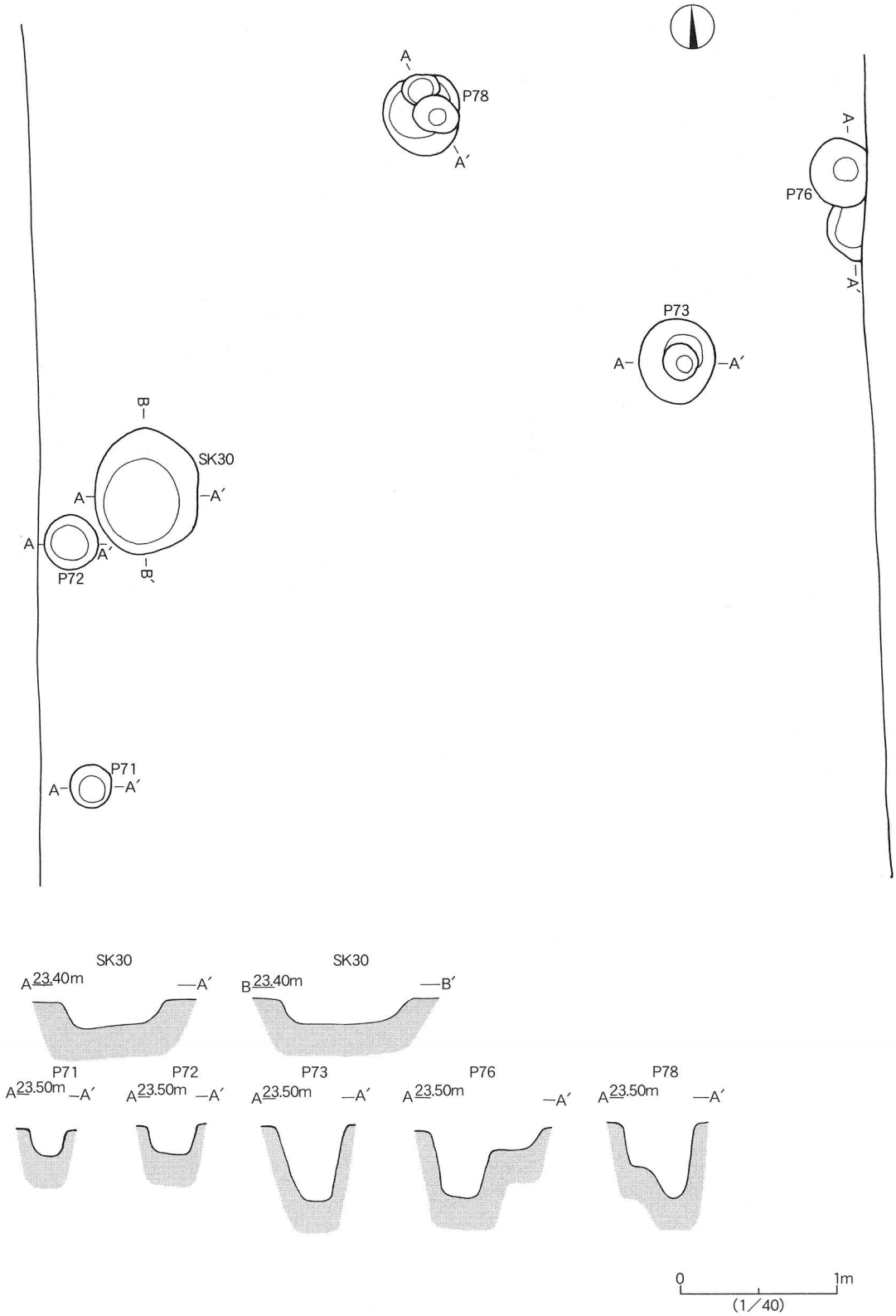


Fig.29　土坑SK－30　柱穴状遺構P71・72・73・76・78

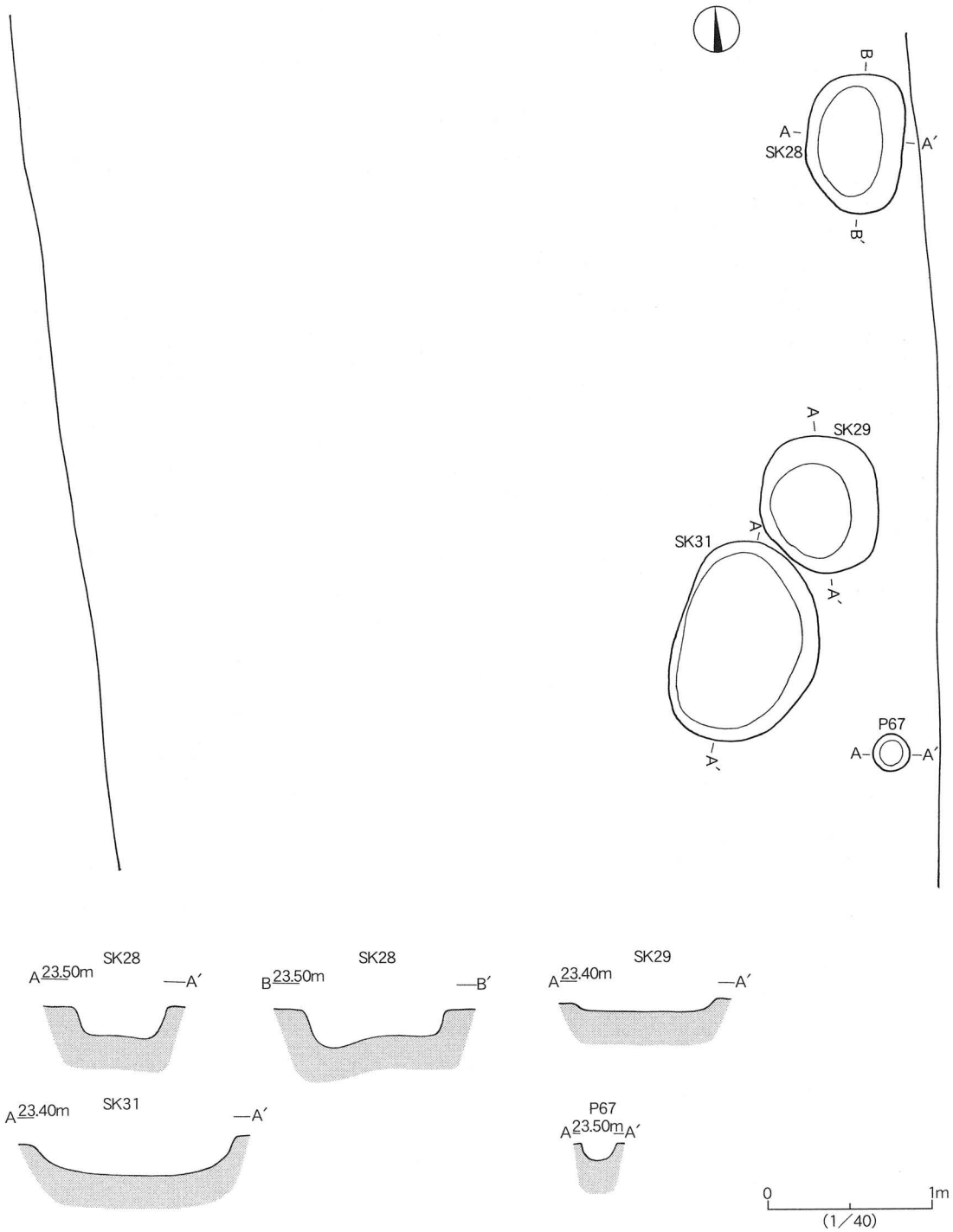


Fig.30　土坑SK－28・29・31　柱穴状遺構P67

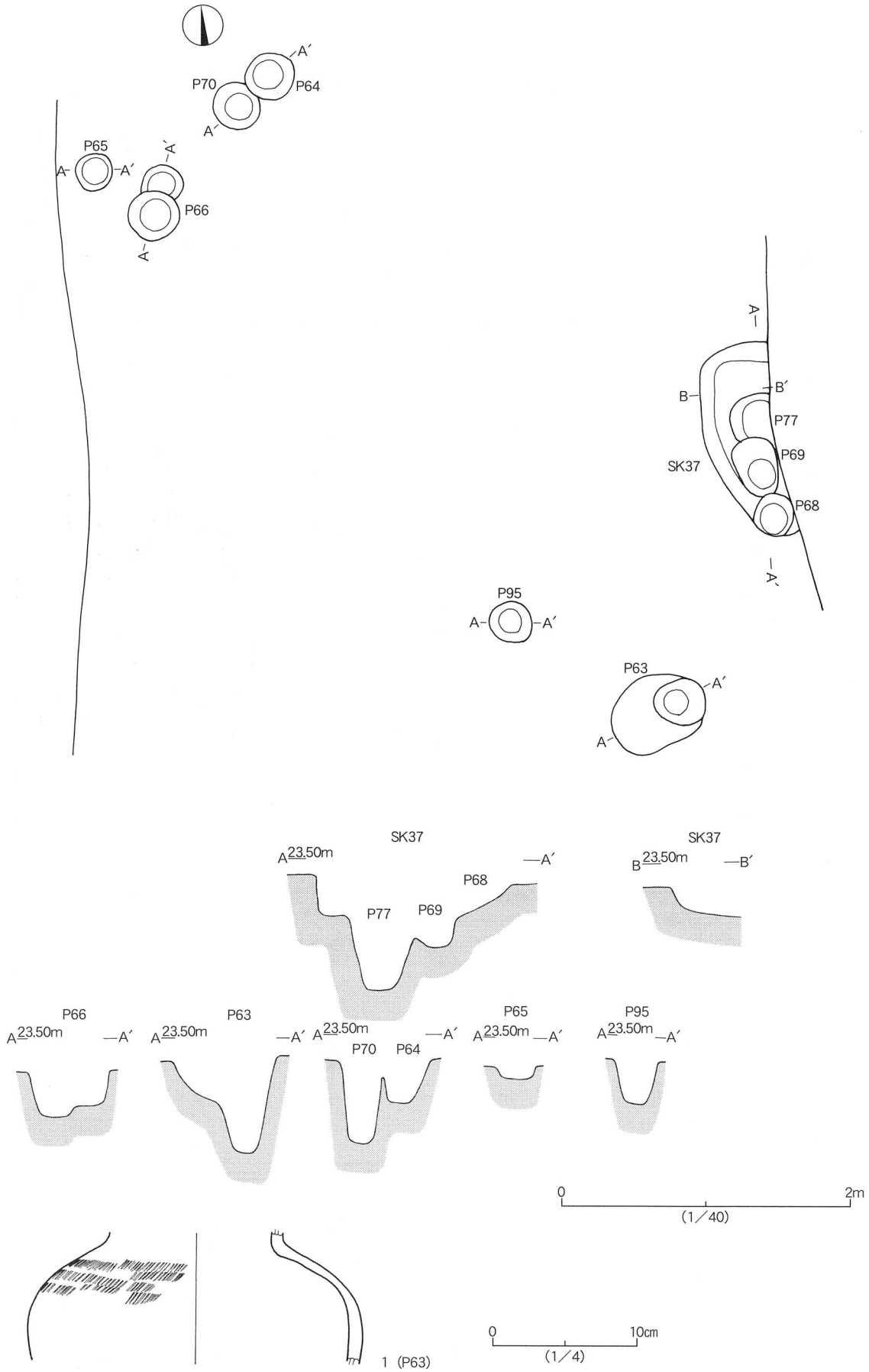


Fig.31　土坑－37　柱穴状遺構P63・64・65・66・68・69・70・77・95

SK－26（Fig.25）

調査区中央北側で、形状は南北に長い楕円形を呈している。規模は長軸145cm、短軸95cm、深さ42cmを測る。覆土は締まりに欠ける人為的な埋め戻し土層である。

SK－27（Fig.25・26）

調査区中央北側に位置する。形状は略円形を呈し、規模は長軸93cm、短軸75cm、深さ127cmを測る。覆土は締まりの欠ける自然堆積層で、遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－28（Fig.30）

調査区中央に位置する。形状は南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸240cm、短軸93cm、深さ110cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、覆土中から須恵器・甕の小片が出土しているが、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－29（Fig.30・38）

調査区中央に位置し、SK－31に接している。形状は南北にやや長い楕円形を呈し、長軸75cm、短軸75cm、深さ25cmを測る。覆土中より人骨片と炭化物が多量に出土した。層位は3層に分けられ1層はローム粒子・ロームブロックを少量含む暗褐色土で、下層から人骨が検出された。2層も同じくローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土で、3層に人骨と炭化物が堆積していた。いずれも締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。近世の土坑墓である。

SK－30（Fig.30）

調査区ほぼ中央に位置する。形状は円形を呈し、規模は長軸80cm、短軸65cm、深さ15cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－31（Fig.30・38）

調査区中央に位置する。形状は南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸120cm、短軸80cm、深さ17cmを測る。覆土中より人骨の裂片がまとまって出土している。層位は2層に分けられ1層はローム粒子を少量含む暗褐色土で、下層から人骨が検出された。2層はローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土である。いずれも締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。近世の土坑墓である。

SK－32（Fig.28）

調査区北側付近に位置する。東側半分近くが調査区外に延びている。形状は楕円形であるが、西側はSK－25、北側にSK33を切って構築している。規模は46cm、短軸75cm、深さ44cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－33（Fig.28）

調査区中央北側で、SK－32に切られている。形状は南北にやや長い楕円形を呈し、確認された規模は長軸70cm、短軸53cm、深さ20cmを測る。覆土は締まりに欠ける人為的な埋め戻し土層である。

SK－34（Fig.28）

調査区中央北側に位置する。形状は楕円形を呈し、規模は長軸100cm、短軸75cm、深さ20cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、遺物の出土はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

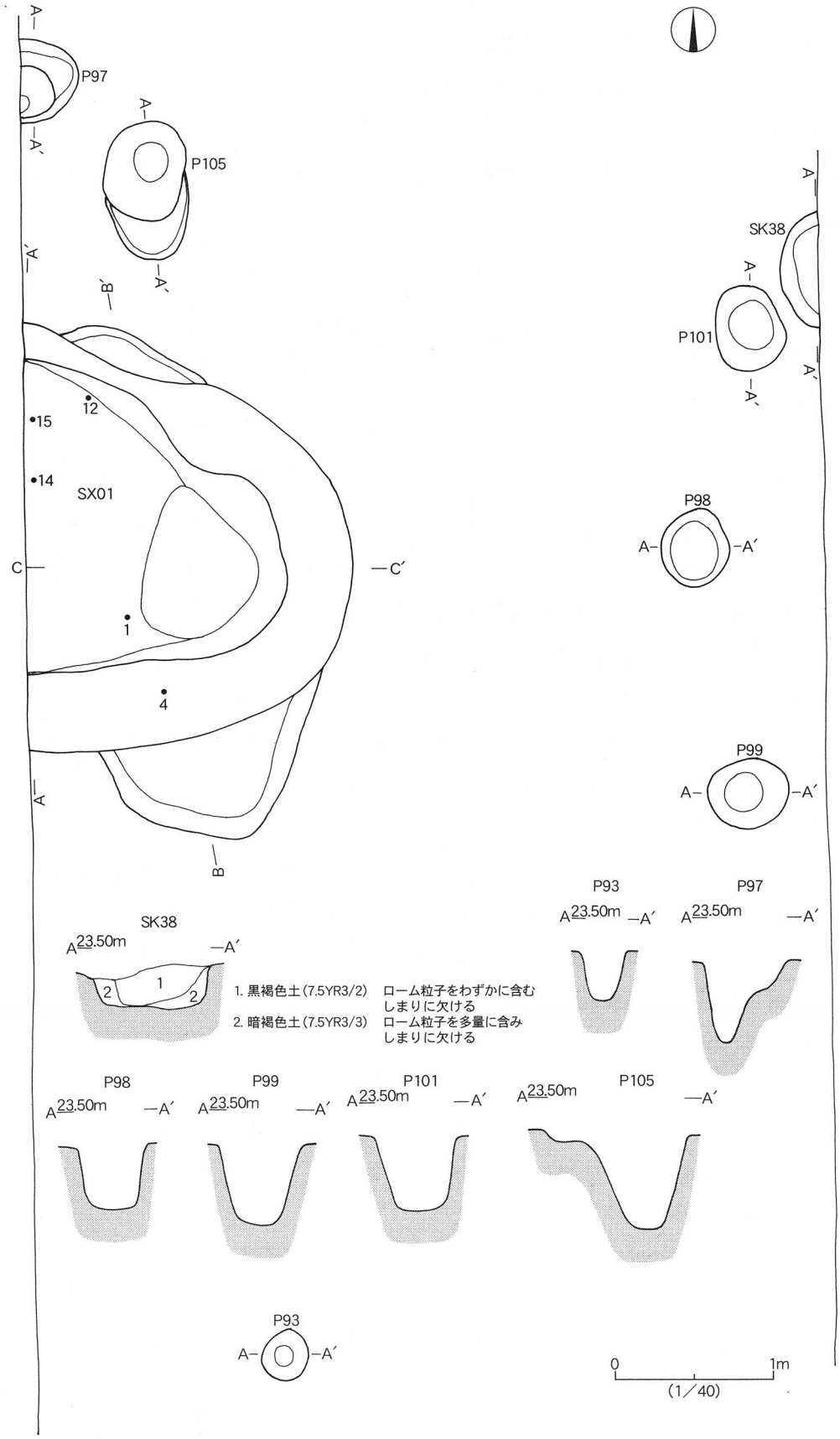


Fig.32　土坑SK－38　柱穴状遺構P93・97・98・99・101・105　竪穴状遺構SX－01

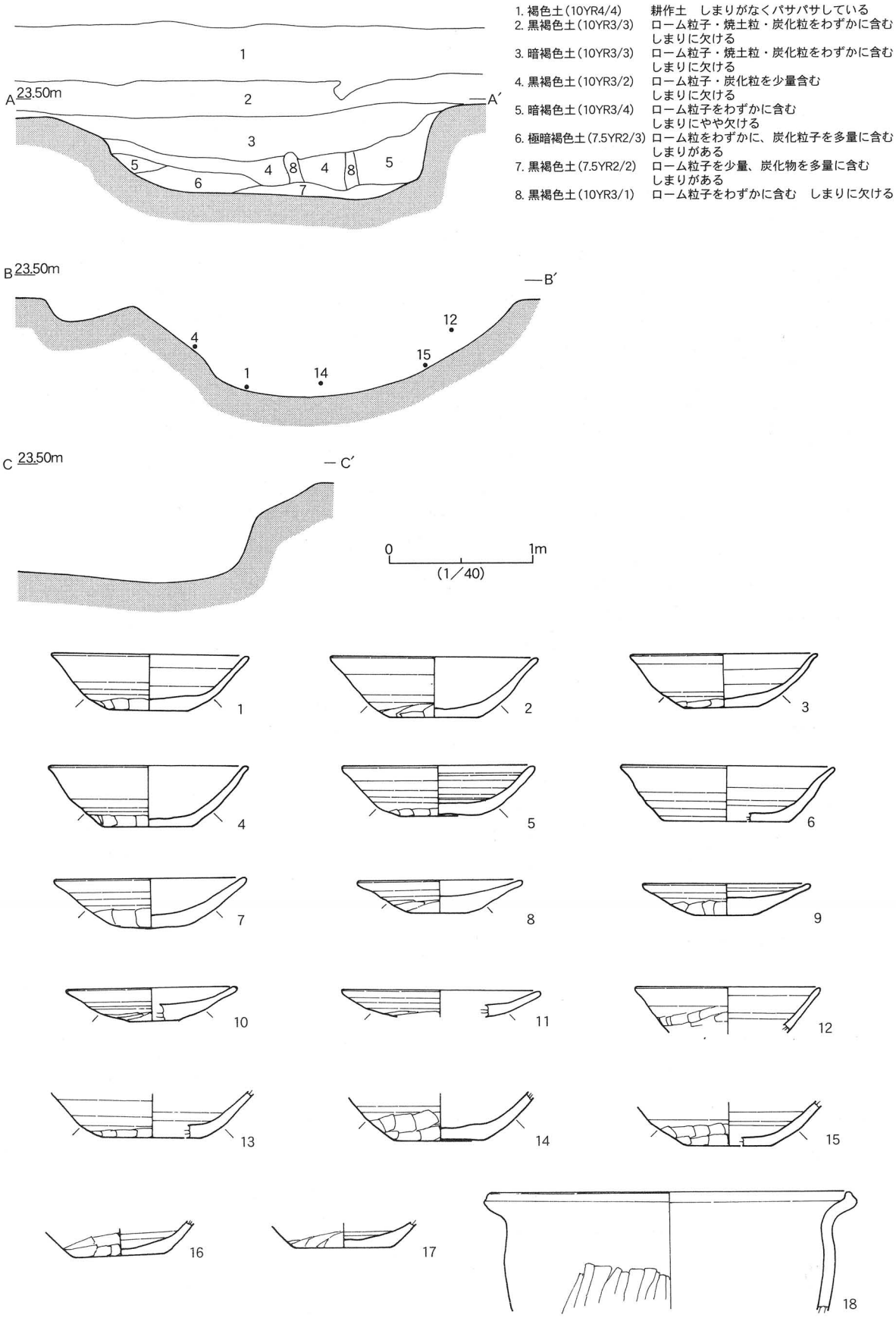


Fig.33　竪穴状遺構SX－01

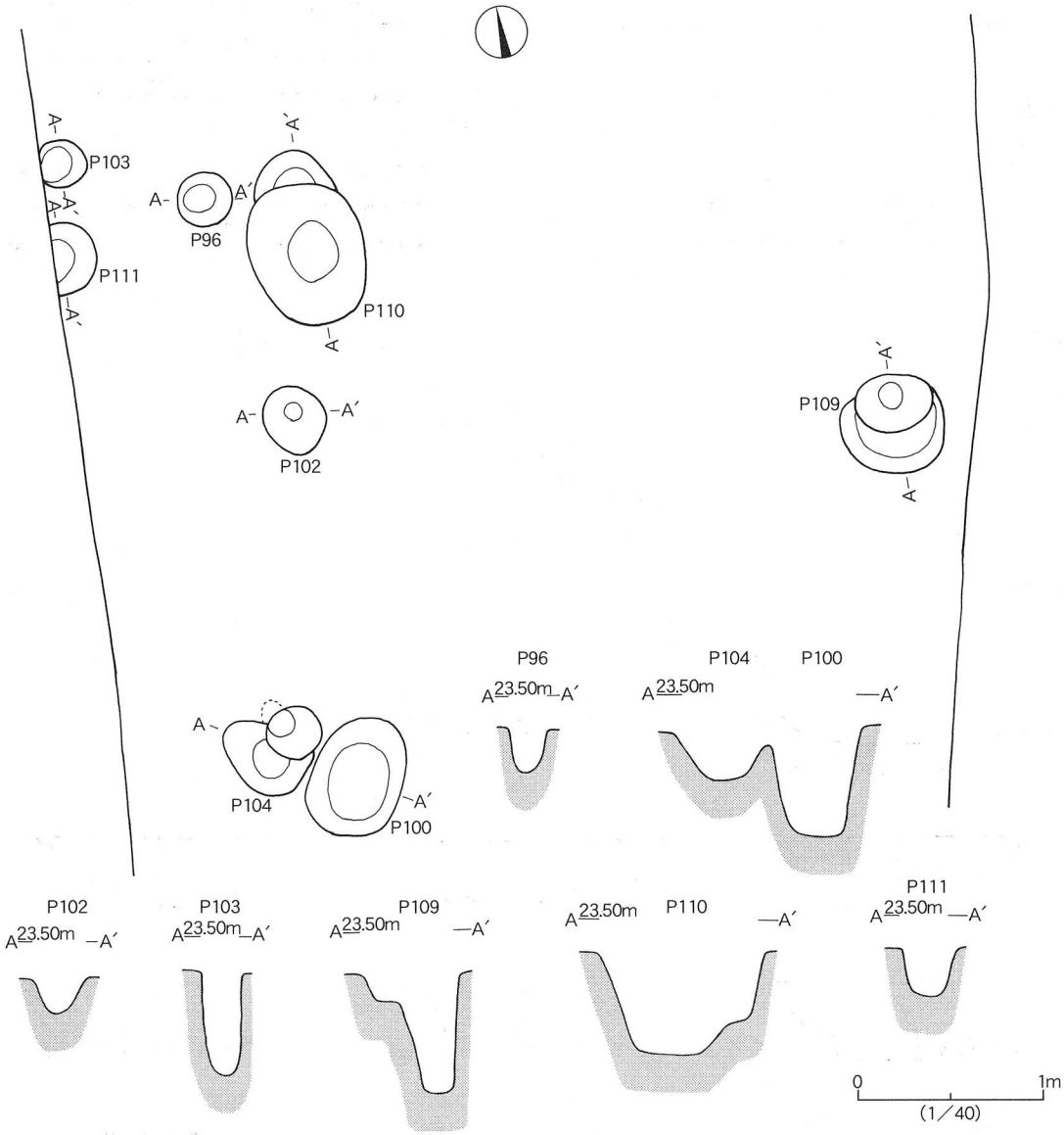


Fig.34　柱穴状遺構P96・100・102・103・104・109・110・111

SK－35（Fig.28）

調査区中央北側に位置する。形状は円形を呈し、規模は長軸60cm、短軸55cm、深さ8cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－36（Fig.22）

調査区北側に位置し、東側の大半が調査区外に延びている。形状は隅丸長方形を呈し、確認される規模は長軸128cm、短軸25cm、深さ21cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層である。近世以降の農耕作用土坑である。

SK－37（Fig.31）

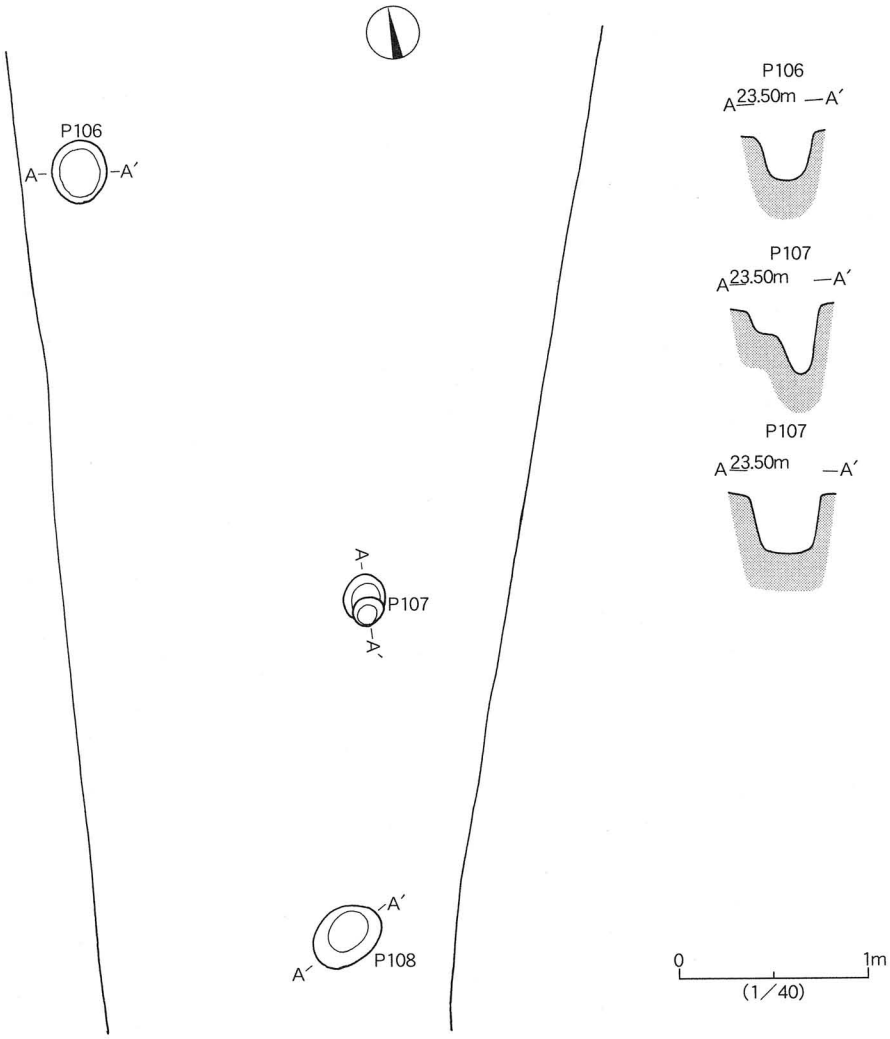


Fig.35　柱穴状遺構P106・107・108

調査区中央に位置する。東側の大半が調査区外に延びている。形状は南北に長い楕円形を呈し、確認される規模は長軸135cm、短軸48cm、深さ28cmを測る。本跡には3基の柱穴状遺構が切り合っている。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、近世以降の農耕作用土坑である。

SK－38（Fig.32）

調査区中央南側に位置する。形状は南北に長い楕円形を呈し、確認される規模は長軸74cm、短軸25cm、深さ18cmを測る。覆土は締まりの欠ける人為的な埋め戻し土層で、出土遺物はなく、近世以降の農耕作用土坑である。

2．溝状遺構

SD－01（Fig.36）

調査区南端に位置する。幅45～61cm、深さ14cmの浅い窪みで東西方向に1.5m検出された。断面形は逆台形を呈し、覆土は2層に分層された。溝の大半を覆っている暗褐色土はローム粒子を少量含み、締まりに

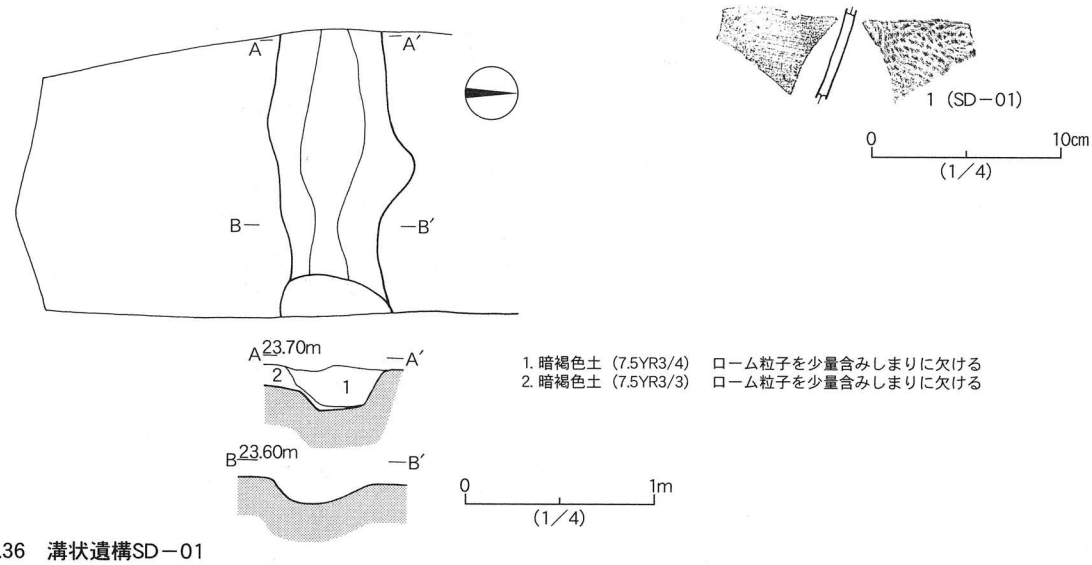


Fig.36　溝状遺構SD−01

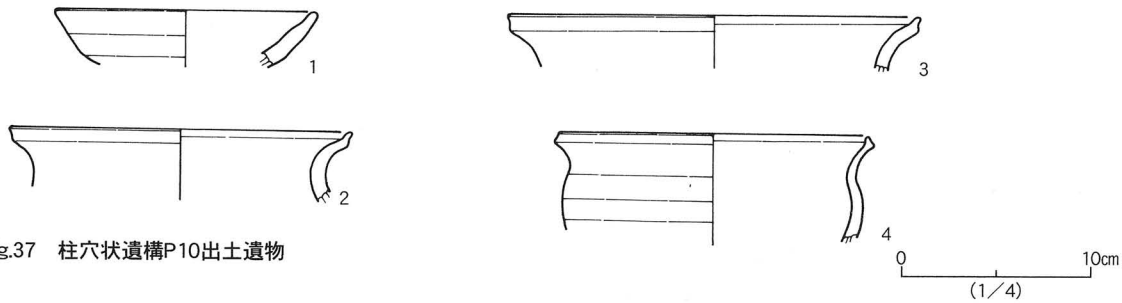


Fig.37　柱穴状遺構P10出土遺物

欠ける。最下層にローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。遺物の出土として、須恵器甕胴部小破片がある。外面は平行タタキで成形され、内面は青海波紋がみられる。

3．竪穴状遺構

竪穴状遺構SX−01（Fig.32・33）

調査区中央北側に位置する。西側約半分が調査区外に延びていく。形状は東西に長い楕円形を呈し、規模は確認面で長径350cm、短径210cm、深さ66cmを測る。底面は平坦面は少なく、若干の起伏がみられる。また壁は緩傾斜して立ち上がる。覆土は5層に分層可能であるが、大きく上層の明褐色土はローム粒子・炭化粒子を少量含み、締まりに欠ける。中層は黒褐色土と暗褐色土でローム粒子や炭化粒子を含む。下層は黒褐色土と極暗褐色土で多量の炭化粒子とローム粒子をわずかに含む。やはり締まりに欠ける。いずれも自然堆積層である。

遺物は多く出土している。土師器坏・皿と甕および須恵器坏・皿であるが、完形もしくは完形に近い坏・皿が8点ある。いずれも床面より若干浮いているとはいえ、9世紀後半の時期としてはまとまりのある出土状況である。

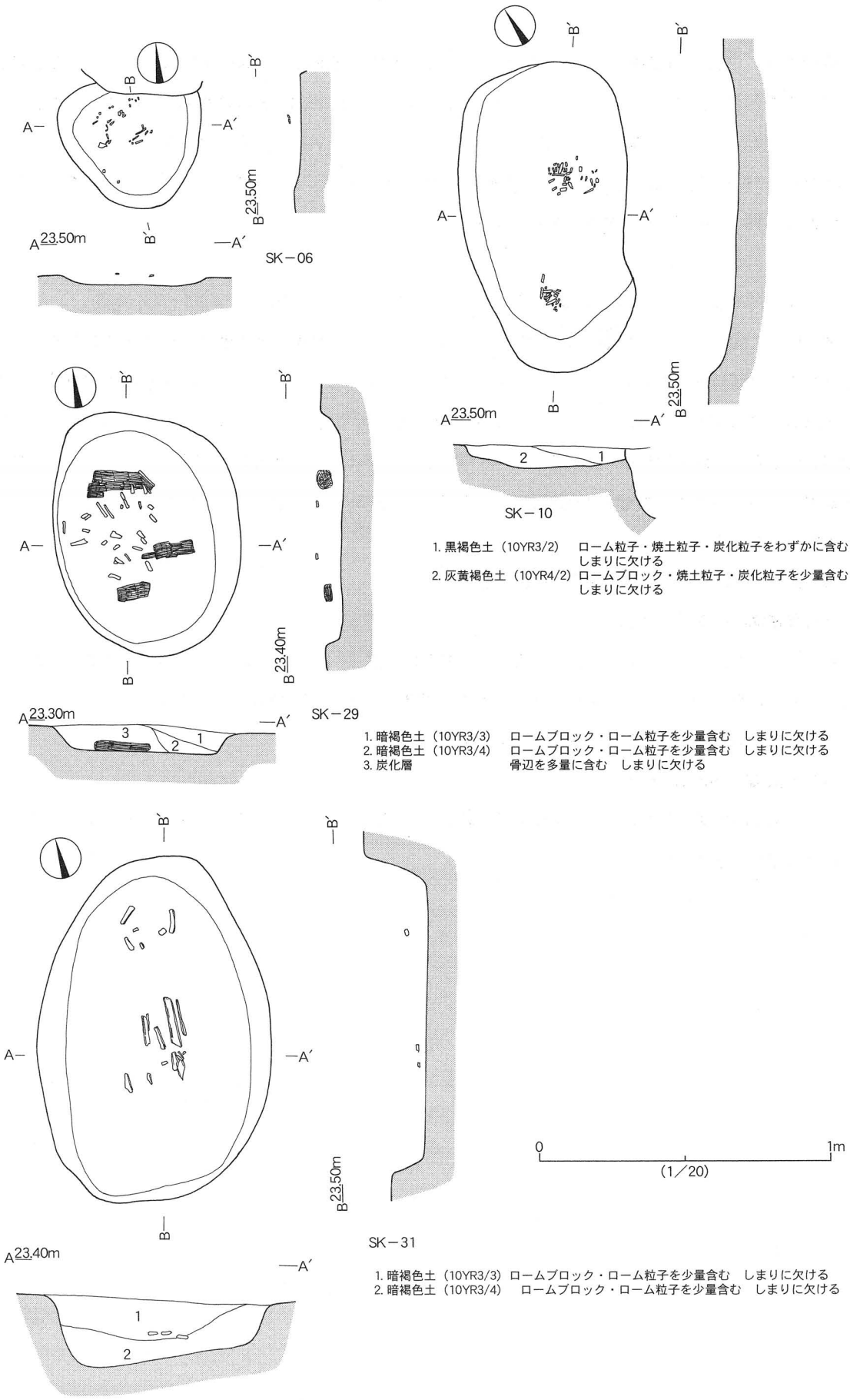


Fig.38 土坑SK－06・10・29・31（墓坑）

Fig.33－1～6は土師器坏である。いずれもロクロ成形で、底部は一方向の手持ちヘラ削り。底部周縁も手持ちヘラ削りで整形されている。7～11は皿である。8～11は底部が極端に肥厚し、体部の立ち上がりは短く低い。12～17は須恵器坏である。ロクロ成形で、底部は一方向の手持ちヘラ削り。底部周縁も手持ちヘラ削り。18は土師器甕の破片である。口唇部は短くつまみ上げられ、口縁部はくの字状に外反する。肩部の張りは弱く、体部は縦位のヘラ削りを施す。

4．柱穴状遺構（ピット）（Fig.22・23・24・25・27・28・29・30・31・32・34・35）

調査区3で検出された柱穴状遺構は109基である。とくに土坑が集中する中央から北側にまとまり、逆に中央から南側にはまばらである。いずれにせよ、これら多くのピット群が建物跡のように間尺の合った明確な上屋構造を呈するものはなく、さらに柵列のように直線的に並ぶものもない。ただし、不確実であるが、畑等の境木あるいは墓地等を囲む垣根、あるいは道脇の並木としての植栽痕の可能性があることも考慮する必要があろうが、大半は性格の不明確なものがばかりである。ここでは調査区2の柱穴状遺構とあわせて一覧表で表した（Tab.1）。

なお、P－10およびP－63より遺物が出土している。

柱穴状遺構P－10（Fig.37）

1は土師器坏である。ロクロ成形で体部はやや肥厚し、直線的に外方へ開く。2・3は土師器甕の破片である。口唇部が短くつまみ上げられている。4は須恵器甕である。口唇部が短くつまみ上げられ、口縁部は緩く外反する。肩部の張りは弱く、体部は内彎気味に移行する。

柱穴状遺構P－63（Fig.31）

1は須恵器壷胴部破片である。口縁部は緩く外反し、肩部が張り、体部は球形を呈する。外面に平行タタキによって成形されている。

（小川　和博）

Tab.1　柱穴状遺構一覧表

遺構番号	挿図番号	形態分類	規模			出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ		
P1	Fig.20	円形	31	30	43		
P2	Fig.20	円形	35	31	46		
P3	Fig.20	楕円形	50	41	67		
P4	Fig.22	楕円形	55	40	10		
P5	Fig.22	楕円形	60	39	28		
P6	Fig.24	円形	32	29	36.5		
P7	Fig.24	円形	26	22	24		
P8	Fig.24	円形	34	30	41.5		
P9	Fig.24	円形	37	34	18		
P10	Fig.24	円形	50	42	21		
P11	Fig.24	円形	60	54	10.5	土師器・須恵器	
P12	Fig.24	楕円形	86	50	74		
P13	Fig.24	円形	48	40	67		
P14	Fig.22	楕円形	46	32	33		
P15	Fig.22	楕円形	40	30	39		
P16	Fig.22	円形	22	22	39		
P17	Fig.22	円形	28	22	30.5		
P18	Fig.25	円形	44	36	19		
P19	Fig.24	楕円形	52	38	38.5		
P20	Fig.24	円形	50	40	24		
P21	Fig.25	円形	46	34	47		
P22	Fig.24	円形	38	30	62		
P23	Fig.25	楕円形	34	22	39		
P24	Fig.25	円形	60	44	57		
P25	Fig.25	円形	15	11	19		
P26	Fig.25	楕円形	38	30	85		
P27	Fig.25	円形	38	32	77		
P28	Fig.24	楕円形	44	30	37		
P29	Fig.25	円形	20	19	6		
P30	Fig.25	楕円形	50	34	51		
P31	Fig.25	楕円形	64	39	13		
P32	Fig.25	円形	28	26	49		
P33	Fig.25	円形	31	31	55		
P34	Fig.25	円形	32	30	54		
P35	Fig.25	楕円形	49	30	29		
P36	Fig.25	楕円形	94	50	42		
P37	Fig.25	円形	24	21	30		
P38	Fig.25	楕円形	71	48	62		
P39	Fig.25	楕円形	75	40	52		
P40	Fig.25	円形	30	29	26		
P41	Fig.24	円形	41	32	22		
P42	Fig.25	楕円形	65	39	36		
P43	Fig.25	楕円形	47	37	45		
P44	Fig.25	楕円形	85	54	53		
P45	Fig.25	円形	27	22	56		
P46	Fig.25	円形	48	40	47		
P47	Fig.25	楕円形	60	35	50		
P48	Fig.25	円形	34	32	41		
P49	Fig.25	楕円形	31	25	39		
P50	Fig.25	楕円形	35	25	46		
P51	Fig.25	楕円形	36	29	40		
P52	Fig.25	円形	35	26	54		
P53	Fig.25	楕円形	47	28	44		
P54	Fig.25	楕円形	46	38	37		
P55	Fig.25	楕円形	64	52	49		
P56	Fig.25	楕円形	67	38	18		
P57	Fig.25	楕円形	46	34	20		
P58	Fig.25	楕円形	29	23	49		
P59	Fig.25	楕円形	48	35	50		

P60	Fig.25	円形	22	22	58		
P61	Fig.28	楕円形	64	46	27.5		
P62	Fig.25	楕円形	83	60	52		
P63	Fig.31	楕円形	70	51	66	須恵器壷	
P64	Fig.31	円形	34	32	29		
P65	Fig.31	円形	26	25	7		
P66	Fig.31	楕円形	54	27	33		
P67	Fig.30	円形	34	26	26		
P68	Fig.31	円形	26	26	28		
P69	Fig.31	楕円形	40	28	59		
P70	Fig.31	円形	34	30	54.5		
P71	Fig.29	円形	27	25	19.5		
P72	Fig.29	円形	36	34	35		
P73	Fig.29	円形	54	49	47.5		
P74	Fig.28	円形	32	28	14		
P75	Fig.28	円形	42	32	16		
P76	Fig.29	円形	74	39	42		
P77	Fig.31	円形	48	42	21		
P78	Fig.29	円形	53	48	42		
P79	Fig.25	円形	15	14	30		
P80	Fig.25	円形	30	24	26		
P81	Fig.28	楕円形	44	33	21		
P82	Fig.22	円形	42	38	13.5		
P83	Fig.22	円形	24	22	17.5		
P84	Fig.24	円形	32	32	29		
P85	Fig.25	楕円形	30	18	47		
P86	Fig.24	円形	43	30	30		
P87	Fig.22	円形	47	43	12		
P88	Fig.22	楕円形	36	30	23		
P89	Fig.24	円形	63	55	15		
P90	Fig.24	円形	35	32	17.5		
P91	Fig.24	円形	30	25	29.5		
P92	Fig.22	楕円形	40	26	10		
P93	Fig.32	円形	32	25	31.5		
P94	Fig.24	楕円形	58	42	75.5		
P95	Fig.31	円形	30	27	30		
P96	Fig.34	円形	30	30	22		
P97	Fig.32	楕円形	68	52	55		
P98	Fig.32	円形	50	46	38		
P99	Fig.32	楕円形	54	43	51		
P100	Fig.34	楕円形	72	48	53.5		
P101	Fig.32	楕円形	54	42	48		
P102	Fig.34	円形	38	29	22.5		
P103	Fig.34	円形	26	23	57.5		
P104	Fig.34	円形	50	38	58		
P105	Fig.32	楕円形	89	50	61		
P106	Fig.35	円形	34	28	23		
P107	Fig.35	楕円形	28	20	43.5		
P108	Fig.35	楕円形	42	27	31		
P109	Fig.34	円形	56	54	66		
P110	Fig.34	楕円形	94	62	56.5		
P111	Fig.34	楕円形	50	38	26		
P112	Fig.25	円形	34	31	9		
P113	Fig.20	円形	19	17	29		
P114	Fig.20	円形	22	20	55		
P115	Fig.20	円形	25	21	43		
P116	Fig.20	円形	12	12	19		
P117	Fig.20	円形	12	11	35		
P118	Fig.20	円形	15	13	18		

Tab.2　出土遺物観察表

遺構番号	挿図番号	器種	法量（cm）	遺存度	器形の特徴	成・整形手法	色調	胎土
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-1	土師器・坏	口径　13.1 器高　3.1 底径　3.0	完形	底部は丸みをもち、口縁部は外反して、開く。口縁部と体部との境に稜をもつ	外面；口縁部横位のヘラミガキ。 体部ヘラケズリ 内面；横位のヘラミガキ 外面口縁部内面黒色処理	にぶい黄橙色 10YR7/4	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-2	土師器・坏	口径　12.0 器高　2.8 底径　5.0	1/4欠損	底部は丸みをもち、口縁部は外反して、開く。口縁部と体部との境に稜をもつ	外面；口縁部横位のヘラミガキ。 体部ヘラケズリ 内面；横位のヘラミガキ 外面口縁部内面黒色処理	黒褐色 10YR3/2	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-3	土師器・坏	口径　15.0 器高　(2.8) 底径　—	1/8残	底部は丸みをもち、口縁部は短く外反して開く。口縁部と体部との境に稜をもつ。	外面；口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。 内面；横位のヘラミガキ	橙色 2.5YR6/8	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-4	土師器・坏	口径　15.2 器高　(3.4) 底径　13.0	1/8残	底部は丸みをもち、口縁部は内湾気味に開く。 外面口縁部および内面に黒彩処理	外面；口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。 内面；ヘラナデ	橙色 5YR7/6	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-5	土師器・坏	口径　15.8 器高　2.6 底径　13.0	体部1/6残	底部は平坦で、口縁部は急傾して立ち上がる。 内外面赤彩処理	外面；口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。 内面；口縁部横ナデ。体部ヘラナデ	橙色 5YR7/6	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-6	土師器・坏	口径　14.0 器高　3.1 底径　8.0	1/4	底部は平坦で、口縁部は急傾して立ち上がる。	外面；口縁部横ナデ。体部横ナデヘラケズリ。 内面；横位のヘラミガキ	橙色 5YR7/6	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-7	土師器・坏	口径　— 器高　(1.8) 底径　8.0	底部のみ	底部は丸底気味を呈する。	外面；ヘラケズリ 内面；ヘラミガキ	橙色 2.5YR6/8	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-8	土師器・坏	口径　16.0 器高　(2.8) 底径　—	1/16	底部は丸底気味を呈する。 口縁部はほぼ直線的に外上方へ開く。	外面；口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。 内面；ヘラナデ	灰黄褐色 10YR6/2	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-9	土師器・坏	口径　15.8 器高　(3.6) 底径　—	1/16	底部は丸底気味を呈する。 口縁部はほぼ直線的に外上方へ開く。 外面口縁部及び内面に黒色	外面；口縁部ヘラケズリ。 内面；ヘラナデ	灰黄褐色 10YR6/2	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-10	土師器・甕	口径　15.8 器高　(4.0) 底径　—	1/6	体部はほぼ直線的に外上方へ開く。	ロクロ成形 内外面ともロクロ成形痕	にぶい黄褐色 10YR5/3	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-11	土師器・甕	口径　24.8 器高　31.9 底径　10.3	完形	口縁部は強く外反し、口唇部は短く摘み上げられる。肩部は張り、中位より上方で最大径 底部は木葉痕を残す。	外面；口縁部横ナデ 体部は縦位のヘラナデ 内面；口縁部横ナデ。体部ヘラナデ	橙色 5YR7/4	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-12	土師器・甕	口径　21.0 器高　(6.5) 底径　—	1/4	口縁部は強く外反し、口唇部は短く摘み上げられる。肩部ははる。	外面；口縁部横ナデ 体部は縦位のヘラナデ 内面；口縁部横ナデ。体部ヘラナデ	浅黄橙色 10YR8/4	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-13	土師器・甕	口径　18.0 器高　(4.5) 底径　—	1/8残	口縁部は強く外反し、口唇部は短く摘み上げられる。肩部は張る。	外面；口縁部横ナデ 体部は縦位のヘラナデ 内面；口縁部横ナデ。体部ヘラナデ	橙色 5YR7/6	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-14	土師器・甕	口径　22.0 器高　(4.8) 底径　—	1/10残	口縁部は強く外反し、肩部の張りはなく、体部そのまま底部へ移行する。	外面；口縁部横ナデ 体部は縦位のヘラケズリ 内面；口縁部横ナデ。体部横位のヘラナデ	浅黄橙色 10YR8/4	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-15	土師器・甕	口径　— 器高　(2.0) 底径　10.0	1/6	平底の底部から体部が立ち上がる。	外面；体部縦位のヘラケズリ。 底部木葉痕 内面；ヘラナデ	灰黄褐色 10YR6/2	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-16	土師器・甕	口径　— 器高　(2.1) 底径　10.0	1/4	平底の底部から体部が立ち上がる。	外面；体部斜位のヘラナデ 内面；ヘラナデ	灰黄褐色 10YR6/2	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-17	須恵器・坏	口径　16.0 器高　(3.1) 底径　—	1/16	体部は直線的に外上方へ開く。	ロクロ成形	褐灰色 10YR4/1	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-18	須恵器・坏	口径　13.8 器高　4.1 底径　7.0	1/2	やや上げ底の底部から体部は外傾して開き、口縁部は外反気味に立ち上がる。	外面；底部回転ヘラ切り 体部･口縁部ロクロナデ 内面；ロクロナデ	灰色 7.5Y6/1	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-19	須恵器・坏	口径　16.0 器高　(3.4) 底径　—	1/10	体部は直線的に外傾して開く。	ロクロ成形	灰白色 7.5Y8/1	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-20	須恵器・坏	口径　— 器高　(1.5) 底径　9.0	1/4	平底の底部から体部は外傾して開く。	ロクロ成形。 底部手持ちヘラケズリ。	にぶい黄橙色 10YR7/4	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-21	須恵器・坏	口径　— 器高　(1.2) 底径　9.0	1/4	平底の底部から体部は外傾して開く。	ロクロ成形。 底部回転ヘラ切り	灰白色 7.5Y8/2	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-22	須恵器・蓋	口径　(6.0) 器高　(1.2) 底径　—	ツマミのみ	ツマミは中央が窪む。	ツマミは貼り付け。	灰白色 7.5Y7/1	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-23	須恵器・蓋	口径　16.0 器高　(2.2) 底径　—	1/8	天井部はやや平坦に削られ口唇部は丸みをもち、返しが口唇部内側に摘み上げられる。	ロクロ成形。 天井部回転ヘラケズリ	灰白色 7.5Y7/1	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-24	須恵器・蓋	口径　(8.6) 器高　(1.1) 底径　—	1/8	天井部はやや平坦に削られ体部は緩く傾斜する。	ロクロ成形。 天井部回転ヘラケズリ	にぶい黄橙色 10YR7/4	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-25	灰釉・坏	口径　13.0 器高　(2.8) 底径　—	1/8	体部は大きく外反する。	ロクロ成形。 内外面に灰釉	オリーブ灰 2.5GY6/1	長石･石英粒を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-26	須恵器・壺	口径　(7.1) 器高　— 底径　— 最径　16.0	1/8残	頸部から体部のみ残存する。 肩部の張りは弱く、体部は内湾気味に立ち上がる。	ロクロ成形 外面；体部下部縦位のヘラナデ。 内面；ロクロ成形痕	灰白色 7.5Y7/1	長石･石英粒を含む

竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-27	須恵器・甕	口径　20.6 器高　(5.6) 底径　—	1/6	口唇部は肥厚し、上下に突出する。口縁部は外傾する。	外面；口縁部横ナデ 内面；口縁部横ナデ	灰白色 7.5Y7/1	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-28	須恵器・甕	口径 器高 底径			外面；平行タタキ 内面；ナデ	灰色 10Y6/1	長石･石英粒 を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-29	須恵器・甕	口径 器高 底径			外面；平行タタキ 内面；ナデ	灰色 10Y6/1	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-01	Fig.14-30	須恵器・甕	口径 器高 底径			外面；平行タタキ 内面；ナデ	灰色 10Y6/1	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴住居跡 SI-02	Fig.16-1	須恵器・蓋	口径　21.6 器高　(1.6) 底径　—	1/5残	天井部やや平坦に削られ、口唇部は丸みをもって短く摘み上げられる。	ロクロ成形 天井部は回転ヘラケズリ	灰色 10Y6/1	長石･石英粒 雲母片を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-1	土師器・坏	口径　13.8 器高　3.4 底径　5.4	1/2	体部は直線的に外傾する。口唇部がわずかに外反する。底部は肥厚する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	黒褐色 10YR3/1	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-2	土師器・坏	口径　14.4 器高　4.2 底径　6.4	1/3	体部は直線的に外傾する。口唇部がわずかに外反する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	黒褐色 10YR3/1	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-3	土師器・坏	口径　13.1 器高　3.8 底径　5.0	1/2	体部は直線的に外傾する。口唇部がわずかに外反する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	黒褐色 10YR3/1	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-4	土師器・坏	口径　14.0 器高　4.0 底径　6.3	1/3	体部は直線的に外傾する。口唇部が大きく外反する。	ロクロ成形。 外面；ロクロ成形痕 底部手持ちヘラケズリ	にぶい黄褐色 10YR5/3	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-5	土師器・坏	口径　13.6 器高　3.5 底径　5.6	完形	底部は平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。口唇部がわずかに外反する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	黒褐色 10YR3/1	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-6	土師器・坏	口径　15.0 器高　3.8 底径　9.0	1/4	底部は平底で、体部は内湾気味に外傾する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	浅黄橙色 10YR8/4	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-7	土師器・坏	口径　13.6 器高　3.5 底径　5.3	完形	底部は平底で、体部は大きく外傾して開く。内面は底部との境は明瞭ではない。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	赤褐色 5YR4/8	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-8	土師器・皿	口径　11.6 器高　2.4 底径　4.2	1/2	小さな底部から体部は、大きく外傾して開く。底部は肥厚する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	浅黄橙色 10YR8/4	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-9	土師器・坏	口径　11.8 器高　2.2 底径　4.4	完形	小さな底部から体部は、大きく外傾して開く。底部は肥厚する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	にぶい黄橙色 10YR7/4	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-10	土師器・坏	口径　12.0 器高　2.3 底径　3.4	1/2	小さな底部から体部は、大きく外傾して開く。底部は肥厚する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	黒褐色 10YR3/1	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-11	土師器・坏	口径　14.0 器高　(1.8) 底径　—	1/3	体部は大きく外傾して開く。体部は内湾気味である。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。	褐灰色 10YR4/1	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-12	須恵器・坏	口径　13.0 器高　(3.1) 底径　—	1/6	体部は直線的に外傾して開く。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。	灰色 7.5Y6/1	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-13	須恵器・坏	口径　— 器高　(3.2) 底径　7.0	1/4	平底の底部から体部は、大きく外傾して開き、口唇部付近でわずかに外反する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	灰色 7.5Y6/1	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-14	須恵器・坏	口径　— 器高　(3.3) 底径　6.4	1/3	平底の底部から体部は、大きく外傾して開き、口唇部付近でわずかに内湾する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	黒褐色 10YR2/2	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-15	須恵器・坏	口径　— 器高　(2.8) 底径　6.0	1/3	平底の底部から体部は、大きく外傾して開き、口唇部付近でわずかに内湾する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	灰色 5Y6/1	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-16	須恵器・坏	口径　— 器高　(2.2) 底径　6.4	1/2	平底の底部から体部は、大きく外傾して開き、口唇部付近でわずかに内湾する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	灰白色 5Y8/2	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-17	須恵器・坏	口径　— 器高　(1.8) 底径　6.7	1/2底部	平底の底部から体部は、大きく外傾して開き、口唇部付近でわずかに内湾する。	ロクロ成形。 外面；体部下端手持ちヘラケズリ。 底部手持ちヘラケズリ。	灰白色 5Y8/2	長石･石英粒 を含む
竪穴状遺構 SX-01	Fig.33-18	土師器・甕	口径　26.0 器高　(8.2) 底径　—	1/8	口縁部は大きく外反し、口唇部は短く摘み上げられる。肩部の張りは少なく、丸みをもちながら移行する。	外面；口縁部横ナデ 体部ナデ成形の後、横位のヘラケズリ。 内面；口縁部横ナデ。体部ヘラナデ。	橙色 5Y7/6	長石･石英粒 を含む

土製品・石製品

遺構番号	挿図番号	器種	大きさ	遺存度	特　　徴
竪穴住居跡 SI-01	Fig.15-31	土製支脚	長さ　15.23 幅　9 厚さ　——	完形	底部に木葉痕
竪穴住居跡 SI-01	Fig.15-32	軽石	長さ　13.5 幅　10.43 厚さ　5.08	完存	
竪穴住居跡 SI-01	Fig.15-33	刀子	長さ　3.74 幅　0.86 厚さ　0.27	刃先のみ	
土坑 SK-07	Fig.16-2	砥石	長さ　12.36 幅　11.86 厚さ　0.27	一部欠損	

第V章　土宮後遺跡

第１節　概要

調査対象地は2地点に分かれている。本遺跡の北東端に位置する地点を「調査区4」とし、同じく南東端にあたる地点を「調査区5・6」と呼称した。「調査区4」の地点は、比高差の少ない平坦面が広がる場所で、幅5.5m、長さ48mの東西に長い調査区である。ここから検出された遺構は、土坑3基と竪穴状遺構1基である。土坑は西側に集中し、竪穴状遺構は中央東側に位置する。次に「調査区5・6」も平坦面の広がる台地上にあるが、やや南側の台地縁辺部にあたる。調査区は幅2～3m、長さ87mの東西に細長い調査区で、ここから竪穴住居跡4棟、溝状遺構1条、柱穴状遺構5基が検出されている。なお、確認された竪穴住居跡は古墳時代前期の遺物を出土している。

第２節　検出された遺構と遺物

１．竪穴住居跡

SI－01（Fig.40）

調査区５・６の西端で確認された。西壁と東壁の一部のみ検出され、大半は南北の調査区外にかかる。確認された平面形は方形を呈するが、炉址の位置が不明のため主軸方位を確

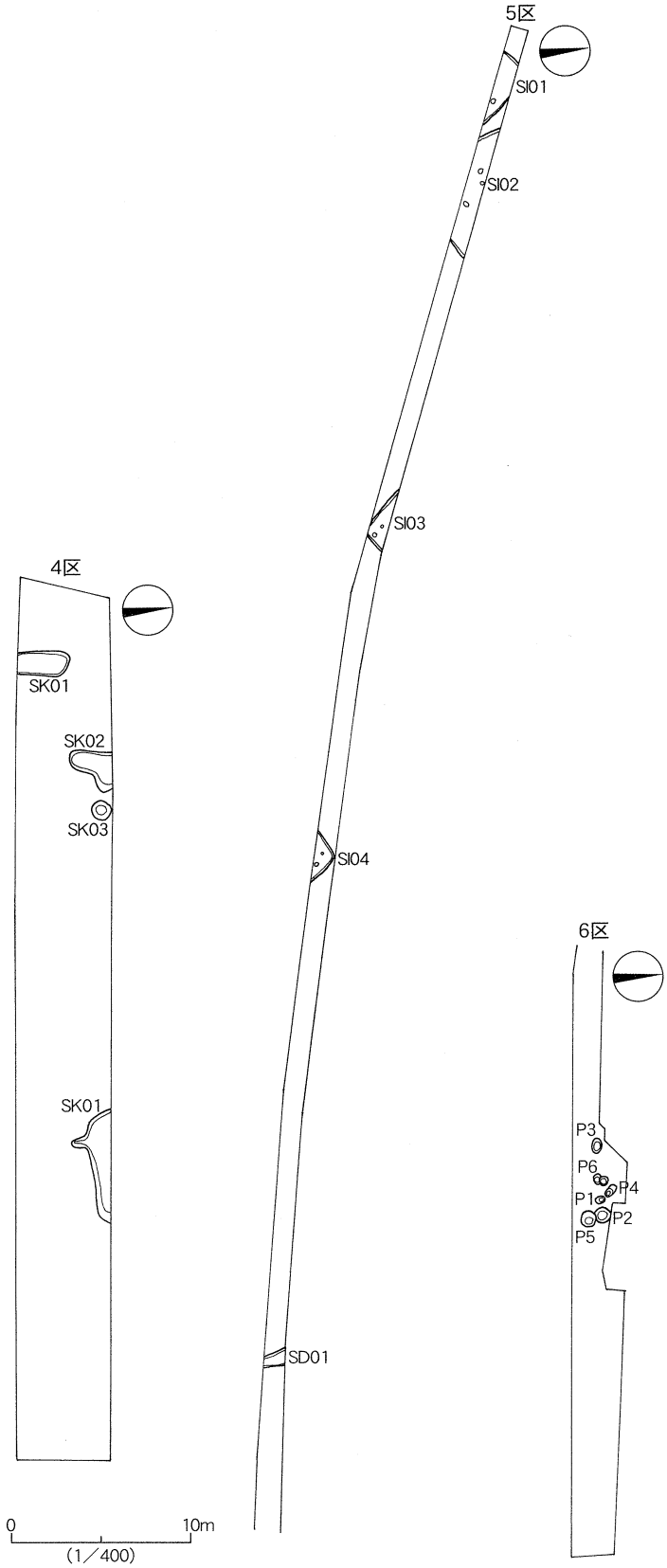
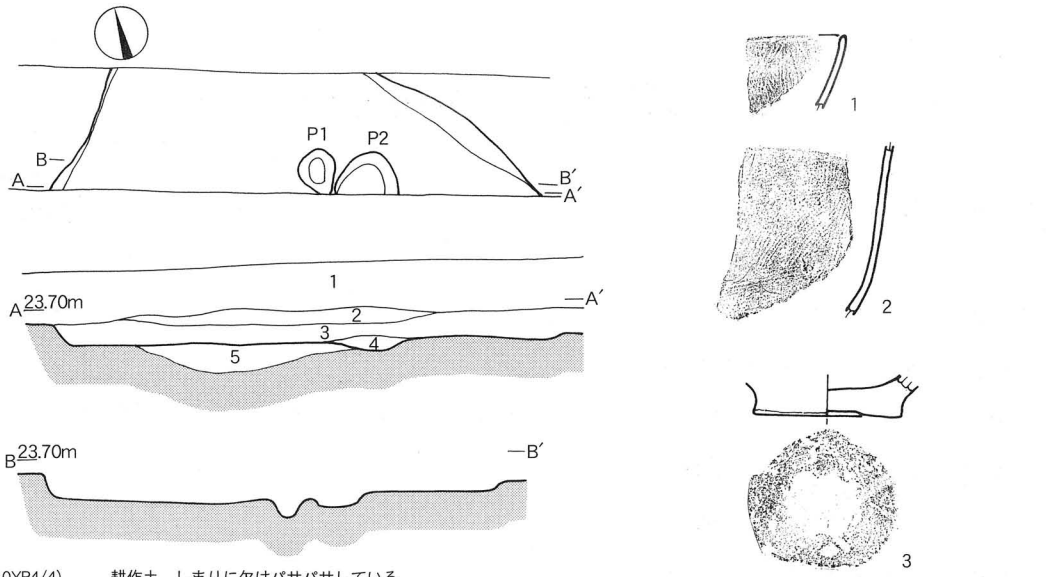
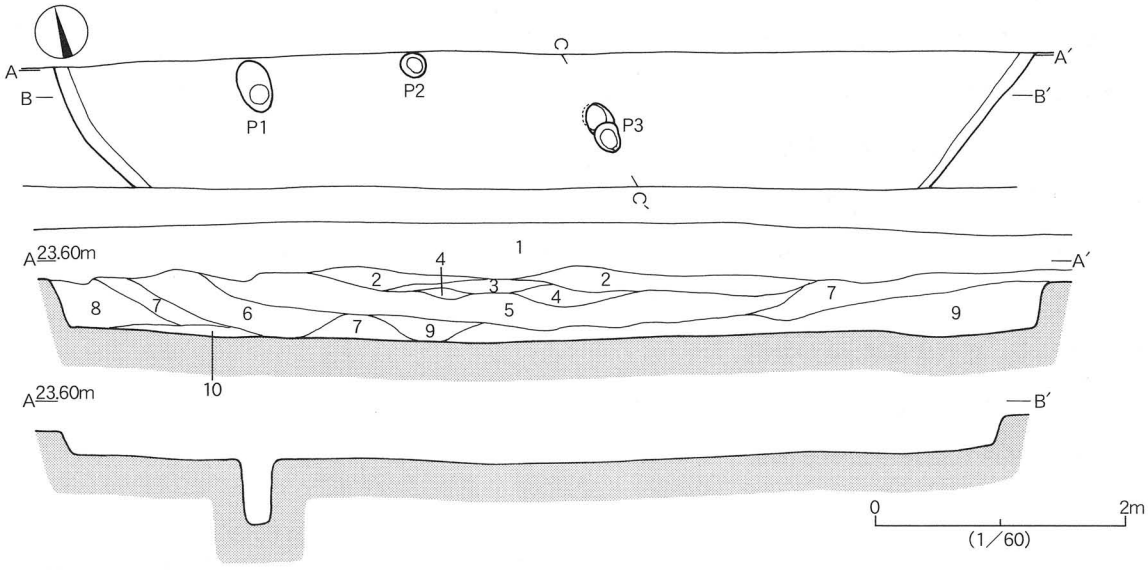


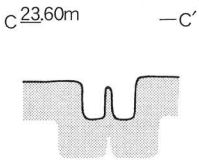
Fig.39　土宮後遺跡遺構全体図



1. 褐色土(10YR4/4)　耕作土　しまりに欠けパサパサしている
2. にぶい黄褐色土(10YR4/5)　ローム粒子・ロームブロックを多量に含む　しまりに欠ける
3. 黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子・ロームブロックを多量に含む　しまりにやや欠ける
4. 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　ローム粒子・ロームブロックを多量に含む　しまりにやや欠ける
5. 明黄褐色土(10YR6/6)　暗オリーブ褐色土粒子をわずかに含む　しまりがあり堅緻である（貼床下）

Fig.40　住居跡SI－01





1. 褐色土(10YR4/4)　耕作土　しまりに欠けパサパサしている
2. 褐色土(10YR4/4)　ローム粒子を多量に含む　しまりにやや欠ける
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ローム粒子・ロームブロックをわずかに含む　しまりに欠ける
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒子をわずかに含む　しまりにやや欠ける
5. 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　ローム粒子・ロームブロックを少量含むしまりに欠ける
6. 褐色土(10YR4/6)　ローム粒子をわずかに含むしまりに欠ける
7. 黄褐色土(10YR5/8)　ローム粒子をわずかに含む　しまりがある　粘性に欠ける
8. 黄褐色土(2.5Y3/2)　ローム粒子を多量に含む　しまりがある
9. 暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子を少量含むしまりがある
10. 明黄褐色土(10YR7/6)　黒褐色土粒子を少量含む　しまりがある

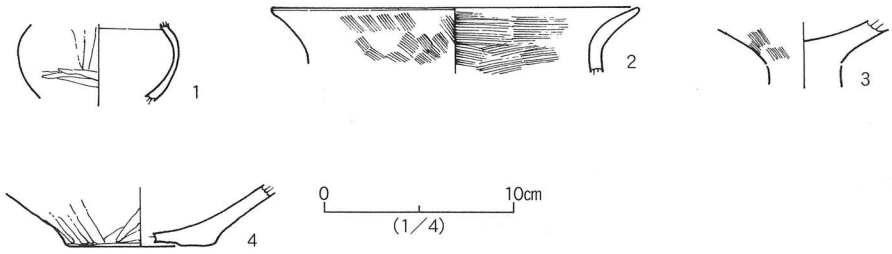


Fig.41　住居跡SI－02

定できないが、N－40°－Eを示している。確認面の西壁は1.05m、東壁は1.70mで、最大幅は3.85mを測る。壁の高さは15cmで、ほぼ垂直気味に立ち上がる。床面は多少の凹凸があるものの、ほぼ平坦である。貼床は明瞭ではないが、中央付近で10～20cmほど認められ、掘形の凹凸はそれほど目立たないものの、大きく掘削している。柱穴ではないが、浅い掘込のピットが２本東壁寄りで確認されている。P1は25×35cm、深さ11cmの楕円形を呈し、P2は隣接して穿ってあり、径50cmの円形で、深さ7cmである。覆土は自然堆積層で、上層と下層に大きく分層できる。上層はローム粒子・ロームブロックを多量に含むにぶい黄褐色土。下層はやはり多量のローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土である。

遺物は土師器破片が出土している。図示したものは3点で、坩と甕の破片と甕底部である。いずれも覆土内より検出されている。Fig.39－1は坩の口縁部破片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。外面縦位のハケ目調整。内外面とも赤彩処理が施されている。２は甕胴部破片。器厚は薄く、外面は斜位のハケ目調整が施されている。3は甕底部の破片である。底部周縁は輪状の貼り付けにより高くなっている。内面はヘラナデ。

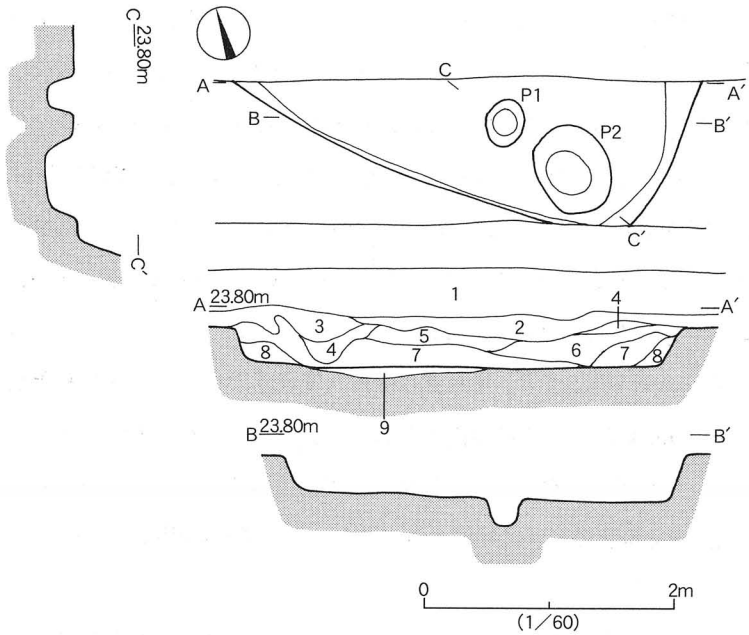
SI－02（Fig.41）

調査区5・6の西側でSI－01に隣接して確認された。西壁と東壁の一部のみ検出され、大半は南北の調査区外にかかる。確認された平面形は方形もしくは楕円形に近い形状を呈するが確定できない。また炉址の位置が不明のため主軸方位をやはり明確ではないが、東壁の方位からN－45°－Eを示している。確認面の西壁は1.2m、東壁は1.4mで、最大幅は7.7mを測る大形の住居跡と推定される。壁の高さは18～36cmで、わずかに緩傾斜で立ち上がる。床面は多少の凹凸があるものの、ほぼ平坦である。貼床は明瞭ではなく、掘形も目立たない。柱穴もしくは付帯施設としてのピットが３本検出されている。西壁寄りのP1は26×42cm、深さ53cm。床面の中央北側に位置するP2は18×20cm、深さ24cm。やはり床面中央南側に位置するP3は径20cm前後、深さ32cm、37cmの新旧2本穿ってある。覆土は自然堆積層で、9層に分層でき、大きく上層と中層、下層に分けられ、上層はわずかなローム粒子を含む褐色土・にぶい黄褐色土。中層は少量のローム粒子・ロームブロックを含む暗オリーブ褐色土。下層はわずかなローム粒子を含む褐色土と黄褐色土および多量のローム粒子を含む黒褐色土である。

遺物は土師器破片が出土している。図示したものは4点で、坩と甕および高坏の破片と甕底部である。いずれも覆土内より検出されている。Fig.42－1は土師器坩の体部破片である。体部は球形を呈し、外面は縦位および横位のヘラ削りによって整形されている。２は土師器甕の口縁部破片。口縁部はくの字状に外反し、肩部の張りは弱い。外面縦位および斜位のハケメ調整。内面横位のハケ目調整。3は高坏の坏底部の破片である。外面は斜位のハケメ調整。坏部内面はヘラナデ整形を施す。4は甕底部破片であ。底部周縁が輪状高まる。体部は縦位のヘラ削り。内面ヘラナデ整形。

SI－03（Fig.42）

調査区5・6の西側で確認された。南壁隅のみ検出され、北側の大半は調査区外にかかる。確認された平面形は方形を呈するが、炉址の位置が不明のため主軸方位を確定できないが、N－23°－Eを示している。確認面の西壁は2.95m、南壁は1.30mを測る。壁の高さは26～38cmで、やや緩傾斜で立ち上がる。床面は多少の凹凸があるものの、ほぼ平坦である。貼床は中央付近で5～10cmほど認められ、掘形の凹凸はそれほ



1. 褐色土(10YR4/4)　耕作土　しまりに欠けパサパサしている
2. 黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロックをわずかに含む しまりに欠ける
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ロームブロックをわずかに含む
4. 暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロックをわずかに含む しまりに欠ける
5. 褐色土(10YR4/4)　ローム粒子・炭化粒子をわずかに含む
6. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　ローム粒子をわずかに含む しまりに欠ける
7. 黄褐色土(10YR5/6)　ロームブロック・ローム粒子をわずかに含む
8. 明黄褐色土(10YR6/6)　ローム粒子を多量に含む しまりがある
9. にぶい黄橙色土(10YR6/3)　褐色土粒子をわずかに含む しまりがある（貼床下）

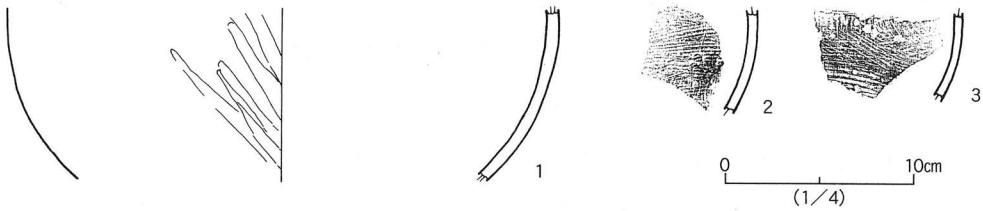
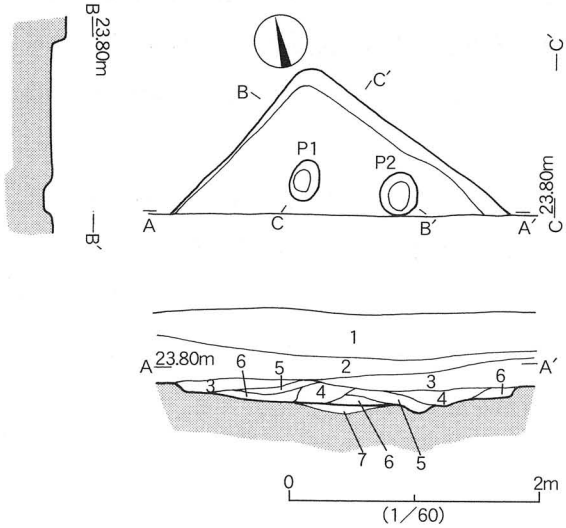


Fig.42　住居跡SI－03



1. 褐色土(10YR4/4)　耕作土　しまりに欠ける
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒子・ロームブロックを少量含み しまりに欠ける
3. 暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロックを少量含みしまりにやや欠ける
4. 黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒子を少量含みしまりにやや欠ける
5. 黒褐色土(10YR2/3)　ローム粒子・ロームブロックをわずかに含み しまりに欠ける
6. 褐色土(10YR3/3)　ローム粒子を多量に含む しまりにやや欠ける
7. 褐色土(10YR3/3)　ローム粒子を多量に含む しまりがあり堅緻である

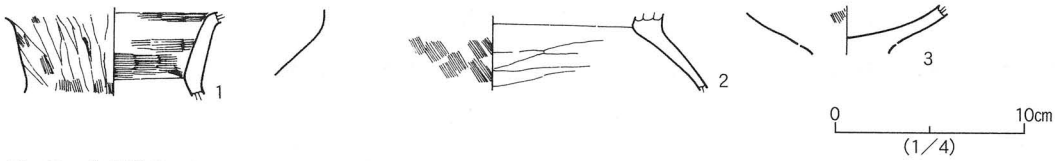


Fig.43　住居跡SI－04

4．柱穴状遺構（ピット）（Fig.46・47）

調査区5・6の東側で集中して検出されている。これらピット群が間尺に若干合わないものの上屋構造を呈するものか、あるいは柵列のように単純な構造のものであるか確定できていない。しかし、P3・4・5から9世紀代の須恵器・土師器が出土していることから、当時の建物構造物を想定してよいであろう。各柱穴の計測は下記のとおりである。

遺物としてP3・4・5より土師器・須恵器が出土している。Fig.47－1～4はP3から出土したもので、1は土師器坏で完形品である。丸味をもつ底部から体部は直線的に上方へ開く。ロクロ成形で底部は回転ヘラ切り後、ヘラナデが施されている。2は須恵器口縁部破片である。3はロクロ成形し、底部は一方向の手持ちヘラ削り。底部周縁も手持ちヘラ削り。4は須恵器甕胴部破片である。外面は平行タタキで成形している。Fig.46－1はP4から出土した須恵器坏底部破片である。ロクロ成形し、底部は一方向の手持ちヘラ削り。底部周縁も手持ちヘラ削り。Fig.46－2はP5から出土した須恵器蓋の破片である。口唇部に明瞭な稜をもつ。

（小川　和博）

Tab.3　柱穴状遺構一覧表

遺構番号	挿図番号	形態分類	規模			出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ		
P01	Fig.46	楕円形	65	50	70		
P02	Fig.46	楕円形	80	63	85		
P03	Fig.47	楕円形	107	78	73	土師器・須恵器	
P04	Fig.46	楕円形	98	44	48	須恵器・坏	
P05	Fig.46	円形	78	70	70	須恵器・蓋	
P06a	Fig.46	楕円形	55	47	30		
P06b	Fig.46	楕円形	51	32	30		

第Ⅵ章　まとめ

今回の調査では松本地区の広大な台地に立地する兎久保遺跡、古薬師遺跡、土宮後遺跡の3遺跡群の調査を同時に行うことができた意義は大きい。残念ながら調査対象地が幹線幅のみに限定されたことで、遺跡群をとりまく全体の様相は十分把握できていないとはいえ、いずれも今回初めて明らかになった遺跡であり、本来鬼怒川を背景に展開されてきた当遺跡群の在り方は十分伝えることができたと思う。

この松本地区の台地は東西南北約1kmの範囲に広がり、起伏の少ない平坦な地形を呈している。その西側半分に展開しているのが、この3遺跡である。兎久保遺跡は台地の北西側に位置し、西斜面に広がる集落跡である。ここで平安時代の竪穴住居跡1棟が検出された。そのほか井戸跡が2基発見されている。出土遺物から中～近世という幅ある時期設定となったが、畑地帯のこの一角に少なくとも中世びとの活きを残していることになる。これは南側に展開する土宮後遺跡でも中世の竪穴状遺構が存在することからも傍証できよう。

また台地のほぼ中央に位置するのが古薬師遺跡である。ここでは奈良時代の火災住居が発掘された。炭化した屋根部材である上屋架構が比較的よく遺存してものと考える。大規模な焼失家屋にしては屋根材であるカヤなどの炭化が認められないことも一考する必要があろう。炭化材は住居を中心に放射状に焼落しているようにみえるが、カマドの軸線（東西方向）をみると、カマド上と反対の入り口部では「ハ」の字状に広がり、「寄せ棟様」ではなく「入母屋様」もしくは「切り妻」型の屋根構造が推定できる。それは桁や梁材も明瞭に遺存しており、とくに梁材はカマド上では2本組になっていたようである。なお、柱根痕は検出することはできなかった。この住居跡は８世紀前半に比定されている。とくに土師器坏のうち底部が丸底気味で、口縁部と体部の境が明瞭な土器がほぼ完形品で2点出土している。前段階の様相を十分に残している坏である。また須恵器坏も特長がある。本来高台が付くべきところ、高台なしで、体部が外傾して、垂直気味の口縁部に至るものである。また開発の関係で半分しか調査できなかったが、いわゆる大形の竪穴状遺構が検出された。完掘していないことからその形態については判断に欠けるが、検出された形状は、平面形は楕円形を呈し、壁断面が緩傾斜をもつ擂鉢状である。底面は調査区外にあり、その形状は明確ではない。覆土は焼土や炭化物が多量に含む層が堆積しており、その覆土中より完形品を含む土師器・須恵器がまとまって出土している。とくに底部が極端に肥厚する皿は、本遺構の特徴的な土器であり、また土師器とも須恵器とも判断しかねる焼成の土器も含まれている。時期は9世紀後半に比定されている。遺構そのものについては、すでに成島一也氏をはじめとする多くの研究者によって集成・考察されている「氷室」と酷似するが、当該跡がそのものであるか確証できていない。そのほかここでは人骨と焼土・炭化物がそれぞれ多量に入っている土坑墓がある。遺物の出土がないことから時期決定はむずかしいが、一応近世の段階と判断した。

最後に台地南西部に位置する土宮後遺跡では古墳時代前期の住居跡が4棟検出された。トレンチ幅のため住居の2～3割程度の検出面積であるが、上述の2遺跡ではみられないもので、ここに展開する遺跡群が単純な立地条件をもっていないことを示唆している。したがって、限定された調査範囲から断定はできないが、

少なくとも集落群の移動は頻繁に実施され、一定の場所が選定されても、それが一時的で不安定な立地条件になっていることがわかる。また、3遺跡を取り囲む中央部では集落を形成しない傾向にあるらしい。ここは古墳時代以降現在と同様農耕地として利用していた可能性が高い。なお、周辺の様相は不明であるが、規模の大きな集落に吸収されることなく、古代・中世を経て、近世にいたるまで、集落形成において鬼怒川を後背地にして集落移動を繰り返すというパターンが、ここ松本地では普遍的におこなわれていたのであろう。

（小川　和博）

参考文献

成島　一也　1997「茨城県の「大形竪穴状遺構」について」研究ノート6号　茨城県教育財団

宮本長二郎　1996「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版

写真図版

遺跡群遠景

兎久保遺跡（調査区1）全景

古薬師遺跡（調査区2）全景

古薬師遺跡（調査区3）全景

土宮後遺跡（調査区4）全景

土宮後遺跡（調査区5・6）全景

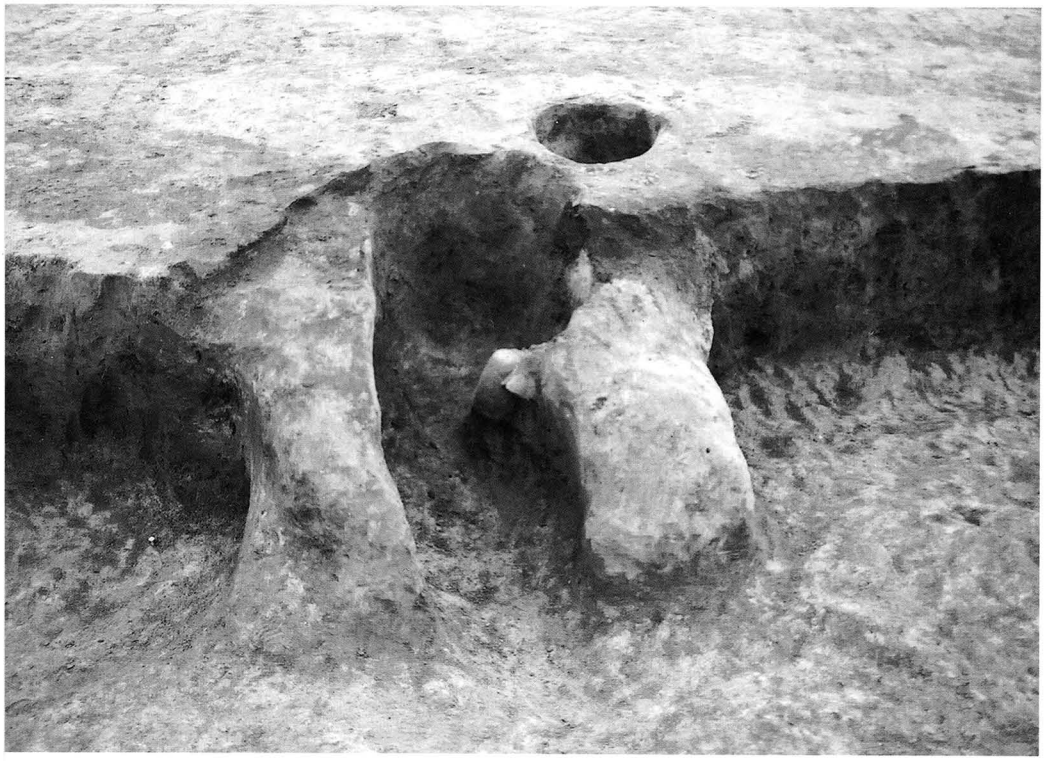
兎久保遺跡
竪穴住居跡SI－01

兎久保遺跡
井戸跡SE－01

古薬師遺跡
竪穴住居跡SI－01

古薬師遺跡
竪穴住居跡SI－01

古薬師遺跡
竪穴住居跡SI－01



古薬師遺跡
竪穴住居跡SI－01カマド

古薬師遺跡
竪穴住居跡SI－01

古薬師遺跡
竪穴状遺構SX－01

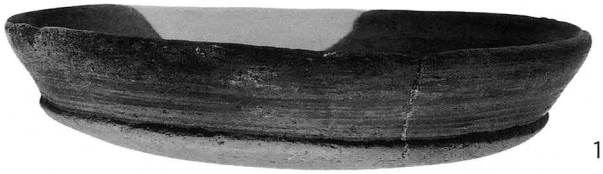
古薬師遺跡
竪穴状遺構SX－01

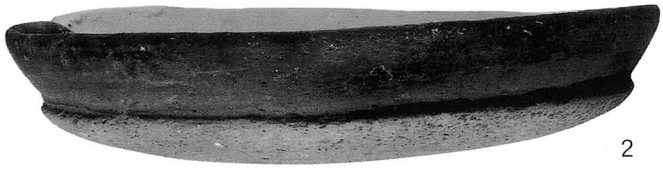
古薬師遺跡
柱穴状遺構群（調査区3）

古薬師遺跡
墓坑SK－29

土宮後遺跡
竪穴住居跡SI－01・02

土宮後遺跡
柱穴状遺構P3


1

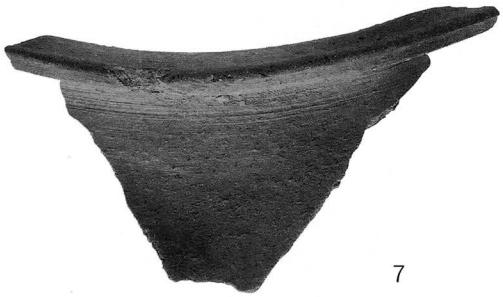

2

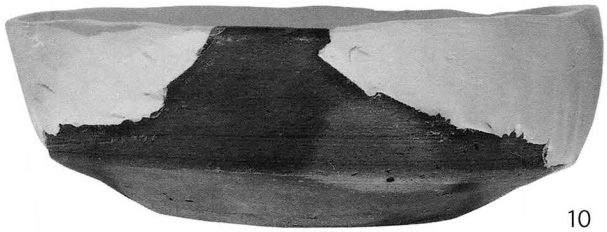
3

6

4

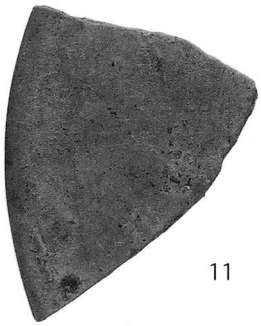
5


7

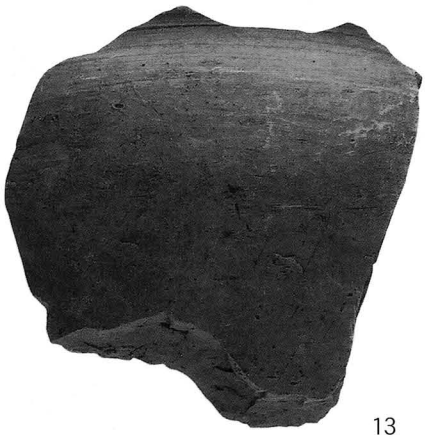

10

8

9

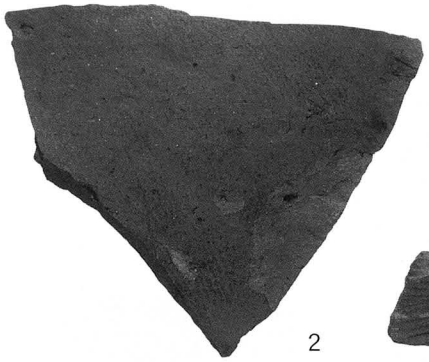

11

12


13

古薬師遺跡
1～13　SI－01

1


2

3

4

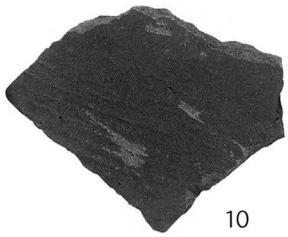
5

6

7

8

9


10

11

12

13

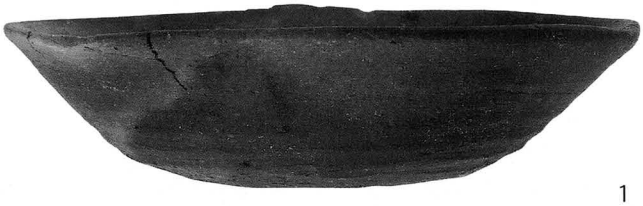
14

15

16

古薬師遺跡

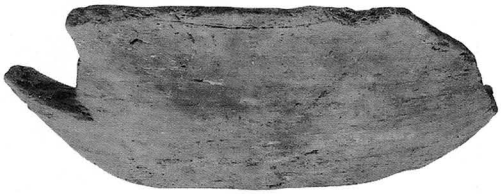
1～7	SI－01
8	SK－11
9	SK－07
10・11	SK－14
12	SK－41
13～15	P10
16	P63

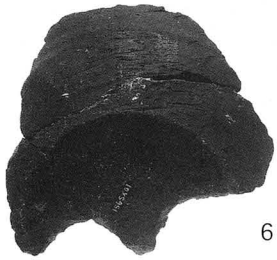

1

2

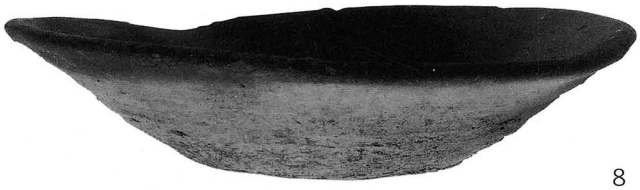
3

4

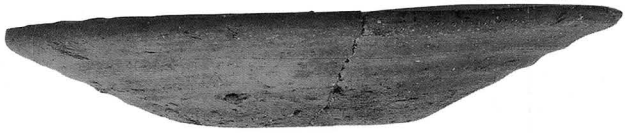

5

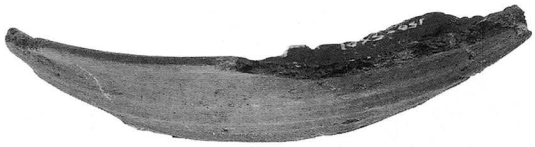

6

7


8

9


10


11

12

13

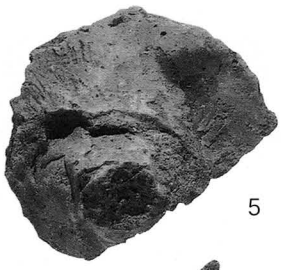
古薬師遺跡
1～13　SX－01

1

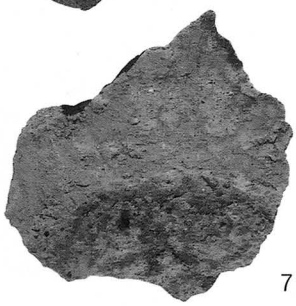
2

3

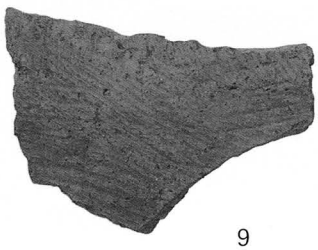
4

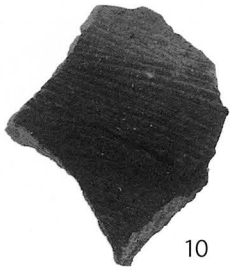

5

6


7

8


9


10

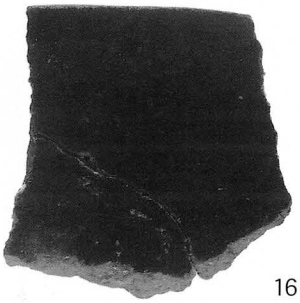
11

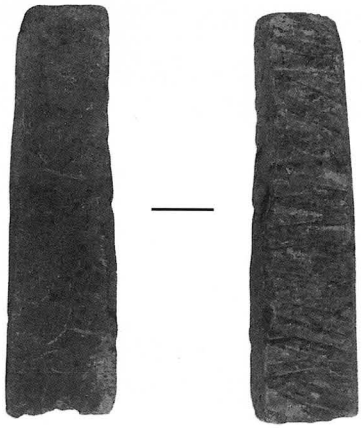
12

13

14

15


16


17

土宮後遺跡

1～3	SI－01	11～13	SI－04
4～7	SI－02	14	P3
8～10	SI－03	15～17	SX－01

報告書抄録

ふりがな	うさぎくぼ・ふるやくし・つちみやうしろ
書名	兎久保遺跡・古薬師遺跡・土宮後遺跡
副書名	
巻次	10
シリーズ名	八千代町埋蔵文化財調査報告10
編著者名	小川和博・大渕淳志・山野井哲夫
編集機関	八千代町教育委員会・㈲日考研茨城
発行機関	八千代町教育委員会
所在地	〒300－0592　茨城県結城郡八千代町大字菅谷1170
発行年月日	西暦2002(平成14)年3月15日

収録遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
兎久保遺跡(うさぎくぼいせき)	茨城県結城郡八千代町(いばらきけんゆうきぐんやちよまち) 大字松本字西ノ台谷(おおあざまつもとあざにしのだいたに) 354外	08521	町番号 155	36度 10分 24秒	139度 51分 28秒	20020903 ～ 20021102	400㎡	畑地帯総合整備事業に伴う調査
古薬師遺跡(ふるやくしいせき)	茨城県結城郡八千代町(いばらきけんゆうきぐんやちよまち) 大字松本字古薬師65外(おおあざまつもとあざふるやくし)	08521	町番号 156	36度 10分 20秒	139度 51分 59秒	20020903 ～ 20021102	848㎡	
土宮後遺跡(つちみやうしろいせき)	茨城県結城郡八千代町(いばらきけんゆうきぐんやちよまち) 大字松本字土宮後(おおあざまつもとあざつちみやうしろ) 327外	08521	町番号 157	36度 10分 16秒	139度 51分 28秒	20020903 ～ 20021102	607㎡	

種別	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
兎久保遺跡(うさぎくぼいせき)	集落跡	平安時代 中世 近世	竪穴住居跡　1棟 井戸跡　2基 土坑　2基 溝状遺構　2条	土師器	平安時代集落の一部を検出
古薬師遺跡(ふるやくしいせき)	集落跡	奈良時代 平安時代 中世 近世	竪穴住居跡　2棟 土坑・墓坑　41基 溝状遺構　1条 竪穴状遺構　1基 柱穴状遺構　118基	土師器・須恵器 石製品・刀子 土製支脚 銭貨	奈良時代の焼失家屋を検出 平安時代の竪穴状遺構を検出 近世の墓域
土宮後遺跡(つちみやうしろいせき)	集落跡	古墳時代 平安時代 中世 近世	竪穴住居跡　4棟 土坑　3基 溝状遺構　1条 柱穴状遺構　5基 竪穴状遺構　1基	土師器・須恵器 焙烙・陶器 砥石	古墳時代前期の集落の一部を検出

八千代町埋蔵文化財調査報告書10

兎久保遺跡・古薬師遺跡・土宮後遺跡

平成14年(2002)3月10日　印刷
平成14年(2002)3月15日　発行

発　行　八千代町教育委員会
茨城県結城郡八千代町大字菅谷1170　TEL　0296-48-0525

編　集　八千代町教育委員会
有限会社　日考研茨城
茨城県稲敷郡江戸崎町佐倉3321－1　TEL　0298-92-1112

印　刷　有限会社　田　辺　印　刷
茨城県稲敷郡江戸崎町佐倉3321－5